南箕輪の史跡

南箕輪の史跡

序

わが郷土南箕輪村が今日あるは悠久の歴史に培われ、先人がこの郷土を愛し、営々として守り育ててきた努力のたまものである。古きを尋ねて今を知り、未来を考えようとする風潮は近年とみに重んぜられるようになった。

然るに一面最近の世情は変動が激しく、ために、価値感の変化や開発への激しい躍動のため、文化財や歴史的遺物が損傷されたり、壊滅寸前におかれているものが少なくない。

村内の歴史的遺産の所在や由来、価値等を知りたいという要望にこたえるため、村誌編纂のための基礎調査のうちから特に歴史的遺産に限ってこれをまとめ、小冊誌として発刊することとした。

村誌編纂専門委員や文化財専門委員、さらには調査研究に協力された各部落の区長さんはじめ、有識者の方々に深甚の敬意と感謝をささげるとともに、多くの方々に、郷土理解のためこれを活用されることを期待する次第である。

南箕輪村教育委員会
教育長　安積正一

目次

題字　村長　三沢　準

序　教育長　安積正一

第一　久保……一
一　久保の由来……二
二　神社……三
(一)　神明宮……三
(二)　境内社……五
(三)　山の神址……五
三　寺堂……六
(一)　西念寺址……六
(二)　境内堂仏……七
1　観音堂……七
2　子安観音……七
3　境内の石佛石塔……七
(三)　久保寺址……八
四　久保学校……九
五　古跡……九
(一)　棚木城址……九
(二)　箕輪遺跡……九
(三)　丸塚……一三
(四)　天王……一三
六　碑……一四
(一)　利沢千秋……一四
(二)　桐亭良亮筆塚……一五
(三)　一貫句碑……一五
(四)　庚申塚……一六
(五)　水神……一七
(六)　道祖神……一七
七　井堰……一七
(一)　上井下井……一七
(二)　沢……一八
第二　中込……一九
一　中込の由来……一九
二　中込城址……二〇
第三　塩ノ井……二三
一　塩ノ井の由来……二三
二　神社……二四
(一)　塩ノ井神社……二四

(二) 境内社 …… 二五
1 三峯社秋葉神社合殿 …… 二五
2 御嶽神社碑 …… 二五
3 天満宮 …… 二五
三 西光寺 …… 二五
四 古跡 …… 二六
(一) 天伯遺跡 …… 二六
(二) 古宮址 …… 二七
(三) 郷士ケ窪 …… 二八
(四) 塚田 …… 二八
(五) 富士塚址 …… 二八
(六) 上人塚 …… 二八
五 碑 …… 二九
(一) 開田記念碑 …… 二九
(二) 征矢吉兵衛歌碑 …… 二九
(三) 征矢貫通歌碑 …… 三〇
(四) 征矢真白翁碑 …… 三〇
(五) 征矢政十郎君碑 …… 三一
(六) 庚申塚 …… 三三
(七) 寒念仏供養碑道標 …… 三三
(八) 道祖神 …… 三三
第四 北殿 …… 三三
一 北殿の由来 …… 三四
二 神社 …… 三四
(一) 北殿神社 …… 三四
(二) 天満宮 …… 三六
(三) 里宮神社址 …… 三七
(四) 駒形大明神址 …… 三九
三 寺・霊場 …… 三九
(一) 松林寺 …… 三九
(二) 新四国霊場 …… 四二
四 北殿学校 …… 四五
古跡名勝 …… 四五
(一) 倉田の城 …… 四五
(二) エドヒガン櫻と庚申塚 …… 四七
(三) おきな塚 …… 四八
1 芭蕉句碑 …… 四八
2 蠖堂矢部先生筆塚 …… 四九
3 山嶽信仰碑 …… 五〇
六 碑 …… 五〇

(一) 倉田寛幹先生歌碑……五〇
(二) 人には自らはの碑……五一
(三) 倉田翁頌徳碑……五一
(四) 伊藤翁筆塚……五三
(五) 神社佛閣奉拝塔……五三
(六) 水神……五三
(七) 道祖神……五三
七 井堰……五三
(一) 天竜井……五三
(二) 中島井……五四
八 街道……五四
(一) 北殿宿……五四
(二) 北殿橋……五九
(三) 道標……六〇
(四) 水準点……六〇
第五 南殿……六一
一 南殿の由来……六二
二 神社……六二
(一) 殿村八幡宮……六二
(二) 境内社……六五
(三) 三峯神社……六六
(四) 御嶽大神……六六
(五) 山の神……六七
三 堂庵……六七
(一) 行者堂……六七
(二) 地蔵庵址……六九
(三) 三十三観音……七〇
(四) 十王堂址……七一
四 南殿学校……七一
五 古跡名勝……七二
(一) 宮ノ上遺跡……七二
(二) 有賀ノ城……七三
(三) 猪ノ子柴……七三
(四) 長慶塚……七四
(五) 不死清水……七四
六 碑……七五
(一) 横井記念碑……七五
(二) 迪斎先生筆塚……七六
(三) 南殿里六人一首寿碑……七七
(四) 霊松一本木址……七八

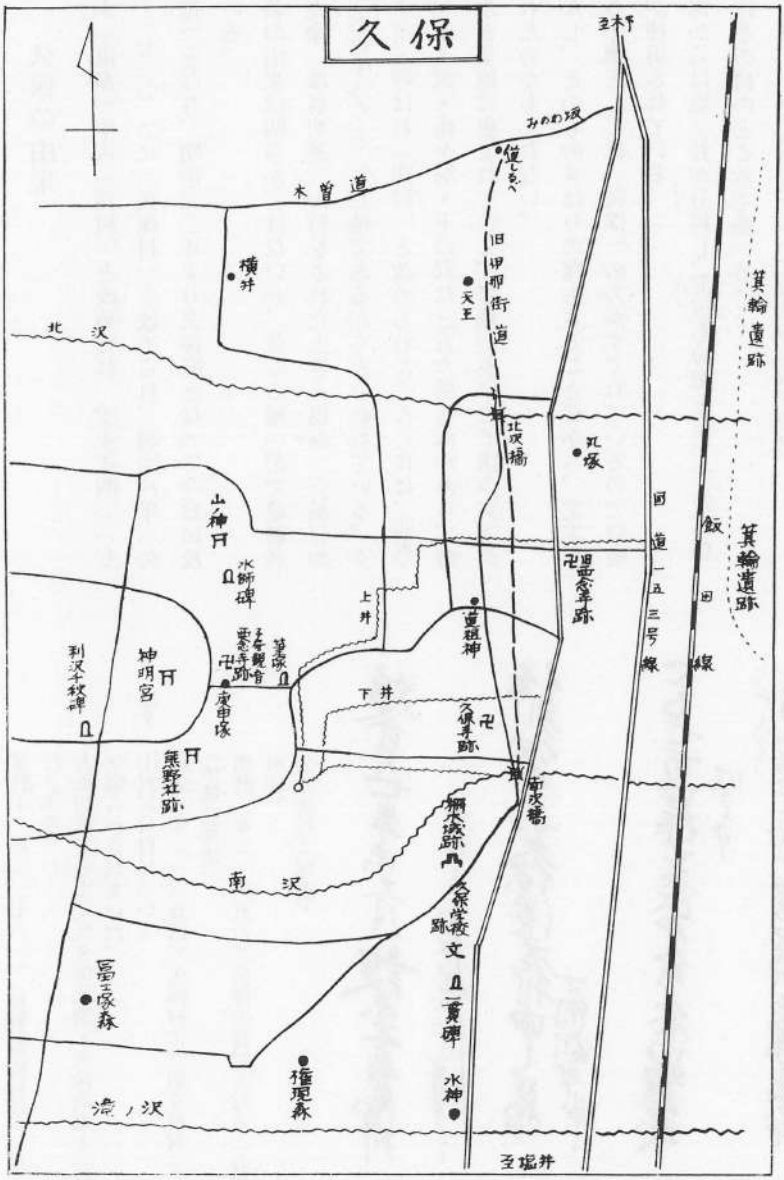
㈤ 慰霊碑 …… 七九
㈥ 母子像 …… 八一
㈦ 小学校歌碑 …… 八一
㈧ 庚申塚 …… 八二
七 井堰 …… 八三
㈠ 大川原井 …… 八三
㈡ 大泉川井 …… 八三
第六 田畑 …… 八五
一 田畑の由来 …… 八六
二 神社 …… 八六
㈠ 田畑神社 …… 八六
1 諏訪社 …… 八七
2 神明宮址 …… 八七
3 境内社 …… 八七
4 御頭郷祭と田畑神社 …… 八八
㈡ 山の神 …… 八九
三 堂 …… 八九
㈠ 地蔵堂とお子安様 …… 八九
㈡ 薬師堂址 …… 九一
四 田畑学校 …… 九一
五 古跡 …… 九三
㈠ 清水城址 …… 九三
㈡ 日戸氏館址 …… 九三
㈢ 富士塚（浅間塚） …… 九四
㈣ 弁天ケ崎 …… 九七
六 碑 …… 九八
㈠ 芭蕉翁碑 …… 九八
㈡ 辞世歌碑 …… 一〇〇
1 松沢里朝辞世 …… 一〇〇
2 松沢剣叟辞世 …… 一〇〇
3 松沢善右ヱ門辞世 …… 一〇〇
㈢ 庚申塚 …… 一〇〇
㈣ 道祖神 …… 一〇三
㈤ 水神 …… 一〇三
七 井堰 …… 一〇三
㈠ 半沢井 …… 一〇三
㈡ 長島井 …… 一〇四
八 街道 …… 一〇四
㈠ 水準点 …… 一〇四
㈡ 道標 …… 一〇五

第七　神子柴……一〇六
一　神子柴の由来……一〇七
二　神社……一〇七
㈠　神子柴神社……一〇七
㈡　御射山社……一〇九
三　薬師堂……一一二
四　神子柴学校……一一三
五　古跡名勝……一一三
㈠　神子柴遺跡……一一三
㈡　三本木原遺跡……一一五
㈢　曽利目遺跡……一一五
㈣　五輪塔……一一五
㈤　古城……一一五
㈥　内城……一一六
六　碑……一一七
㈠　庚申塚……一一七
㈡　道祖神……一一七
七　井堰……一一八
㈠　半沢井……一一八
㈡　川原井……一一八
八　橋……一一八
㈠　大清水橋……一一八
㈡　神子柴橋……一一八
第八　沢尻……一一九
一　沢尻の由来……一二〇
二　神社……一二二
㈠　日光社月光社……一二二
㈡　伊雑皇大神宮……一二三
㈢　山の神……一二三
㈣　諏訪社……一二三
三　恩徳寺……一二四
四　沢尻学校……一二〇
五　宮島氏宅址……一二三
六　碑……一二三
㈠　成田山開山記念碑……一二三
㈡　庚申塚……一二四
㈢　水神……一二四
第九　南原……一二五
一　南原の由来……一二六
二　二宮神社……一二七

㈢ 新井 ……一六六
第一二 北原 ……一六九
一 北原の由来 ……一六九
二 諏訪神社 ……一七〇
三 権理塚 ……一七〇
四 以和清水の碑 ……一七一
第一三 全村 ……一七二
一 南箕輪の由来 ……一七三
二 街道 ……一七七
㈠ 権兵衛街道 ……一七七
㈡ 春日街道 ……一八〇
㈢ 伊那街道 ……一八二
三 田中城址 ……一八六
四 南箕輪飛地 ……一八九
五 大泉川 ……一九一
六 西天竜水路 ……一九二
七 碑 ……一九五
㈠ 鐘水豊物の碑 ……一九五
㈡ 造林記念碑 ……一九七
㈢ 御射山分割記念碑 ……一九八
㈣ 清寧の碑 ……一九九
㈤ 村上明彦先生胸像 ……一九九
参考
一 山の神 ……二〇一
二 水神 ……二〇一
三 庚申信仰 ……二〇一
四 道祖神 ……二〇一
五 観音信仰（附馬頭観音） ……二〇二
六 地蔵信仰 ……二〇三
七 薬師信仰 ……二〇三
八 十二神将 ……二〇三
後記 ……二〇四

三　南原遺跡……一三八
四　碑……一三九
㈠　南原「拓魂」の碑……一三九
㈡　西原「拓魂」の碑……一四〇
㈢　天満宮碑……一四〇
第一〇　大芝……一四一
一　大芝の由来……一四一
二　大芝神社……一四二
三　古跡……一四三
㈠　大芝原遺跡……一四三
㈡　大芝東遺跡……一四四
四　開拓記念碑……一四五
第一一　大泉……一四六
一　大泉の由来……一四七
二　神社……一四八
㈠　大和泉神社……一四八
㈡　境内社……一五一
1　瘡守稲荷社……一五一
2　天満宮……一五二
3　蚕玉社……一五二
4　太子様……一五三
㈢　山の神……一五三
三　勝光寺……一五五
四　大泉学校……一五六
五　古跡名勝……一五八
㈠　高根遺跡……一五八
㈡　大泉氏の舘址……一五九
㈢　一里塚址……一六〇
㈣　蛇塚……一六一
㈤　立石……一六二
六　碑……一六二
㈠　庚申塚……一六二
㈡　道祖神……一六三
㈢　開懇之碑……一六三
㈣　清水重賢翁碑……一六四
㈤　清水柳茂辞世碑……一六五
㈥　清水雅康追悼句碑……一六五
七　井堰……一六五
㈠　下井……一六五
㈡　上井……一六五

第一　久保


久保
至本下
みのわ坂
値しるべ
木曽道
旧甲州街道
横井
天王
北沢
北沢橋
孔塚
箕輪遺跡
回道一五三号線
飯田線
箕輪遺跡
山神
水師碑
上井
道祖神
笠塚
神明宮
下井
久保寺跡
南沢橋
南沢
久保学校跡
文二郎碑
水神
至塩井

一　久保の由来

古来「供奉」中古「窪村」と改められ、宝永年間（一七〇四～一七一〇）に「久保村」と改められ、明治八年「久保耕地」となり、明治二二年より久保区となって今日に及んでいる。

区名の由来は明らかではないが、昔この地一帯で建御名方刀売命（諏訪明神）が狩をされたとき「供奉（クブ）」（行列に加わってお供すること）した地であるからといわれている。クブがクボと呼ばれ「窪村」と改められた。ここには、北沢・南沢・滝ノ沢・栃ケ洞・下の沢など五カ所も沢があり、豊かな水と草地に恵まれていて、窪地が多いので窪の文字が使われたのかもしれない。

しかし、そのものずばりの窪もさることながら、文字からくる印象としては「久保」の方がすぐれているので以後これが使用されている。

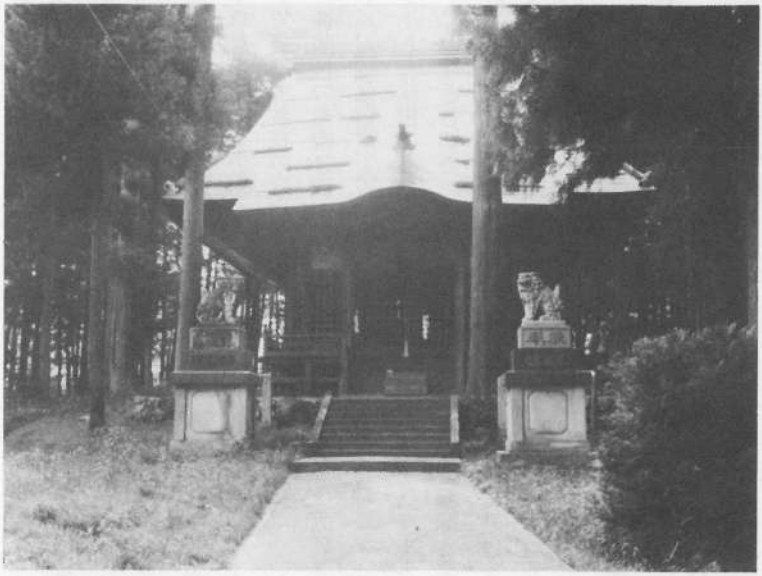
久保からは塩ノ井が分村し[注1]、沢尻も分郷[注2]となっているが、詳細はその村のところで述べる。

注1　塩ノ井分村については次の二説がある。
延享五年（一七四四）笠原政市著「みのわ」
宝暦十一年（一七六一）（長野県町村誌）（塩ノ井の注2参照）
大正初期ころまでは久保北割・久保南割と一般に呼び慣らわされていた。

注2
(1)沢尻分村について
承応三年（一六五四）久保村より取立枝村となる（伊那温知集）
明暦二年（一六五六）久保の枝村となる（長野県町村誌）
(2)免状写（写真）

延宝七年久保沢尻村
免状の初めと終り（大東文書）

二　神社



神　明　宮

(一) 神明宮

神明宮は久保部落中央西寄りの西天竜水田とほぼ同じ段丘の東端、南箕輪村一二二九ノ二神明宮所有の森林に囲まれた除籍地にある。

祭神

天照皇太神・豊受大神・伊弉諾尊・伊弉冉尊・事解男命・速玉男命

由　緒

神明宮の創建は慶安二年(一六四九)ころと考えられる。

神明宮本殿内の棟札によると明治二六年(一八九三)同神明宮の南方約一〇〇メートルの台地にあった熊野権現社を神明宮社殿と並べ、同じ覆屋内に合祀されている。熊野権現はいつの時代にできたか不明であるが、神明宮の造営とほぼ同じ時代と思われる。

宮　殿

神明宮の拝殿は向拝付入母屋正面唐破風登り高欄三段木階で、正面角柱、木鼻は獅子象等獣が用いられている。

間口七・八メートル奥行八・六八メートル軒一・九七メートル、そのうち前方の床を一五センチメートル低くして拝殿としている。後方が覆屋で右に神明宮本殿左に熊野社

本殿と並べて置かれている。この拝殿覆屋と一緒になったいわば覆屋拝殿の妻に権首塚（権首組）のあるのが少し変った点のようである。

この覆屋拝殿の屋根は草葺であったが、時代が進むにつれて屋根替の材料も屋根葺職人も少なくなったため、昭和五〇年草葺のままその形をなるべく保ちながら上へカラートタンで覆って現在の屋根とした。

神明宮の本殿は間口二・三七メートル奥行二・九四メートル、熊野権現の本殿は間口一・九〇メートル奥行二・三八メートル屋根の高さも神明宮より約五九センチメートル低く、両社とも切妻の流れ造り、平入りで前面に浜縁とよばれる低い床縁をつくり、屋根の前流れを延長して階段を覆っている。側面から見ると一方の屋根が長く流れているのでこの名がある。両者とも縁を巡らし脇障子を設けてある。一見して熊野社の方が彫物等手細かにできているが、熊野社の彫物は後で付けたように見受けられる。

神明宮祭奉納演芸・娯楽等氏子を楽しませた舞台は石段を登りつめた左側にあったが、修理が困難であり、その必要性も稀薄になってきた等々から昭和二七年壊してしまった。

神明宮入口の右側の水屋は、間口二・五五メートル奥行一・三メートルで左右のヒノキの丸柱は掘立の形式をとってある。中の手洗石は大正六年四月大泉所山大泉川原から久保村中総出で修羅（当時は「橇」と言った）に乗せて引き出した。その壮観が偲ばれる。この修羅は神明宮覆屋北側の板壁によりかけてある。

修　羅

一の鳥居は花崗岩円柱形にみがいた神明鳥居、二の鳥居は最初の石段と次の石段との踊場にヒノキの丸木造りの神明鳥居で、氏子の太田屋の寄進による。

上の石段を登りつめたところの両側に「明和七年寅六月」（一七七〇）と刻まれた石灯籠が建っている。

つづく参道は幅二・七四メートルの石畳が一六・二メー

トル敷かれ、この石畳の終り近くに一対の狛犬が約二メートルの台石の上に置かれ、狛犬の直接の台石に「国威宣揚」「八紘一宇」「海軍大将塩沢幸一題」と刻まれている。この一の鳥居・石段修理・石畳・狛犬等は何れも昭和一七年に久保区出身の故丸山東作氏の寄進によったものである。

(二) 境内社その他

なお久保区内に散在していた秋葉神社・稲荷社・浅間神社・大山神社・疱瘡神その他の神社を神明宮覆屋の南面板壁に合祀してある。それとは別に境内に石造りの金刀比羅宮・天満宮・石碑の蚕玉神社がある。

石段を登りきった左側に目通り二・二メートル樹高三五メートル推定樹齢三四〇年のコウヤマキがあり、また昭和初期ころまでは、推定樹齢二〇〇年以上のアカマツが数十本立っていた。

(三) 山の神社址

神明宮の南側の道を大泉所山に通ずる道路が、西天竜水田地帯の中途で大泉方面へ分岐するところあたりの地籍を山の神といっている。山の神が神明宮境内に合祀される以前はこの地にあったであろうと推定される。

注3 棟札写

(1)奉造立当社神明御宝殿
　　榧之天日本国中信諏訪箕輪領久保
　　延宝七巳未天九月　神主鳥山

(2)奉造立内外神明宮　享和三年十月
　　神主鳥山

(3)葺替　熊野三社　文化二年康栄巳八月六日
　　神主鳥山

熊野権現社本殿

三　寺堂

旧西念寺と観音堂

本尊阿弥陀如来

(一)　西念寺跡

神明宮下の「上の平」にあった。今はここに観音堂が建てられている。

本尊　阿弥陀如来

由　緒

西念寺の創建については諸説がある。一説に、[注4]木下の法界寺は元来久保にあって、西念寺といわれたものを元禄年中（一六八八～一七〇三）移し寺名を改めたという記録から推すと、元禄以前に創建されたもののようである。一説に[注5]寛永三年（一六二六）久保村西念寺を移したという説もあるが「法界寺文書」は前の説によっている。

法界寺と改名された後は西念寺は廃寺同様になっていたが、天保二年（一八三一）久保中段地中央突端の丸山地籍に再建された。明治四四年に現在の地に移転した。その跡地は飯田線路敷の土砂に売却し、現在はそこに三戸の人家が建ったため昔の面影は全くなくなった。その後昭和四三年一月火災により全焼した。焼失の後直ちに堂を建て、金麗山西念寺を復興したが無住で定った檀徒はない。

注4　浄土宗光含山　飯田西教寺末法界寺
元来此寺久保村ニ有テ西念寺ト云。後に元禄年中板倉頼母箕輪御領知之節此所へ引渡し寺名を改（伊那郡神社仏閣記）

注5　寛永三年（一六二六）脇坂淡路守息中務少輔知行の節、西念寺御取立、御建立に付、寺地久保村西念寺と申し木下村より六、七町未申（西南）方に相当り沢過ぎにあり、光含山法界寺に相改り申候。（光含山記録）

(二) 境内堂仏

1 観音堂

焼失した西念寺の南側に接続して、別棟に馬頭観音[注6]が祀られてあった。上伊那諏訪八十八カ所の霊場の第三四番の札所として賑わった時もあった。この堂も西念寺全焼の際類焼したが直ぐ再建し、本尊は黒焦げになったので以来秘仏とし、新たに瀬戸団治氏作の観音を前立本尊としてまつっている。秘仏は頭上に白馬を戴く三面八壁の忿怒相の木像である。

第三四番としての御詠歌が残っている。

うららかに黄金生むてふ真清水は
やがて弘誓のうみとなるらむ。

2 子安観音

西念寺お堂のすぐ南に、子を抱いた石仏が高さ五〇センチメートルの台座の上に安置されている。子安観音と呼ばれ安産子育ての観音様として村民から親しまれている。昔、お産を助け安産させることの上手な女性の死後その徳を讃え、冥福を祈って建てられたと伝えられ、たばこの好きな人であったというので、ときどきたばこが供えられているのを見受ける。

3 境内の石仏石塔

この境内には村内から集められた馬頭観音八〇基無縫塔一〇基、その他若干の破壊された石塔がある。

新観音堂

子安観音

(三) 久保寺跡

久保中段地南端の高台に位置し、現在の矢沢氏「坂上」の宅地にあった。創立は鎌倉時代（一一九二～一三三三）といわれ、京都臨済派妙心寺の直末で渡来僧大覚禅師の開山と伝えられていた。多聞山久保寺と呼び本尊は毘沙門天であった。古くは久保庵といわれ元禄年代（一六八八～一七〇三）より久保寺と称した。有名な大覚禅師の開山であるのにこれを疵護する有力者も無く寺領も乏しく貧しい寺で、無住の時もあった。たまたま世話する人があって大正一二年岡谷市湊区花岡に移譲した。移譲に当っては諏訪郡中州村法華寺と、伊那町福島乾徳寺両寺の住職を保証人として契約[注8]を結び寺号冥加金として金三百円を受取り、寺所有の不動産は無償にて譲渡した。

注6 伊那志略等には毘沙門堂と記されている。この毘沙門は四天王の一で多聞天の別名である。四天王と並べていうときには多聞天の名を用いる。常に仏の説法の道場を守護しながら法を聞くから多聞天ともいうが福徳、富貴の神としても尊崇され、後世は七福神の一ともなった。

注7 毘沙門堂　本臨済宗、名久保庵後廃絶、今則建堂。（伊那志略）

元来久保庵と云臨済寺也。退転す。（伊那神社仏閣記）

注8 覚　書

今般上伊那郡南箕輪村久保久保寺ヲ諏訪郡湊村花岡ヘ移転候ニ付テハ従来ノ縁故ヲ継続スル趣旨ニヨリ左ノ両項ニ協定ス

一　久保区一般ヲ信徒トシ法会等ノ節ハ区長ェ案内状ヲ発スル事　山号寺号ハ将来変更セザルコト

二　久保寺境内ニ記念碑建設ノ際ハ応分ノ勧募ニ応ズル事

右ノ通リ必ズ履行可致候也

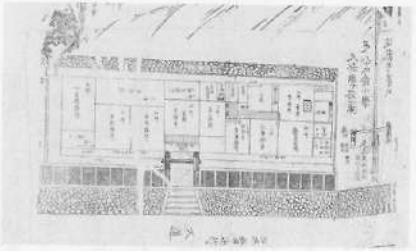
大正十三年五月弐拾四日（久保区有文書）

旧久保寺

旧久保寺毘沙門天
（岡谷市湊花岡久保寺蔵）

四　久保学校

久保学校は久保南部旧三州街道ぞい、西側の白山社の北寄り、一段高い所にあった。



旧久保学校の図

明治六年六月二日に十八番中学区一〇八小学区九八番久保学校として創設され、同七年十一月二三日開校の運びになった。同九年には十八番中学区九八番久保学校と改称され、同十年四月九日には学区改正九八番小学久保学校となった。翌十一年四月一日には南割と北割と分れ、七月一日南割は南箕輪学校へ北割は木下学校へ合併することになった。

明治十九年四月一日上伊那郡第三番学区南箕輪学校となり、久保は久保派出所となったが二一年四月一日は南箕輪学校へ統合された。

五　古蹟

(一)　棚木城址

棚木城址
(明治初年)

滝の沢と南沢にはさまれた中段台地にあって、南は滝の沢の断崖、東は急斜面、西と北は南沢の急斜面となって自然の地形が築城の好条件を整えていたようである。[注9] 城は東西三八メートル余、南北五八メートル余の長方形をなし、本丸址は畑になっているが南に一条の空濠(からぼり)がある。天文(一五三二～一五五四)の初期に棚木四郎と称する人が沢尻宮島式部の姉を娶(めと)りここに住んだという。東面に久保から登る道を階(きざはし)といっている。大手はこの面であろう。箕輪城に属した郷士であった。後に武田信玄進攻の時没落して家名を失ったという。現在この地と附近は棚木という地名になっている。この城址から箕輪遺蹟が一望のうちに眺められる素晴しい景観である。

注9　棚木城址　南箕輪村久保耕地ニアリ東西十九間南北廿九間円形ヲ為シ磊石存シテ今陸田ニ化ス天文ノ始メ棚木四郎ト称スルモノ宮嶋式部ノ姉ヲ娶リテ住之箕輪城ニ属シテ郷士タリ后武田信玄打入ノトキ没落シテ家名ヲ失フ　(南信伊那史料)

(二)　箕輪遺跡

久保の北端旧三州街道の乗鞍坂を越えて北に進むと、右手はやや嶮しい急斜面となる。その低地はかつては沼地であり、ここにオトボー池(音羽の池ともいわれる)という大

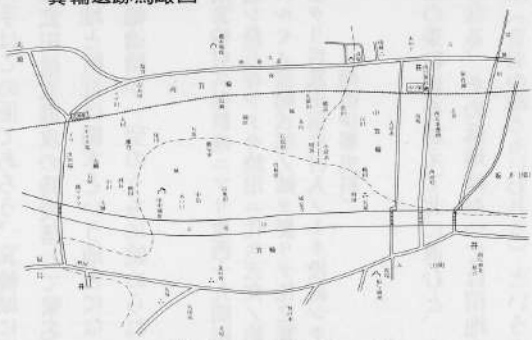
きな深い池があり、その周辺もまた深い沼地であったという。（現在は埋めたてられその形跡はない）この池には主が棲むといわれいろいろの伝説がある。天竜川の淵であった名残りであろうか。この沼地と、木下地区南部の渋田から久保下地区の湿田地帯と天竜川両岸に続く広い水田地帯一帯が箕輪遺跡（附図一）である。

昭和二六年に伊那土地改良区（中箕輪・南箕輪・箕輪・伊那）の設立により、大規模な耕地整理事業が計画され、天竜川西岸では木下馬場、苦谷、三日町城安寺、北殿の各地から工事が始められた。

そのとき馬場地区からは縄文晩期から弥生全期にわたる多量の土器と、十数個の炉跡が発見され、苦谷からも土師・須恵器の出土を見た。これによって更に南方の広大な全地域は遺跡であろうとの予想のもとに、改良工事と並行して遺跡の探究が進められた。昭和二七年二月頃から城安寺地区において、石臼、木柵、弥生式土器、聚落及び農耕遺跡としての木製品、食物の残渣が多く出土した。引続く改良工事は久保下、塩の井、北殿の全域に及び、昭和二九年六月の工事完了までに、この地域からも貴重な多くの出土品があった。

箕輪遺跡鳥瞰図

箕輪遺跡出土品
（人形・木串・馬形）

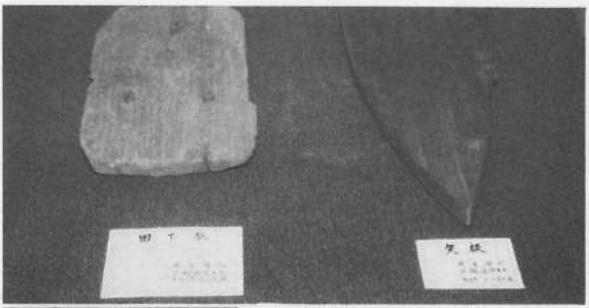

附図一　箕輪遺跡の略図

その主なものをあげると、久保下からの出土物のうち土器は縄文晩期から弥生初中後期のほか、土師、須恵、内耳土器をはじめ、石器は磨製石斧、石皿、構造物には木柵、畦畔跡、揚水跡、道路跡、木製品として田下駄（附図四）、田舟、鋤、椀、匙、木串、幣束板、用材、金属器のキセル、食糧にしたと思われる胡桃、栗、栃、梅、桃などの実、南瓜、夕顔の実、そのほか松葉、松かさ、不明の実などが発掘された。石原田周辺出土の土器の底部に籾の跡のついたものもあり（附図三）住居跡としての炉跡、焚火跡、炭、動物の骨なども確認された。とりわけ木柵の出土はおびただしい。木柵の幅は普通五〇センチメートルから七〇センチメートル位だが、久保下橋詰にあったものは一四〇センチメートルの幅に築かれていた。木柵の材は節のない柾目の立派な椹の木を使っていた。その総延長四・三七五メートルで木柵の推定数は約二五七、〇〇〇本である。以上のことから縄文末期にはここに人々が住みついていたと考えることができる。

しかし、工事完了の期限などのつごうから遺跡の発掘や探究が早急に行われたため、遺物の破壊されたもの、取り残しもあったろうし、未だ埋れている部分もかなりあるものと思われる。

天竜川沿岸、その中でも西岸のこの遺跡総面積百ヘクタール余の水田耕作と、その聚落をともなう遺跡としては、静岡県の登呂遺跡を遥かにしのぐ大規模なもので、全国的に貴重なものとされている。

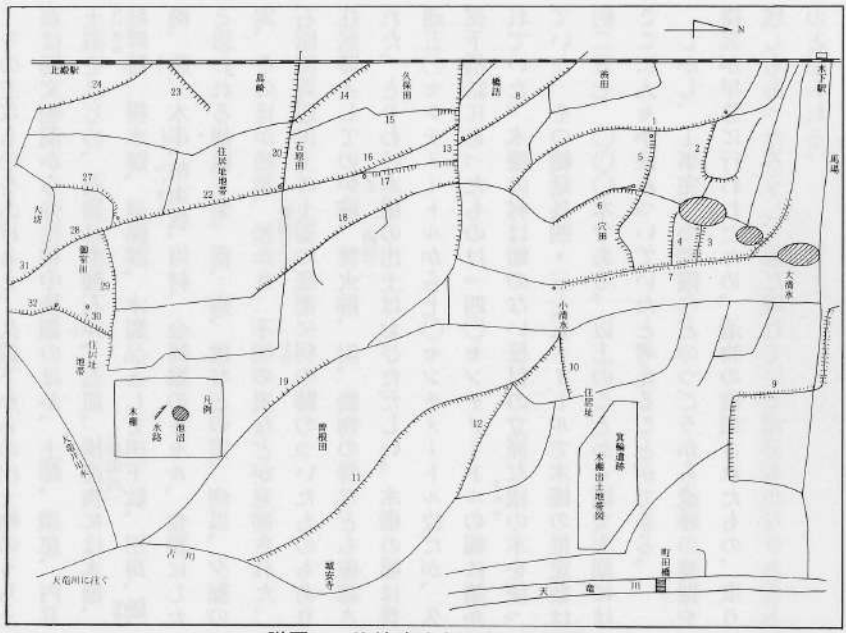
なお現在までの調査探究の成果は詳細に（箕輪史研究会編・箕輪遺跡報告書）まとめられている。



箕輪遺跡出土（田下駄・矢板）

仝上（木製鍬・木皿）

仝上（田舟）



附図二　箕輪遺跡木柵出土地略図

「表一」　木柵調査表　別図参照

集団	所在番号	所在地名	水源	接続	延長メートル
第一集団	1	渋田	泉沢	木下から引く	一六〇m
	2	〃	〃	一号から引く	二四〇
	3	穴田	〃	〃	二五〇
	4	〃	〃	〃	一〇五
	5	渋田―穴田	泉沢及び釜壺	二号から引く	二五〇
	6	渋田	〃	高台一号から引く	一〇
	7	大清水―穴田―小清水	〃	〃五号から引く	四〇
	8	渋田	泉沢	木下から引く	一九〇
	計			〃	三〇
二団第集	9	大清水―小清水	泉沢	マス池から引き天竜に注ぐ	二六五
	計				二六五
第三集団	10	小清水	泉沢	マス池から	二〇
	11	小清水―曽根田	〃	〃	三九
	12	小清水	〃	十一号から続く	四四
	計				四四
	13	久保下	木下南西部湧水	十三号を分つ	
	14	〃	〃	十三号から分れる	一五〇
	15	〃	〃	〃	二三〇
	16	〃	〃	〃	二三〇
	17	〃	〃	〃	八〇
	18	〃	〃	〃	一九〇
	19	曽根田	〃	〃	一七〇
	計				一〇六〇
第四集団	20	久保下	久保部落湧水	久保から	
	21	〃	久保木下の湧水	二号から	二四〇
	22	〃	〃	一六号から	二七〇
	計				二五〇
第五集団	23	久保下南	久保落部湧水	軌道西から	五六〇
	24	〃	〃	〃	二〇
	25	〃	〃	〃	六〇
	26	〃	〃	二一号から	一〇
	計			二四、二五号から分れ	五〇
第六集団	27	久保下南	久保木下の湧水	二三号から	二三〇
	28	御室田	〃	〃	九〇
	29	〃	〃	〃	九〇
	30	〃	〃	一八号から	一四〇
	31	〃	〃	二六、二七号から	八〇
	32	〃	〃	二九〇号から	五〇
	計				一五〇
第七集団	総延長計				四三七五〇m

「附図三」　縄文晩期土器紋様

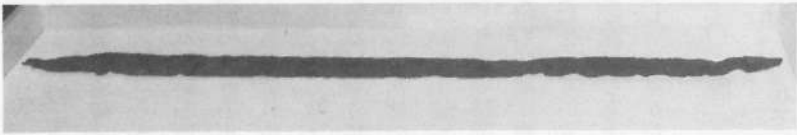
久保下南部出土

穴田出土

穴田出土

田下駄

㈢ 丸塚



丸塚出土（直刀）

久保の集落東北部、旧三州街道東側の一角に丸塚という地籍がある。（倉田基成氏宅、丸塚の屋号もこれに起因している）このあたりは文久二年（一八六二）に畑地や水田として開墾され現在河内屋の水田となっているが、かつては東にゆるやかな傾斜地でやや小高い台地となっていて、そのほぼ中央に経三メートル余、高さ一メートル余の墳墓があったといわれ、開墾の際、副葬品の直刀一振りと、子持勾玉が発見されている。他の遺物も何がしか出土しているはずだが特に伝承はない。古墳文化時代のものとして確認[注10]されている。

なおこの地域も昭和二七年に始められた土地改良事業のため地形も変貌しているが、久保下一帯の箕輪遺跡の一端であり、弥生時代以降における耕作地とその耕作者の住居地であったものと思われる。

注10 南箕輪村久保の丸塚から出ているものは細身のもので文久二年に発掘したものである。
鳥居竜蔵著「先史及原史時代の上伊那」

㈣ 天王

久保と箕輪町木下の境あたりの北沢には、四季を通じて豊かな水が湧出している。この沢の北側中段に台地がありその東側端はやや嶮しい急斜面となっている。眼下には音羽の池（オトボー池）を中心とした湿地帯と深い湿田があり、久保下に水田地帯が開けている。この台地の南限が現「大北」の宅で、ほぼ等高の木下養泰寺周辺まで続くこの一帯は「天王」と呼ばれている。

元来この地籍の北端（箕輪町木下）に「真言宗本寺和州多峰護国院天王寺」があったと、中川克宣氏所蔵、天和二年明細帳に見える。この天王寺は建武年間（一三三四～一三三六）の創建と伝えられ、江戸時代に河南村竜勝寺から僧が来て、住職となり、その時から曹洞宗に改宗されたがやがて廃寺となった。その時期は明らかでないが、境内の墓地には四基の住職の墓標が残されている。この寺跡の北側に、町から中曽根に通ずる鳳輦（ほうれん）路があり、この寺跡の南

に現養泰寺境内が隣接している。よってこのあたり一帯を「天王」と呼ぶようになったのだろうか。

なお近隣の北西に后ケ洞、后ケ丘と称する地名がある。また久保から木下南部に通ずる旧三州街道の箕輪坂の途中に右木曽路左飯田道という道標があるが、この木曽路は天王原のほぼ中央の小さな谷間を西に登っている。この両側の台地を渡り結んだものか、欄干橋があったと伝えられている。また天王原南西に北沢に抜ける「尾戸」という沢地がある。さきに述べた鳳輦路という通りなども合わせ推測するに、朝廷の直轄庄園であったのではないかとも推定されているが確かな記録や伝承、遺物など全く見当らないため、今後の探究に俟つこととしたい。

昭和初期に描かれた「南箕輪耕地図」に、字名「天皇」と記されているが、これは「天王」と「天皇」の同一音からの宛名とも考えられる。箕輪町の地籍名には「天王」を冠して地番が記されている。

六　碑

㈠　利沢千秋の碑

久保神社の西、西天竜地籍にある。

碑面

利沢千秋

西天竜耕地整理組合長正五位勲五等穂坂申彦

○碑陰

設計監督　長野県農林技手　笹本重作

同　補助　長野県農林技手　栢野　豊

同　補助　長野県耕地整理助手　野島一三

○昭和二年度　田畑二三歩町　組合長・堀貞雄、副長・堀政一、工事監督・倉田準、木下左門治、会計・城取彦三郎、協議員・山口喜十、馬場孫八、堀昇三、堀伝一

○昭和三年度　田畑十四町歩　組合長・堀貞雄、副長会計・堀政一、工事監督・倉田準、木下左門治、協議員・馬場孫八、馬場重治、堀伝一、倉田寛幹

○昭和四年度　田畑二町歩　組合長・倉田寛幹、副長会計・木下左門治、工事監督・倉田準、換地員・赤羽程助、協議員・山口喜十、堀和三郎、堀貞雄

○昭和五年度　田畑六町歩　組合長・馬場重治、副長会計・馬場一郎、工事監督・倉田準、換地員・堀政一、協議員・木下左門治、堀和三郎、赤羽猪兵、堀伝一、堀貞雄、矢沢政雄、赤羽程助

○昭和六年度　田畑八町歩　組合長会計・赤羽猪兵、副長・馬場一郎、工事監督・赤羽程助、換地員・堀政一、協議員・馬場重治、馬場孫八、矢沢政雄、堀喜重、倉田俊雄、山口喜十、堀和三郎

○昭和七年度　田畑九町歩　組合長・堀貞雄、副長・倉田準、会計・城取彦三郎、協議員・堀昇三、赤羽猪兵、馬場武男、馬場孫八、赤羽忠三、堀政一

○昭和八年度　田畑八町歩　組合長・堀貞雄、副長会計・堀伝一

工事監督・倉田準、協議員・堀昇三、堀久雄、馬場武男、赤羽楽造、城取彦三郎、堀政一、

○昭和九年七月

西天竜耕地整理組合久保開田組合建之

石工　小野初弥

刻師　小松一市

台石寄附者　宮沢友久

利沢千秋の碑

(二) 桐亭良亮筆塚

久保公民館の入口にあり

桐亭良亮翁　筆塚

碑陰　明治三四年辛五月廿五日

木下良家建

注・桐亭良亮は本名を木下周策、豊臣良亮といった。久保の人、手習師匠で嘉永五年五月二六日に歿した。

桐亭良亮筆塚

(三) 一貫句碑

久保旧三州街道西にある

日くらしや目先にせまる夜の帷　一貫

碑陰

昭和十四年三月建建設会

注・一貫。本名は木村徳太郎、詩歌句庵という。昭和四年七月二九日生れ、昭和十三年三月二一日歿。

一貫句碑

㈣　庚申塚

西念寺観音堂の南側、道路に面した傍らに並んでいる。西念寺がこの地に移転したときここに移された。

一　青面金剛像　享保十二年（一七二七）珍しい一猿の塔である。

一　庚申　元文五年（一七四〇）

一　庚申　寛政十二年（一八〇〇）

一　庚申　大正九年（一九二〇）

一　文字不明一墓　日月・三猿・二雞の像あり庚中塔と思われる

一　甲子　大正十三年（一九二四）

一　摂待供養

一　大乗妙典六十六部供養

一　西国坂東秩父供養塔

一　十二夜供養塔

一　聖観音像

青面金剛

聖　観　音

庚　申　塚

㈤ 水神

1久保滝ノ沢柳屋の前、旧三州街道西にある。

水神

碑陰　昭和十二年四月二八日　堀久雄建之

2久保上の段南部江戸屋の東にある。

水神宮

碑陰　明治四十年九月吉日建之

矢沢計十郎　堀保太郎　矢沢留次郎　山口喜十　織部源治郎

水神

㈥ 道祖神

1　旧三州街道を「坂下」の前に出て大泉線に入って、「九三」南東の四辻にある。

道祖神

碑陰　天保七年（一八三六）庚申十二月建立　窪村

2　久保中村屋土蔵の南西にある。

猿田彦大神

七　井堰

㈠ 上井・下井

北沢と南沢にはさまれた中段地に、上段地のすそから湧出する水を引く二つの井がある。一つは現公民館五〇メートル南下から湧出している水を引いて上井といい、いま一つは上井より一〇〇メートル南のところから湧出している水を引いて下井といっている。この二つの井が久保中段地の中央を流れ、水道のできるまでは飲料水に使われたり、田用水となっていた。水田の少なかった昔は一粒の米も尊かった。どんな苦労してでも水を引いて来て田にしようとした執念は恐しいほどだった。たとえば、滝ノ沢の奥地から急斜面の難所と長い距離を苦心して井を造った。そして

棚木に水田をこしらえた努力には驚かされる。又、南沢に堤を設けて南沢西斜面に井をつくり、棚木地籍の水田を潤した。別に南沢東斜面を通り浦神地籍の家添えの田を潤した。北沢からは両斜面一筋ずつの井があって家添えの田を潤していたが、西天竜開田により廃止され、上井・下井だけとなっている。箕輪町の境の上段地のすそから西に横井を掘り現在七〇アールくらいの水田が北垣外という地籍に造られている。掘られたころは江戸末期か明治初期ともいわれている。

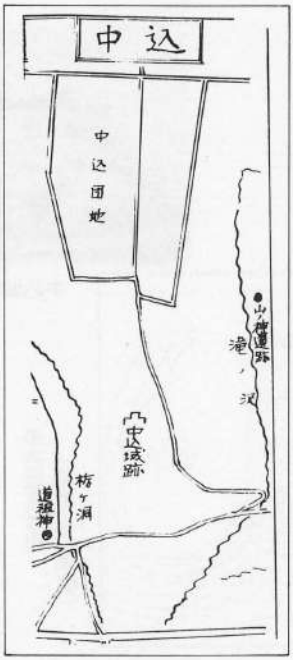
(二) 沢 (北沢・南沢・滝ノ沢)

箕輪町木下区との境に北沢、久保のなかば南寄りを流れる南沢、塩ノ井との境に滝ノ沢、三つの沢がある。どの沢も水が豊かで昔は採草地となって田の肥料に、牛馬の秣(まぐさ)に大切な役目を果たしていた。水量が豊富だったので水車小屋が設けられ、現在の精米所の役割もしていた。車屋のない部落へ出向いて米、粟、稗、麦、そば、大豆などを預かって来てついたり、粉にして、またそれを配達した。この車屋が北沢に三軒、南沢に二軒、滝ノ沢に四軒もあった。草場は肥料の変遷と牛馬に代る農機具の出現によって無用となってしまった。しかし冷たい豊かな水と立地条件を生かしてわさび畑となり、滝ノ沢のわさび畑は栃(とち)ケ洞のわさび畑と並んで伊那地方では優れたわさび畑である。

滝ノ沢のわさび畑

第二　中　込

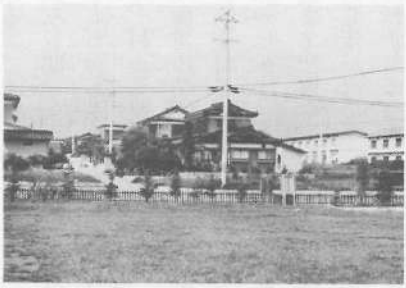
一　中込の由来



中込の名称の由来についてたしかなことは不明であるが、天文一四年（一五四五）、武田信玄が小笠原上下伊那の諸衆連合軍を福与城に攻めたとき、その出城の一つとして、塩ノ井中込城があったらしいといわれている。

また、明治七年、時の政府が廃藩置県にともない新たにできた各府県に国史編輯局を設置させ、郷土誌・郷土史ともいうべき編輯事業を起こした。これを受けて、長野県でも各町村から地誌の提出を求めたが、その際、明治一二年、南箕輪村から提出された地誌の中の「字地」「久保耕地」「畑に属する字」の中に「中込」の文字が記録されている。したがって、今から四五〇年前ごろ、この地に「中込城」が存在し、以後、今日まで「中込」の名称が存続してきたものではなかろうか。

現在の「中込区」は、昭和四五年から長野県企業局の団地造成によってできた。五年後の昭和五〇年八月三日、当時の入居戸数一〇二戸、最終入居戸数二〇五戸をもって、南箕輪村一二番目の区として誕生したものである。団地のみで区を形成したのは、中込区が県下最初であるといわれる。

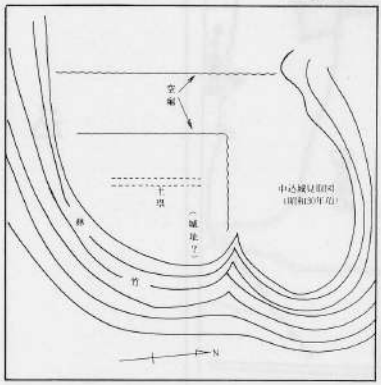


中込公民館より団地を望む

一　中込城址

中込城址は塩ノ井と久保のかつての村境にある瀧ノ沢と、塩ノ井の青ノ坂入口に流れ出る栃ケ洞の沢にはさまれる天竜川、第二段丘の舌状丘陵の先端にある。三方を険しい崖に囲まれ、西方に二本の空堀をもつ東西約四二間（七六メートル）、南北約三五間（六三メートル）、面積約一五〇〇坪（四八〇〇平方メートル）あまりの南箕輪最大の城址である。

中込城址（明治初年）



中込城見取図（昭和三〇年頃）

明治一二年、村から県に提出された「町村誌」[注1]によると「城壕や囲壁、陣営の門や出入口などの址がはっきりと残っており、地の利を得ていることが記されているが、当時、誰の居城であったかはっきりせず、今は林野となっている」とある。最近まで空堀や土塁も完全に残されていたのであるが、昭和四五年以来の中込団地の造成により、様相は一変し、現在はわずかに当時の城の東南の隅に当る所に一辺五〇メートルほどの方形の本丸跡を残すのみである。

文献[注2]によって城域を推測すると、本丸のほかに外郭が二つあったものと思われる。また、本丸の西方、栃ケ洞側より瀧ノ沢側に直線的な空堀が一本走り、本丸の北側に外郭の一つがあり、空堀の西七、八〇メートルほどの瀧ノ沢側、現在の唐沢国人氏宅の前に一本の空堀跡が認められる。中世末の古道は、ここより四方、二、三百メートルのところを走っているから、大手はこの郭にあったものと思われる。

中込城の成立や城主については、全く不明とされているが、福与城の附属城的性格が強いとする説が一般的である。

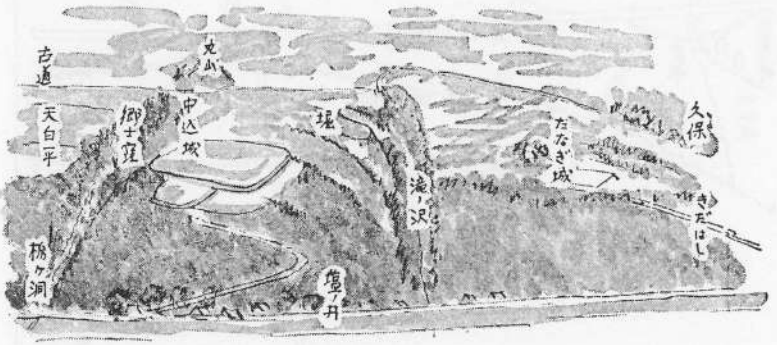
ただし、永禄一年（一五六七）三月、武田信玄による諏訪社伊那回り「湛神事復活命令」（注3）に湛神事の神主として塩ノ井の窪助四郎の名がある。湛神事の神主は地侍的な存在と考えてさしつかえないと思われる。また、基本的には中世末のこの種の城址は館址と呼ぶにふさわしく、中込城もその類に属するとすれば、窪助四郎とこの城との関係を十分検討する余地があるものと考えられる。

注1　「本村の北端久保耕地の中央高塁の所に在り。東西四十二間、南北三十五間、面積千四百坪、城壕、囲壁轅、門戸等の残址現在し、往事誰の居城たるを知らず往々土を鑿ち古城具を得、今は林となり、磧礫の地なり。」（長野県町村誌）

注2　久保耕地の南方高塁ノ所ニ東西四十二間南北三十五間周回三段ノ埣渠ヲ存ス之レヲ中込城ト云フ然レトモ年代古ク城主ノ起因詳カナラス只西方ニハ郷士カ窪及塚畑等ノ地名存スルノミ（南信濃伊那史料）

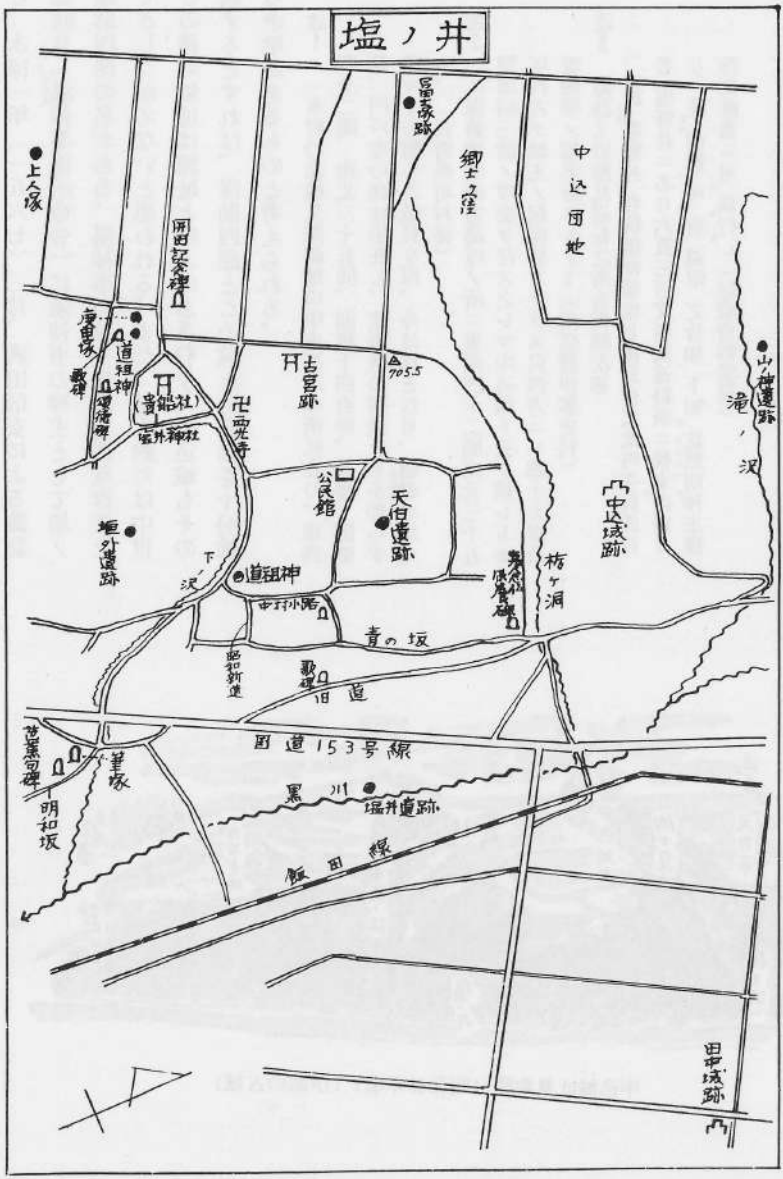
注3　諏訪上宮祭礼退転之所合再興次第

「一於塩野井春秋湛神事免七貫五百文此内壱貫弐百者　塩野井ニあり六貫三百文者高遠料所ニ候来丙寅ヨリハ任旧規可有還附之旨加下知訖然則神主窪四郎厳重ニ可執行」（信濃資料叢書）



中込城址見取図（昭和40年頃）（伊那の古城）

第三　塩ノ井


塩ノ井
上人塚
留塚跡
郷士窪
中込団地
岡田記念碑
道祖神
塩井神社
古宮跡
705.5
山ノ神遺跡
滝ノ沢
公民館
天白遺跡
中込城跡
垣外遺跡
下沢
道祖神
中村小路
梅ケ洞
青の坂
昭和新道
旧道
国道153号線
黒川
塩井遺跡
明和坂
飯田線
田中城跡

一　塩ノ井の由来

区名の起源については史料や伝承が全く残っていないので明らかではない。ことに「塩」が何を意味するか皆目見当もつかない。「井」については江戸後期の古地図に「塩ノ井の井」と村社直下に湧く清水を指してあるところから湧水を意味しているのであろうと考えられる。[注1]

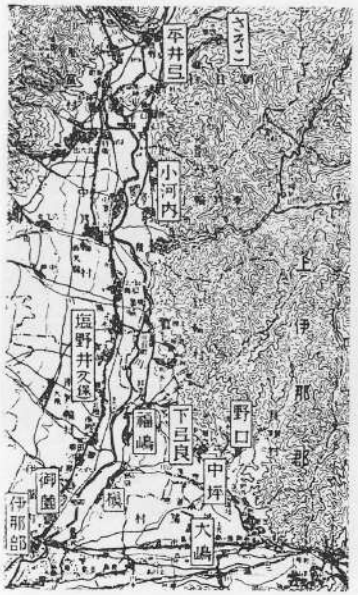
歴史史料から塩ノ井の存在を拾ってみると、古くは永禄八年（一五六五）、永禄十年（一五六七）、天正年中（一五七三～一五八一）、の諏訪社関係文書の中に神長官守屋氏が湛の神事を行った「塩野井」が記されている。しかしその前後はずっと久保に含まれており「久保南割」の呼称でよばれている。[注2]寛保三年（一七四三）に至り久保から独立し、（[注3]一説延享五年）塩ノ井村としての行政区ができ上り、以来百余年を経て明治五年に再び久保と合併、更に明治二一年の町村制公布により南箕輪村に編入され今日に至っている。

注1　一、於塩野井春冬湛神事免二七貫五百文此内壱貫弐百者塩野井ニあり六貫三百文者高遠料所ニ候来内寅よりは任旧規可有還附之旨加下知然則神主窪助四郎厳重ニ可執行。
茲時永禄八乙丑年十二月十日（武田信玄花押）

（永禄十）
三月小
十一日、武田信玄、諏訪社上社ヲシテ同社神使伊那廻神事ヲ再興セシム
伊那廻御神役之次第
一、塩野井之分、春冬ニ七貫五百文年来無沙汰之砌、去年御改有、可為如前々之由被仰出候。神主　窪助四郎（諏訪上下宮祭祀再興次第）

注2　古エ供奉中古窪村ト改宝永度久保村ト改
寛保三年割テ久保塩ノ井トナス
明治五年八月二十日復塩ノ井ヲ合セ久保トス
（長野県町村誌）

注3　塩井　古属久保
延享五年（一七四八）塩井は久保から分る
（伊那史略）
（みのわ・笠原政市著）



湛神事巡行地図

二　神社

一　塩ノ井神社

塩ノ井区の西方最上段、南箕輪村六六三番地、字山ノ神にあって御尺地社、貴船社を合祀する。

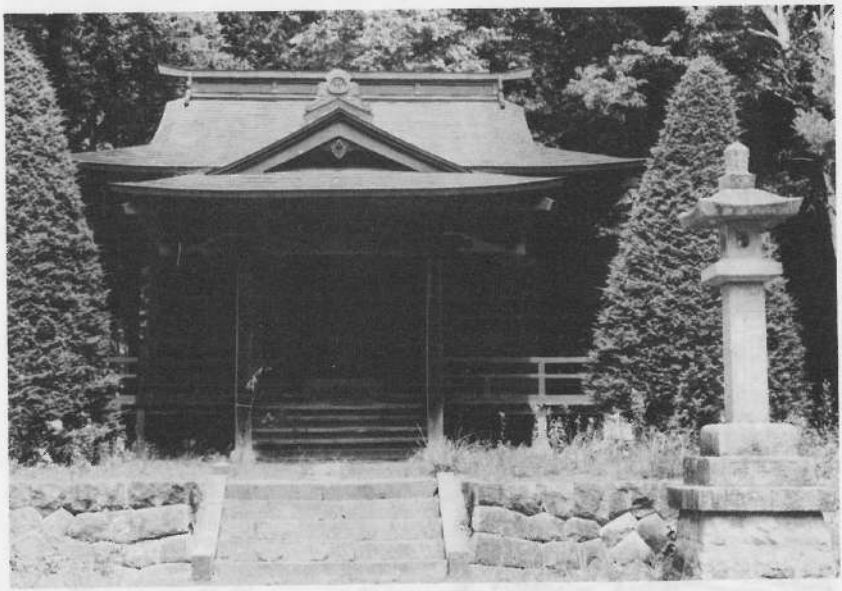
祭神

御尺地社、猿田彦命、大巳貴命、伊豆速男命
貴船社、高龗神。

由緒

御尺地社は古くは現在地の北方二百メートルほどの天伯地籍字古宮の地にあった。祭神の大巳貴命は大国主命の別称であり、伊豆速男命は、建御名方命の御子である。出雲神話、諏訪神社の伝承につらなる神々を祭神としており、さらに神使の湛神事が古宮の地で行われていたことなどを考えると、諏訪社の勢力伸張の過程で一拠点として早い時期に成立したと思われる。御尺地信仰は諏訪信仰の原型とされ、一般的には土地の神、開拓神とされている。他方、貴船社は京都府鞍馬にある貴船神社の末社であり、祭神の高龗神は雨乞いや止水に霊験あらたかな神とされている。[注4]

最近の古部族研究会の研究によると、塩ノ井の御尺地社



塩ノ井神社

は征矢氏の祝殿であるとし、又、社殿内に納められている金幣の裏面には「寛政九年三月、氏子中、征矢野」の記銘を伝えていることは注目さるべきことと考える。即ち征矢野は征矢一族の旧姓と伝承されており、近世に於ける御尺地信仰のあり方や、御尺地・貴船両社の合祀時期を推定する上で重要な手掛りを与えてくれている。

尚、社殿は入母屋作り、前一間ひさし千鳥破風の向拝をつけた角総欅作りである。彫刻に至っては優美端麗であり往昔「塩ノ井に過ぎたるもの三つあり」といわれたその一つに数えられたほどの建築である。

注4　古部族研究会編「古代諏訪とミシャグジ祭政体の研究」の今井野菊氏論文

(二) 境内社

1　**三峯社**
秋葉神社／合殿

2　**御獄神社碑**
碑陰　昭和三拾三年十月建之
寄附人等の名列記しあり

3　**天満宮**

(三) 西光寺

南箕輪村五九九番地、村社の北隣にある。

本尊。
薬師瑠璃光如来。

薬師瑠璃光如来

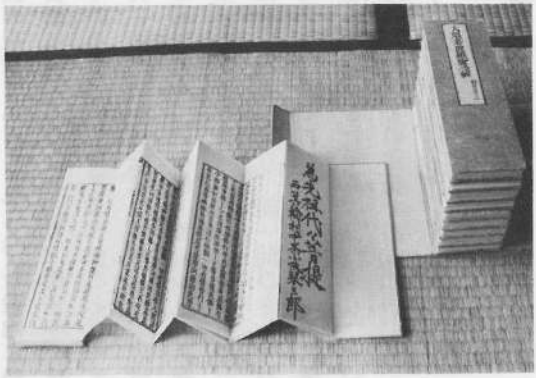
由緒

成立年代は判然としないが、塩ノ井が分村独立した江戸中期頃の創建とされる。伊那神社仏閣記によると、宝暦四年（一七五四）「塩ノ井　堂一ケ所　薬師堂」とあり村明細帳にも薬師堂と記載されている。実際には阿弥陀堂というべきものであり、建物は当時の民屋を移転改築したものと思われる。明治初年、静岡県から現在の本尊を移し利泉院と

改称し、更にまた、明治四年には木下の嶺頭院の住職が兼ねる形で瑞雲山西光寺と改めた。のち明治二四年、本尊の化粧直しを行ない現在に至っている。

尚、当寺には村文化財に指定された大般若経六百巻の他涅槃像一体、十六羅漢像、それに最近境内から発掘された十王石仏像、[注5]石碑を納めている。

注5　碑文銘「享保八年卯二月、南無阿弥陀仏」とある。



大般若経六百巻

四　古　蹟

(一)　天伯遺跡

塩ノ井部落の北隣、南箕輪村六〇一番～六四五番にまたがる字、垣外、北垣外、天伯、山ノ神（古宮）地籍の約五ヘクタールの広い地域にある。

昭和四二年、開田事業にともなう緊急発掘が行われた。既にこれらの地籍では土偶を含む多量の石器や土器片などの遺物が表採されており、早くから上伊那に於ける先史及び原始時代の貴重な遺跡として注目されていた。

発掘調査の結果、一四軒の竪穴住居（いずれも隅丸方形で西側壁にカマドをもち、最大七・二メートル×六・二メートル、最小のもので五・二メートル×五・二五メートルとほぼ均一の住居）が確認された他、縄文各期の土器類、土偶、土師器、須恵器と質量共に豊富な石器・石　が出土した。加えて特異な出土物として紡錘車四ケ、刀子、鎌、鏃、環九筒、鍬先等の鉄製品、さらに鉄製品の鋳造を裏付けるフイゴロや鉄滓などが発見され注目をあつめた。

これらの遺物の分類でみるかぎり天伯遺跡は縄文前期から古墳時代末に至る約六千年にもわたる複合遺跡であり、

全右（須恵の器）

全右（土師の器）

天白遺跡出土（縄文の深鉢）

殊に大量に遺物を出土した土師器時代（古墳文化期）に最も繁栄した遺跡であったといえそうである。おそらくは農耕紡織といった生産活動に加えてフイゴ、鉄滓の存在から当時最も貴重とされた鉄製品生産の工房の存在をうかがわせいわば先進的な技術者集団集落をさえ推測させているといえよう。

現在、開田化されたこの地には遺跡のあとかたも残されてはいないが、出土した多数の遺物は整理されて本村郷土館に陳列されている。

（参考文献　天伯遺跡緊急発掘調査団概報）

(二) 古宮跡

天伯遺跡の西南端、遺跡を見下す台縁部に古宮跡がある。現在は径五メートル程の小墳丘をなし、墳丘上には樹齢五百年以上といわれる椹（さわら）の巨株と小さな石祠が残っている。この古宮は古形の諏訪神信仰である御尺地神の祭祀場と考えられ、中世諏訪社の湛神事が行われた場所と考えられる。

(三) 郷士ケ窪

中込城の南側、深い沢をなしている柳ケ洞の沢をのぼりつめると中込台地と南側の天伯台丘が緩傾斜で結ばれ窪地を形成する。ここを郷士ケ窪と呼ぶ。中込城の大手とは地続きになり、現在は山林となっている。郷士とは地侍のことである。伝承も史資料等何一つ現存しないがおそらく中込城に関わる侍屋敷でもあったのであろう。塩ノ井神社脇を抜ける古道はこの郷士ケ窪へとつながっている。西天、中込の開田、宅地造成にともない地形が一変してしまっているが山林一帯の調査は今後の課題でもある。

(四) 塚田

古老の記憶によれば郷士ケ窪附近には西天開田以前に土墳状の塚が残こされていたという。中込城、郷士ケ窪、塚と直線的に中世末の遺構が結びつけられそうである。

(五) 富士塚址

郷士ケ窪の西隣、古道脇の地を富士塚と呼ぶ。ただし、古老の記憶にも塚らしき存在がはっきりしない。ただ、この地から真北に荒神山があり、その遠高の位置に霧ケ峰の雪峰が望めるところから位置的には富士塚を築くに恰好(かっこう)の場所である。

(六) 上人塚

塩ノ井神社の西南百メートルほどの田地の一隅に上人塚と称する地があり、小さな野仏が祀られている。野仏表面に碑文「元禄年中　上人」と刻まれている。

上人塚（昭和初期）

伝承もまちまちになり散逸しているが、一説によると元禄年間(一六八八～一七〇三)村に疫病がはやって村人が難儀をしていた折、通りかかった雲水が近くに深い穴を掘って中に座し、鈴をうち鳴らしながら疫病よけの祈りを行なったという。九十九ケ日目の雪の降った厳寒の朝、鈴音がと絶えているのに気づいた村人が穴にはいってみると雲水は祈祷

の姿勢のまま果てており、仮埋葬の後も雪の降る寒い朝にはどこからともなく鈴音が聞こえてきたという。やがて雲水の祈祷の霊験の故にか疫病はすっかりおさまり、村人たちは雲水の霊をとぶらうために苦しい生活の中から浄財を出しあって小さな野仏を建てたというのである。鈴・穴中の祈祷の形から雲水とは修験者のことと思われる。

五　碑

(一)　開田記念碑

塩ノ井神社の西隣、庚申塚の西端にある。

碑面

開田記念　前農林大臣従三位勲三等山本悌次郎閣下題額

なき人に見せばや変る秋の来て

西天竜の稲のさざ波

白馬堂書

碑陰　西天竜役員有志者十四名列記

昭和七年十一月　六十三齢　征矢定次郎建立

石工　大泉出羽沢為十郎

開田記念碑

(二)　征矢吉兵衛歌碑

塩ノ井神社の西隣庚申塚の西端にある。

碑面

すゞみして聞くひと曲のことのねは

年ふる松のかぜやしらぶる

碑陰

文久二戌　七十二　征矢吉兵衛

征矢吉兵ヱ歌碑

征矢吉兵衛は寛政五年（一七九三）塩ノ井に生る。資性温健にして、学を好み和歌を岡山藩士河原文蔵に学び、村内を中心に多くの門人を育成

した。弟子とともに塩ノ井八景を詠じた。西風亭利支と号した。

(三) 征矢貫通歌碑

塩ノ井の旧国道とバイパスの交る点を旧道を北へ行くこと約一五〇メートルの西側石垣の上に建てられている。

碑面

春の田をかへすぐ〳〵も
さき匂ふ花に心をつくる賤のを

明治十七年弥生十日　征矢貫通詠之

征矢貫通歌碑

貫通は塩ノ井の「佐和」家の人、本名は五郎吉（五六吉）貫通はその号である。幕末から明治にかけての歌人で、たくさんの和歌をのこしている。明治二十年九月十日歿。

(四) 征矢真白翁碑

碑は塩ノ井神社の南、吉湊屋の墓地に建てられている。以前は旧国道に面した正湊屋の前石垣の上にあったが、道路改修のとき墓地に移建したものである。

碑文

翁名虎教、称彦右衛門、号真白。氏征矢、信濃伊那郡塩野井邨人、父彦右衛門、母穂高氏、翁娶高木氏、有男女子若干。翁能書、教授郷里、数十年、矣。為人温順敦朴、藹然接人。是以門徒常多。性好酒又能国詩。花晨月夕、不閑過、提携吟哦、常遣其懐。今茲七十二、矍鑠自得。嘗詠歌曰、奈句武四能居回左返易馬半、差微斯記爾、古漏母有都南利、万兎介世野作刀、其風韻率如比。頃子弟相議、埋筆立石使余題其表。嗚呼、余久掌藩校、而恒危言激論、顧躓相継齢踰五十、頭童歯豁、猶且匏繫不能去其懐。実有慚于翁。自今将勇退、従翁而游耳。

明治四年辛未三月中浣　高遠進徳館教授　中邨元起撰並書

門生等建

翁は生来学問好きで特に書に秀で、村人の信望も厚く、数十年の長きにわたって子弟に書を教えた。温順純朴な人で門弟も多く、和歌もよく作った。代表作として、次の和歌が記されている。

鳴く虫の家さへ今は寂しきに衣うつなりまとかよの里

明治四年三月翁七十二才のとき門人等によって建立された。明治十年七十八歳で世を去った。

征矢政十郎君碑

征矢真白翁碑

(五) 征矢政十郎君碑

塩ノ井の「中屋敷」の玄関脇に建っている。以前は、旧国道バイパスより分れて北へ約一五〇メートルの石垣の上に征矢貫通の歌碑と並んで建てられていたが、道路拡張工事のとき、征矢政十郎氏の子孫の家の庭へ移したのである。

碑面

征矢政十郎君碑

従三位勲三等、伯爵元老院議官　鍋島直彬篆額

世有抱卓犖豪邁之志、不能一発諸事業、独振名於曲芸小技者。如征矢君是已。君信州伊那郡南箕輪村塩井ノ人、世事太田氏。太田氏懸川太田侯支封也。君少頴悟、善碁。年十五従諏訪人岩波某学之。又入江戸游棋博士井上因碩門、旁就塩谷宕陰学文焉。棋有品等、従一品至九品。終身刻苦能陞一品者少。而因碩許君以三品。後游四方、其技益進。遂至与五品、敵手相抗。君夙慨王室陵替、文久中聞四方義士、集於輦下、欲馳赴京師。老母泣涕止之。君素有至性、乃従其言。戊辰春岩倉公子具定将官軍、徇東山道、於是君奮然踴躍、往従公、居半載、事平見釈。既而朝廷大播文教。君忽有所感、投棋曰、是豈弄枯局之日哉。乃為小学教員、啓迪童蒙、傍攻読書、而一朝奄逝。豈不可悲哉。君姓征矢通称政十郎、考称良策、妣原氏。君娶河井氏無子。明治十一年八月十日歿。享年四十七。葬塩井先塋之次。郷人小町谷氏、穂高氏、与其徒、謀建碑、請文於余。乃銘曰、

慷慨伏剣、誓従王師、荆棘塞道、中心悲傷、功業未遂、奚歎数奇

明治二十三年九月　省軒　亀谷　行撰

征矢政十郎君碑銘　半古　柳田無忝書

(六) 庚申塚

村社の西隣にある。

一 **庚申** 元文五年(一七三六)
一 **庚申** 寛政十二年(一八〇〇)
一 **庚申** 安政七年(一八六〇)
一 **庚申** 大正九年
一 **甲子** 元治元歳(一八六四)三月講中
一 **甲子** 大正十三年 村中
一 **二十三夜燈** 嘉永元申年九月二十三日
一 **廿三夜塔** 村中 嘉永戊申元年
世代法印龍翁 世話人 若者中
一 **忠魂碑** 希典
碑陰 明治三十九年十二月 耕地中建之
明治三十七、八年戦歿者三名と
太平洋戦争戦歿者十五名連記
一 **馬頭観世音碑** 六基
一 **蛇像** 一基

(七) 寒念仏供養碑 (道標)

青の坂と旧三州街道の分岐点に寒念仏碑が一基ある。道路の改修により旧位置とは少し離れた位置に移されている。

一 **左いせ**
寛延四年
寒念仏供養
三月日 講中

寒中三十日間講仲間が念仏を唱えた記念に建立されたものであろう。伊勢参りをする信心深い旅人の道しるべにもなる文字を入れてあるのを見ると、何とも言えず心なごむ思いがする。寛延四年は一七五一年である。

(八) 道祖神

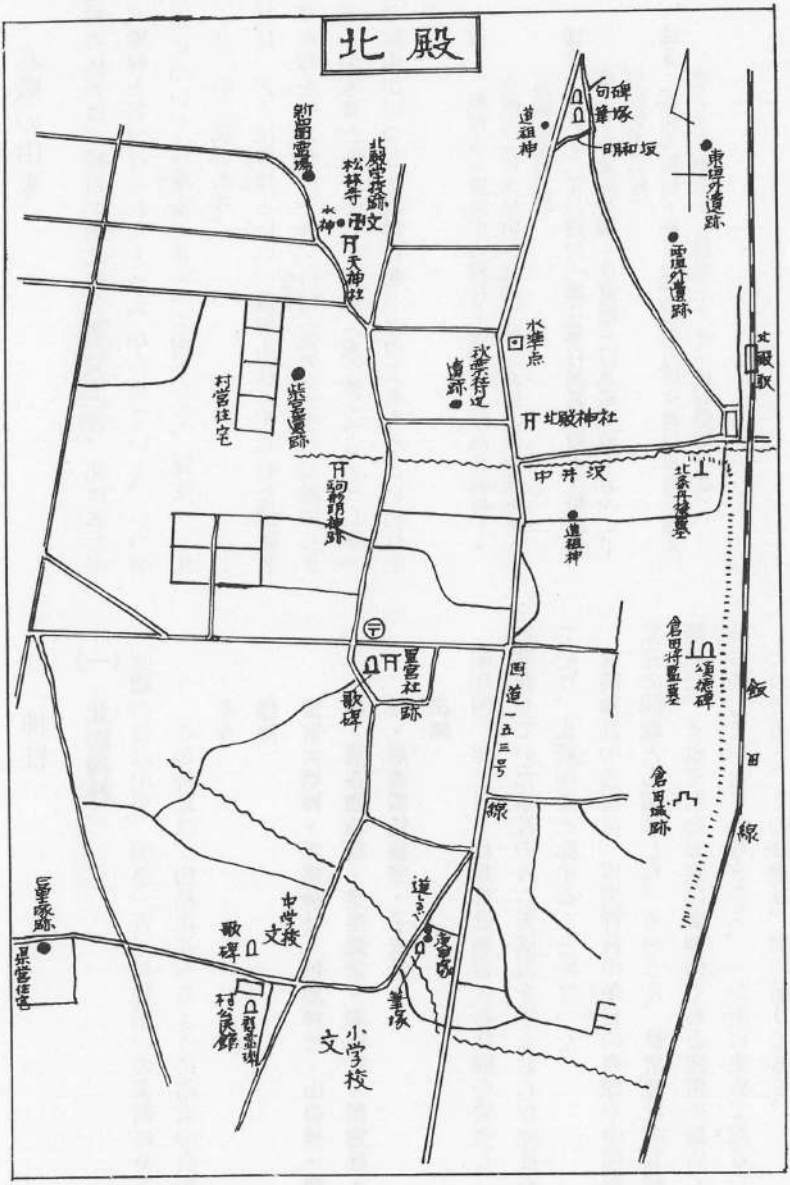
1 塩ノ井のほぼ中央、中村小路入口にある。

道祖神

2 村社西隣庚申塚にある。以前は三州街道と青の坂との分岐点にあったものを道路改修に際して現在地に移されたものである。

道祖神

第四　北殿


北殿
新留電場
北殿学校跡
松林寺
水神
天神社
村営住宅
柴長屋跡
水準点
北殿神社
中井沢
道祖神
東埋外遺跡
西埋外遺跡
北殿駅
飯田線
倉田城跡
倉田将監屋敷
須佐碑
国道一五三号線
歌碑
墨宮社跡
中学校
小学校
墨塚跡
墨宮住宅

一　北殿の由来

北殿の区名は、殿村が南北に分かれたとき、北にあたるので北殿村と名づけられたところから来ている。いつ分れたかについては慶安二年（一六四九）[注1]と、寛文一二年（一六七二）[注2]の二説がある。

殿村は、古くは殿衛（とのもり）といい、御射山社に祀られた建御名方富命が狩をなされたとき、行宮（あんぐう）（仮の宮）をこの地になされ、多くの家来たちがそこを殿衛（殿を囲んで守る）し奉った地で殿衛がいつしか殿村[注3]に変ったのであろうといわれている。

注1　殿村古ェ殿衛中古殿村ト改慶安二年南北両村トナル慶安二年大泉宿ヲ北殿ェ移シ北殿大泉合駅トナル（長野県町村誌）

注2　寛文十二年迄殿村一郷立罷有候処南殿寄合相談万事ニツキ達而分郷ニ仕度願ニ付北殿南殿ト分ル（千桐屋覚書之帳）

注3　殿衛今殿村ト称ス命行宮ヲ占給ヒ群臣殿衛シ奉ル地ナリ今南北ト二耕地トナル（長野県町村誌）

二　神社

(一)　北殿神社

北殿のほぼ中央、国道一五三号線沿いの東側にある。

この神社は、由緒に述べるように諸宮の合祀社である。

祭神

里宮大明神・津島神社・秋葉神社・山の神・豊川稲荷・居森殿稲荷・金毘羅宮・御鍬社・雨宮社・風宮社・居森殿疱瘡宮・子安社・

由緒

昭和四〇年三月、秋葉神社地籍に新社殿を建立し、北殿に散在していた諸社のうち天満宮を除くおもな神社を集めて祀り、北殿神社と称することになった。

北殿神社の合併は、里宮神社の茅葺（かやぶき）の修理や中部保育園拡充の問題とも関係した。そのうえ、秋葉神社のお祭りの際には、それぞれのお宮の御神体である御幣を集めて、お祓（はら）いをしていたことなどから、一か所に集めて祀（まつ）ることにしたのである。その経過は、次の通りである。

昭和三九年九月十日、里宮神社修理について研究協議。

同二九日より移転に関する研究を重ねること四回、更に反対者の説得も行なって、翌四〇年二月五日遷宮および地鎮祭執行。ついで、二月一四日上棟式を挙げ、社名を北殿神社と決定し、三月七日遷宮祭執行。（北殿区議事録）

秋葉神社の創建は、伝えによると江戸時代（一六〇〇～一八六七）北殿村に大火があった際、火災、盗難除にと霊験ある秋葉権現を勧請したものと言われているが、秋葉社地売渡し証文によって、寛政七（一七九五）～八年（一七九六）であろうと推察される。[注4] 北殿区の記録に「明治十六年四月七日改正、秋葉神社・三峯神社代参順年明記」が残っている。

この両神社の代参には、区長が世話役になり、氏子の中から「くじ」によって、それぞれ四、五名が選ばれた。秋葉神社の代参は、静岡県の秋葉神社へ、三峯神社の代参は、埼玉県三峯神社へ出向いた。代参人は、神社へ納金して、御祓（はら）いを受け、村内戸数分だけお札を頂き、帰って戸毎へ配った。三峯神社のお札は、出頭（でがしら）（用水の水源地）の桧に結び祈念したが、後に集会所の大柱に結ぶようになった。

秋葉神社本殿
里宮神社

旧秋葉神社（昭和初年）

注4　賣渡申町屋敷之事

一、我等持分町屋敷間口五間半奥行九間之処、此度村方秋葉様社地ニ売渡シ代金八両只今慥ニ受取申所実正ニ御座候。右境之儀ハ、西者往来通リ、南ハ我等居屋敷境、北ハ弥右エ門屋敷境、東ハ私畑境、此内不残売渡申候。然上御伝馬屋敷ニ御座候間、四半匹分ハ村方ニ而御引受御勤可被　成候約束ニ売渡申候間、永ニ四半匹の御伝馬役幷壱畝弐拾分之御年貢諸役供ニ御勤可　被　成候。萬一此儀ニ付本人何様之義申候共、加判引取急度将明可申　候。為　後日　永代売渡証文仍而如件

寛政七年卯十二月　　売主　九郎右エ門㊞
　　受人　弥右エ門㊞

当村
御役人衆中
村方衆中

（北殿区有文書）

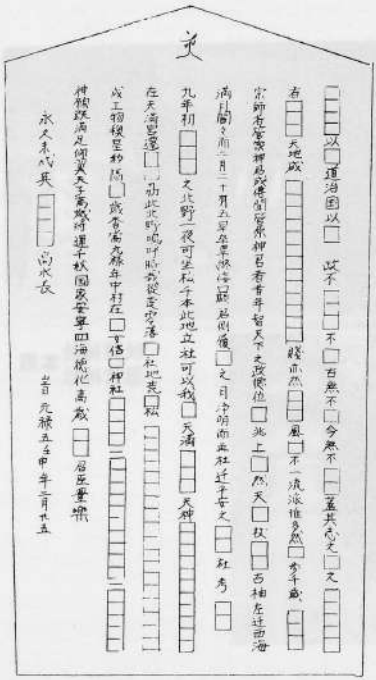
（二）天満宮

松林寺南の森の中にある。

由緒

創建年代は明らかでない。現在北殿神社に所蔵されている棟札[注5]の一枚はこの天満宮のものと思われる。それは元禄五年（一六九二）のもので、磨滅して読めない部分が多いが、読める部分をたどって判読してみると、この天満宮創建又は再建のときのものと思われる。この棟札の大きさから推測すると現在の祠より大きかったと思われる。

注5



(三) 里宮神社跡

里宮神社跡碑

中部保育園の園地が、里宮神社跡である。西にそれを示す石碑が建ち桧の大木一本が昔を語っている。

由緒

北殿里宮神社の創建は、詳らかでないが、元禄末ごろ描かれたと推定される北殿宿絵図に、里宮大明神が明記されているので、元禄以前に造営されていたものと考えられる。合社前の状況は次の通りである。

明治十四年の神社取調書控による。

長野県管下信濃国上伊那郡南箕輪村字里宮

里　宮　社

一祭神　建御名方命
　　八坂刀売命
　　豊受大神
一由緒　不詳
一社殿　間口三間半、奥行二間半
一鳥居　高サ一丈一尺、開キ九尺
一境内　三拾壱坪、民有第一種三千三百九十九番
一信徒　八拾七人
一管轄庁マデ廿八里拾六町
右取調之通相違無之候也　（干桐や文書）

天明五年（一七八五）に同位置に建て替えられたことと祭神は、そのときの棟札によって知ることができる。

その棟札[注7]によれば、諏訪大明神をまつり、通称里宮大明神と呼ばれ、北殿の氏子のもろもろの災や悩みを祓い清め、火災盗難の災を除き、五穀豊穣を祈念したものである。

里宮の呼び方からして、かの御射山神社との関連のあることが推察[注6]されるが、このことは、なお研究の余地があって、たしかなことは言えない。

社殿

里宮の本殿はもとの里宮社のものをその儘ここに引き移したものである。一間社の流れ造りである。屋根は柿葺で二重垂木、なげしの裏に菱形模様の絵が中にある。実肘木

で棟を支えている。出組の木鼻は単純素朴である。懸魚はかぶらけぎょで桁隠しもついている。両側面は板ばりで縁高欄があった跡があるが今は失われたままである。

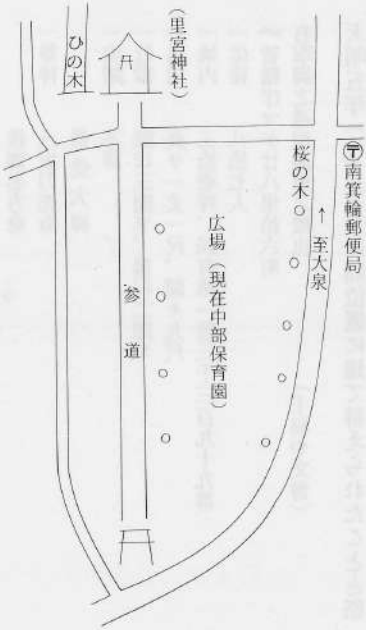
昭和四〇年、「里宮神社趾」の碑が建てられたが、その位置が祠の建っていたところで、その祠は、北殿神社内に移された。中部保育園が建設されるまでは、神社前には、広場があり、道路側には、桜の木が植えられて人々の憩いの場でもあった。

旧里宮神社（昭和初年）

注6 ……天正十三乙酉年大地震に会し、殿宇尽く破壊し、還た成らず、遂に各所に祀る。惜哉旧姿此に湮滅す。本村の内、里宮社、前宮鳥居原社等あり。……（長野県町村誌）

注7

奉造栄里宮大明神御宮殿天地長久社頭康栄
此度当社里宮大明神奉造栄往古諏訪大明神俗語仁
号里宮大明神ト当郷大小氏子諸災悩火盗殞悉化除
五穀能成子孫繁昌虫出留虫児等賀八十連続乃子化
至留迄福徳寿須処仍而如件
天明五巳十月廿一日　願主　当郷大小氏子
大工　伯耆原圓助
神主　鳥山右近太夫



(四) 駒形大明神址

駒形大明神は、元禄末ごろ描かれた北殿宿絵図にはっきり描かれてある。天保五年（一八三四）の村差出明細書上には、次のように記されている。

駒形大明神　社松森山　壱ケ所
右境内四方弐拾間祭礼三月廿三日ニ御座候。
村中呑用水出口ノ所ニ御座候。
（北殿区有文書）

この神社が、いつ創建され、いつごろすたれたかは明らかでない。いま、地名に駒形と呼ばれるところがある。推察するに、現在の金子氏宅南西方あたりにあったのではないかと思われる。

嘉永７年絵図

三　寺　霊場

(一) 松林寺

北殿の北西、段丘中段南箕輪村三二四〇の一番地、周囲を林に囲まれ、東側に開けた場所にある。

松林寺全景

不動明王

本尊　不動明王

由緒

伝えによると享禄年間（一五二〇年代）の創立になり、初めは性輪（林）寺と称し、箕輪庄殿村字大泉下にあり、両部宗の寺であったといわれる。開基は源専法印であったと伝えられる。（一説には正和三年（一三一四）覚元法印の開基、性林寺と称し、申興の開基が源専法印とも伝えられる。）[注8] 天文年中兵火にかかり下の段の田の中に移された。

慶安二年（一六四九）部落信徒の願により、郡内朝日村平出の高徳寺を介して、高野山金剛頂院に出願し、同院より優応法師を迎え寺を現在位置に移築した。由来、同法師を中興の祖とし、上野山松林寺と改め、高野山金剛頂院の末寺として真言宗となった。寛延二年（一七四九）四世権大僧都のとき釣鐘を鋳造した。第十二世秀法師のとき、天保十三年（一八四二）に西隣の地に新四国八十八ケ所の霊場を建立した。第一三世運遷法師のとき、嘉永六年（一八五三）釣鐘を改鋳した。明治五年五月第十五世常勝法師が円寂し、同六年六月廃寺となった。

明治五年この寺を北殿学校[注9]にし、同十一年南箕輪学校創立まで小学校教育はここで行なわれた。その後一峰松蔵和

尚が住職となって再興をはかり、木下嶺頭院の末寺となり曹洞宗に改宗した。大正八年、当時の住職全松道宗尼師が印度渡来の釈迦牟尼佛尊像を迎え寺宝とした。

十王像

なお境内に石仏の十王像がある。十王像としてはおだやかな御面相であるがなかなかりっぱなものである。

注8 【上野山松林寺廃寺跡】 東西六十五間、南北六十一間餘、面積一反五畝一歩、本村北殿耕地にあり。真言宗高野山金剛頂院の直末なり。正和三年覺言法印開基して性林寺と云ふ。寛永十五年焼失して再建す。上野山松林寺と改め、中興開基源専法印なり。本尊不動明王、十一面観音（此観音、慈覺大師の作なりと云ふ。）なり。支院なし。明治四年檀家皆離去す。同年七月官に乞ふて廃寺し、爾来北殿学校の校舎となす。（長野県町村誌）

注9

乍恐以書付奉願候

紀州高野山金剛頂院末寺
信州伊那郡北殿村
上野山　松林寺

右松林寺住職常勝死去仕候後弟子全龍儀ハ帰農奉願上候ニ付檀家四戸御座候処三人ノ者ハ換宗替寺相願壱人之者ハ神葬祭相願当時無住無檀ニ御座候間廃寺奉願上候尤寺附之地当村小校附ニ被仰付被下置度此段何卒御許容偏ニ奉願上候以上

明治六年六月　第十七大区第百三十四小区
伊那郡北殿村
副戸長　倉田　三郎
副戸長　有賀又七郎
副戸長　有賀　儀平
副戸長　倉田庄一郎
副戸長　清水　斉
副戸長　倉田　十郎

廃寺申立之趣
聞届候事
明治六年六月廿八日
㊞
筑摩県権令　永山盛輝殿

(二) 新四国霊場

新四国霊場（一）

北殿の松林寺の裏山にある。四国八十八ケ所の霊場の本尊を石仏にして安置し、新四国霊場と称し俗にはお四国様といっている。さらに奥之院に弘法大師の石像を納めてある。[注10]

江戸時代の終りごろ北殿に有賀嘉吉という人がいた。嘉吉は幼い時に父母を失い、さまざまな人生の苦労を味わった。そして人生の無常を感じ、一念発起して仏道に帰依し、全国の神社仏閣を参詣することを志して郷里を出発した。ときに天保四年（一八三三）の冬のことであった。高野山に参籠したり、四国八十八ケ所の霊場を三度も巡拝したりした後、七年ぶりに帰郷して、天保一一年春（一八四〇）新四国霊場の建立にとりかかった。

新四国霊場（二）

尊い霊場の御利益を受けるためには、四国八十八ケ所は伊那の地からはあまりにも遠い。年寄りや子供、巡礼に出られない人達にもなんとかして霊場参拝のできる喜びをわかちたい、との念願によるものである。

新四国霊場（三）

新四国霊場の建設にあたって必要とする資金を集めるために、嘉吉は夜を日についで多くの人々に寄進を呼びかけた。今とちがって、交通も通信も不便であったその当時、一軒一軒を尋ねて賛同を求めて歩くのは、想像以上に大変なことであったに違いない。寄進した人々の名は石仏の台座に刻みこまれているが、その多くは上伊那中部北部にわたる親類縁者や近隣の村人である。中には越後、江州彦根、摂州池田からの寄進もある。

これらは四国遍路の道づれになった人々であろう。

一番の阿波国霊山寺の本尊釈迦如来を初めとして各札所の本尊は大泉の石工、原此右衛門の手によって造られこの松林に立てられていった。嘉吉は四国八十八カ所の霊験にあやかることのできるよう各札所の土を香箱に納めて持ち帰りそれぞれの石仏の台座の下へ納めたという。

嘉永元年（一八四八）およそ十年の年月をかけて、新四国霊場を完成した後、大願成就の感謝の心をもって再び四

新四国霊場（四）

国巡拝の旅に出ている。信仰一途に生きた嘉吉はその後、お四国様の傍に法照庵という草庵をつくり、そこで念仏三昧の生活を送り、慶応二年（一八六六）正月四日なくなった。数え年七九歳であった。

こうしてできた新四国霊場は、村内はもちろん近隣の村々からの参拝者でにぎわったが、終戦後はすっかり忘れられて草に埋もれるばかりであった。しかし、昭和五一年四月一日、南箕輪村文化財の第一号に指定され、郷土の誇りとして保存されることとなった。

法照庵の跡は定かではないが、奥之院の前に嘉吉の墓碑があるが、それに新四国霊場をつくった経緯を述べた碑文がある。

なお、この新四国霊場にはどうした訳か三六番の石仏がなかったのであるが、保存会の方々が浄財を集め、村の補助金を得て、欠番の仏像を建立した。木下の石工、小島重人氏によって波切不動明王が製作され、昭和五四年四月二八日開眼供養が行なわれた。

注10　新四国勧進帳（南殿大宗館蔵）

新四国勧進帳

四　北殿学校

北殿に学校が創設されたのは明治五年九月二十四日である。松林寺が無住となり、廃寺となった建物を利用して久保村大泉村北殿村南殿村の生徒が集まって授業が開始された。同六年十月十五日には明治学校となった。

その後それぞれの地区の学校で述べる通りに他の部落に独立の学校ができてそれぞれの耕地で学ぶようになった。明治九年北殿学校と改称され同十一年七月一日には、桜ケ丘に南箕輪学校が創設され、そこで学ぶようになった。

北殿学校（旧松林寺）

五　古跡名勝

(一)　倉田の城址　付（倉田将監墓　北条丹後墓）

北殿のほぼ中央の東の段丘のつきる所にある。

東西約四〇メートル、南北約五五メートルの平地で、今は水田となっている。東は高さ二〇メートル余の急な崖で、杉の木立の下を飯田線が走り、南と北に深い堀があり、西にも堀の一部が残っている。南の堀の一カ所に北に向けて堀らしいくぼみがあることから、昔は西の堀は北から南まで続いていたものと思われる。

北にある堀は道清濠と呼ばれ、そこには冷泉が湧き出していて、土地の人は道清清水といっていたそうである。今も一年を通してきれいな水が湧いている。また堀の中に小さい石碑と石仏がある。風化してしまって、時代も誰のものかも読みとることができない。

この古城址を、土地の人は本城というが、ここに接して北城、西城の地名が残っており、御小屋という所もあったそうである。

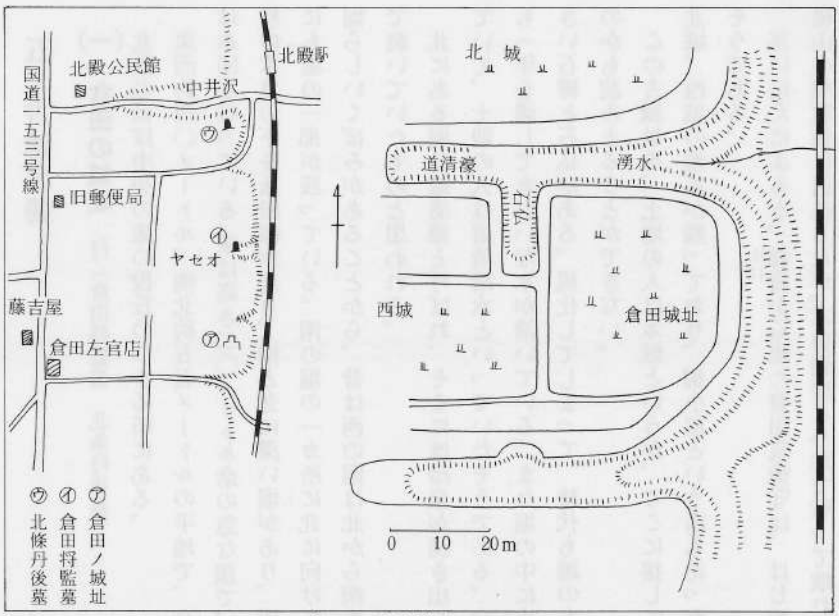
言い伝えによると、鎌倉[注11]から来た倉田筑後守は、はじめ横山の鳩吹城に居住したが、木曽義康と与地で戦って敗れ、

この土地へ来て館を構えた。その子孫[注12]将監安光は剛勇の士で、小笠原長時の旗下藤沢頼親に属して活躍し、天文七年（一五三八）七月十九日、甲州韮崎の合戦で武田[注13]方と戦い討死した。その子淡路守、石見守を経て子孫がこの地に住みついたというのである。

中世前半の戦乱の時代では城といってもその地方の豪族の居館であり、武力や支配力の中心となることはできても、その地域の社会的経済的の中心とはなり得なかった。従って近世の封建社会となると、そこはいつの間にか山林原野にもどり、田畑になって耕されたりして、館址は原形を失っていったものであろう。

倉田氏の子孫達は、将監の事蹟をしのんで、いつのころか本城の北のヤセオにある墓地に将監の墓を建てた。碑面には「倉田将監友綱」と書かれている。

なお、この地に倉田氏の前に住んでいたと温知集に記されている北条丹後[注14]についてはくわしいことはわからないが、伊那志略の箕輪の墳墓の項にこの墓のことが記されている。今この墓はヤセオからさらに北、北殿駅に近い中井沢を見おろす段丘の上の北条氏の墓の中に建てられている。



倉田の城址附近の見取図

注11　倉田氏ノ館跡　又曰　同氏其先築後守ハ鎌倉ヨリ来リ本郡伊那町横山耕地ノ鳩吹城ニ居住シ天文年中木曽義康ト興地ケ原ニ戦ヒ敗北シテ此地ニ移リ其子将箕輪氏ニ属ス云々村誌ニ見ヘタリ、将又箕輪氏附属ノ地士ニハ清水、日戸、高木氏等此地ニ点在シ居ルト雖モ主家ト共ニ滅亡シテ民間ニ降リ子孫今ニ継承ス（南信伊那史料）

注12　倉田将監住北殿藤沢頼親麾下之士、頗有武略也人呼曰鬼将監、天文戊戌戦死于甲州韮崎、其子曰淡路石見、倶以武顕、子孫今為邑長（伊那志略）

注13　天正の頃北條丹後守住之其後倉田将監安光住之是は藤澤頼親の旗下にて小笠原長時の旗下にて三将監と呼給其一人他仁科日岐将監筑摩神田将監倉田将監也倉田別て剛成故に鬼将監を呼玉ふと也天正七年七月十九日甲州韮崎合戦長時の御供にて打死す其子淡路其子石見是より民間に陥る（伊那温知集）

注14　北条丹後墓　在北殿、碑面題曰本孝超覚信士、辰四月廿日、温知集以為天正中之人、今不可考也（伊那志略）

（二）エドヒガン桜と庚申塚

小学校グランド下の北東にある。

1　エドヒガンザクラ

ここのエドヒガン桜の巨木は樹齢約二五〇年と推定される古木である。桜とすればこれほどの古木は珍しいものといわれ村文化財に指定されている。[注15]

この古木は昔庚申塔建立の記念植樹のものであろうといわれている。

エドヒガン桜

2　庚申塚

庚申塚

一庚申板碑　延宝八年（一六八〇）
一青面金剛像　正徳六年（一七一六）
一庚申　元文五年（一七四〇）
一庚申　寛政一二年（一八〇〇）
一庚申　安政七年（一八六〇）
一庚申　大正九年
一甲子　元治元年（一八六四）
一甲子　大正一三年
一馬頭観音像　五基
一二十二夜塔　一基
一不明像如意輪観音像か弥勒菩薩像か　一基
一筆塚　二基
一道標　一本

（三）おきな塚

旧伊那街道明和坂の下にある。かって塩ノ井「おきな」の前の高台に「おきなの松」があり、その下に芭蕉の句碑と筆塚があった。塩ノ井線の開通に際し「おきなの松」は切り倒されて、句碑と筆塚は、現在の位置に移されたのである。

1　芭蕉句碑

花の陰うたいに似たる旅寝哉

尾州隠士也有七十三齢書之
碑陰　元禄七甲戌十月十二日
当国三狂庵門人箕輪連中

この句は、貞享五年（一六八八）芭蕉の「笈の小文」の旅のときの句である。そのことば書きに「所は三吉野の花に宿かる下臥も、長閑ならざる夜嵐に、寝もせぬ夢も花と散り」とある。

「こうして花の陰にいると、謡曲の中の人物となったような感じの花の下に寝ることよ。」との意である。

筆者の也有は、尾張藩士一二〇〇石の大身で、御用人、大番頭、寺社奉行などを歴任し、宝暦四年（一七五四）五三才のとき退任して、前津の里に隠れ住んだ。俳句連句を多く

注15　信大農学部浅田、中村両教授の調査

ものしたが、俳文の「鶉衣」は、名著として知られている人である。也有が、伊那の俳人に迎えられた証拠にもなる碑である。

三狂庵は、相羽と号し、飯田藩の士分で、横井也有に従って俳諧をものした人で、この弟子たちが幾人かこの地方にいた。

芭蕉句碑

蠖堂矢部先生筆塚

2　蠖堂矢部先生筆塚

碑面

蠖堂矢部先生　筆塚

碑陰

先生矢部氏、諱政也、字根意、号蠖堂。高遠藩士也。明治十二年九月享年四十有九、病卒於東京牛込早稲田矣

明治廿一年三月建之　門人発起者　清水斎

原幸監

征矢彦十郎

清水重樹

筆子中

有志者

矢部蠖堂（一八三二～一八七九）は天保三年、高遠藩医の家に生まれたが、学を好み、書道も得意であったので、医業を継がず、子弟を集めて学問を教えた。廃藩後は東筑摩郡新村と本村塩ノ井等に私塾を開き、漢学および書道を教えた。ことに塩ノ井には門人が多く、七五名を数えるほどであったという。門人の中には後世、村の中堅になって活躍した人が多い。その数えを受けた門人達が、ここに筆塚を建てて師の恩に報いたのである。

3　山岳信仰碑

山岳信仰碑

碑面

大峯山大権現

（正面）富士浅間大神（東側）

金毘羅大権現

（右面）立山大権現（北側）

月山大権現

（左面）湯殿山大権現（南側）

羽黒山大権現

これは、修験道信者が建立したものであろう。

(四)　浅間塚址

浅間塚址碑

浅間塚団地に昭和四〇年に建てられた。

この所に富士浅間信仰による富士塚があり浅間神社もまつられていたが、住宅団地造成に当りこの塚は壊され、宮もまたなくなった。

六　碑

(一)　倉田寛幹先生歌碑

北殿の中部保育所の西に隣接する所にある。

碑面

潮音四賀光子先生撰書

訪友のたたへて云ふにほこらしく

仙丈岳と雪の山さす　　寛幹

碑陰　倉田寛幹先生はこの地に生を享け明治三十年上伊那農学校冬期科を卒業しその後木下小学校を始めに中箕輪南箕輪などの小学校訓導として三十五年間教育と社会教化に尽粋せられ村人に尊敬され衆望を集め村議となり後収入役を二期ほか村の要職十数年戦後農協監事又老人長寿会長として長きに亘り発展を期するなど一生を公共に捧げた人である。

先生は歌を好み号を月哉と言い太田水穂四賀光子先生に師事し潮音同人として常に歩んだ道を歌に詠まれその数実に数百首　偶々先生が喜寿の祝に教え子が中心となり先生の徳を偲んで箕輪の月歌集を発刊し心ある人に分った。その後も歌人として先生として慕っていた人が八十五才遂に他界された。ここに、先生生前詠まれた中から四賀光子先生の筆蹟にて、表題に掲げ歌碑を建立し箕輪の月と共に永へに先生として世の人々の鑑ならんことを念願して止まない。

昭和四十四年三月　　世話人一同　（十四名略）

倉田寛幹歌碑

(二) 「人には自らは」の碑

南箕輪中学校門左にある。

碑面

人にはやさしく暖かく
自らは厳しく正しく
健やかにたくましく

高坂正顕

「人には自らは」碑

碑陰

記念碑沿革

中央教育審議会人間像委員会において期待される人間像の最終報告がなされ戦後二十年漸く日本人の志向すべき道が示されたのを機に同委員会主査東京学芸大学学長高坂正顕先生の執筆を仰ぎPTAの活動により全村民の浄財を受け村当局の配慮のもとに生徒及び一般の銘とすべき記念碑建立の完成をみた次第である。

昭和四十一年十二月

南箕輪中学校

(三) 倉田翁頌徳碑

北殿字東垣外通称ヤセオ地籍の倉田氏の墓地にある。

碑面

君諱友喜、初称三郎兵衛後改三郎。信濃国伊那郡箕輪郷人。文永中有倉田将監源友綱者、始居于郡之北殿村、後歴十数世、至知恵、迎弥五左衛門友長、生三子、君其長子也。君夙受学於小松某、明治初年為北殿村里正、尋任副戸長、管郵逓事。又為南箕輪村副戸長・村会議員・郡会議員等、後任三等郵便局長。大正三年十月二十九日病歿。年七十七、君倹而喜施、尽力教育衛生兵役警察等事、屢出資助之前後数次、受褒状木杯。信神仏。故葬祭遵神式、諡拠仏家所定、曰永徳院賢翁義雄居士。配北沢氏、挙一女嗣、嗚呼君之子孫、勤倹守業、不墜家声、則君亦可以瞑矣。孫正氏、欲使子孫継父祖遺志、需碑文千余。乃叙其概表之云。

大正五年四月　伯爵　徳川達孝篆額

文学博士　井上円了撰並書

倉田翁頌徳碑

(四) 伊藤翁筆塚

伊藤翁筆塚は小学校下の庚申塚にある。

碑面

筆　塚　　世話人
　　筆児中

七十五翁

伊藤大次兵衛利庸

伊藤翁筆塚

・碑陰　文久元西年十二月

伊藤氏は、寺小屋師匠であったということ以外来歴等未詳である。

(五) 神社仏閣奉拝塔

新四国霊場にある。

碑面

正面　奉拝諸国神社仏閣塔

碑陰　東面　瓢箪とわれとのあひのさくらかな

湖月　　有賀嘉吉

北面　法照庵仏学祖印居士

西面　仏学祖印居士者為人正直純朴能観仏道。無妻子常仰大師遍照金剛之感応霊験。先是天保四年癸巳冬十一月西遊而不還殞七年。名所旧跡神社仏閣無処不到。順拝于四国弘法大師之遺跡三度。自懐、百数十里之遠郷里近隣之老幼不得到于此霊場願移八十八所之土擬之則近以至此遠以至彼乃携来而化簿普縁求地皆安置其霊像附之上野山松林寺十三年壬寅春三月也。多年夙志已成。近隣老幼拝参不断層仰其霊験者多矣。因供養三宝立石欲録此事乞文於東岳道人居士。姓有賀氏、名朝秩俗称曰嘉吉世為信州伊那郡北殿村人

隣邑木下　東岳道人中川道策誌

奉拝諸国神社仏閣塔

(六) 水神

1中学校西のいせんあわらの森の中横井の出口にある。

水神

碑陰　明治三十一年十一月十九日着手　明治三十四年一月二十日竣工

横井起業人倉田徳三郎方明建之

あらかじめ足利(たり)て嬉(うれ)しやこの清水

2松林寺境内にある。

水神

碑陰　大正十四年三月建　北殿北部水道組合

(七) 道祖神

1北殿一五三号線西側の塩ノ井境にある。

道祖神

天保七甘壮月

とある壮月は陰暦八月のことである。

2字内城の貯水池端にある。

道祖神

3同所に並んでいる。

道陸神

道陸神は道祖神のことである。二基とも建立年月不明。

七　井　堰

(一) 天竜井

箕輪町の町田橋辺より取水し、箕輪町地籍を通り、本村下段の塩ノ井、北殿地籍一帯をかんがいした。

天竜井は古くより公費を以て、普請修理をしてきた大切な井堰であった。[注15]

洪水で増水すると、度々取入口の牛枠が流れ、その修理補修は大かた三日[注16]町の者が請負ったようである。

文化三年（一八〇六）三月北殿村より飯島御役所へ届出た文書に次の文が見られる。

注15　字天竜川　一用水

是は前々御普請被仰付候趣ニは御座候得共　往古故相分不申、元禄七年申年板倉頼母様御領地之節御普請扶持米弐斗五升七合五勺御渡方有　之候皆済手形壱通御座候(北殿区有)

注16　一札之事

私共村方地内ゟ其御村方御田地用水之義堰揚来り候処当戌年より、井袋之内井筋西際に寄候ニ付井袋内江八十八夜前迄ニ用水路差支無之様土手枠立方引負申候処実止也尤土手枠立壱間ニ付銀四匁五分にて、馬路内壱尺五寸ニ片側江杭壱間ニ付四本宛打、且麁朶ねこ木して囲等いたし、御村方田地用水聊差支無之様可致且仕場ゟ秋彼岸迄之間少々

出水ニて損し候節は引負方ニて繕ひ可申満水ニて変地致し候節は御見分受別段損し方に応し代金可〻被〻下候。依〻之引負証文差出申処如件

文久二戌年四月

三日町村下

引負人　弥戸　右ェ門　㊞

同　村

請　人　歌　吉　㊞

北殿村

御役元

（北殿区有）

(二) 中島井

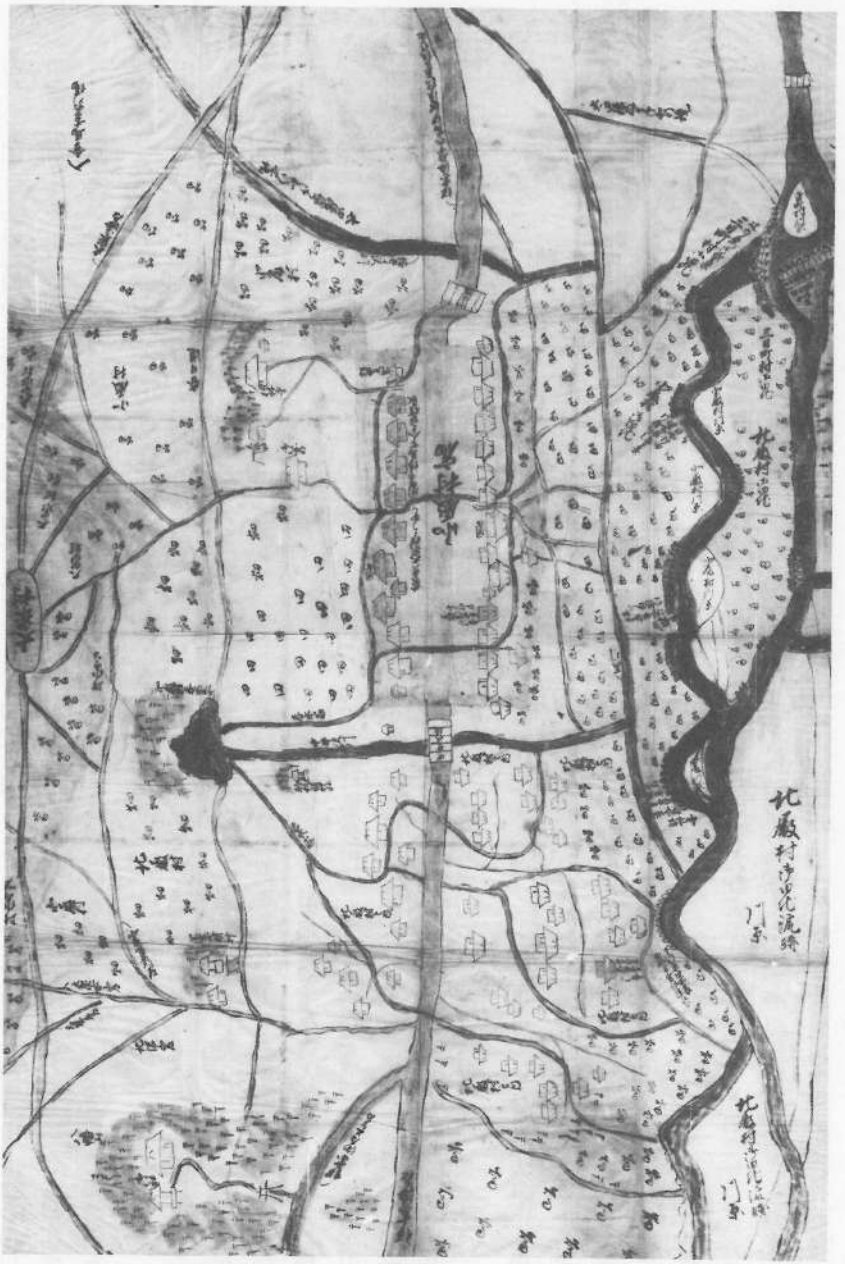
百間堤防の上から取り入れ、自然流入で、寛太大島一帯にかんがいした。

現在はこれらを含め、帯無川辺から伊那市古町までの天竜川およびその支流に取入口を有する一七か所の井堰を統合して、水利の合理化を図り、経費の節減と生産力の増大、農業経営の安定と合理化を目的とした土地改良区の事業が行われた。その十七カ所のうち天竜井は、最大の規模のものであった。

八　街　道

(一) 北殿宿

北殿が宿場になったのは、江戸時代の初め慶安二年（一六四九）のことである。正徳五年（一七一五）の「家帳出入裁許取替証文」[注17]によると、この宿場のできた経過がおよそわかる。それによると、慶長一三年（一六〇八）ごろ春日街道が開かれたとき、大泉が松島と伊那部の間の伝馬宿に定められ、以来伝馬拾匹をもって伝馬役を勤めて来た。ところが、脇坂淡路守知行のとき、その道は道順が悪いため、慶安二年[注18]に、伊那街道筋の北殿へ宿場を移すことになったのである。そこで、大泉から問屋一人伝馬役六匹分の百姓七人が引き移って来て、御伝馬役屋敷一軒に上畑一反二畝宛の居屋敷を与えられ、同時に北殿村にも問屋一人伝馬役六人が定められた。大泉から移って来た者は、街道の西側に、北殿は東側にそれぞれ間口六間半の屋敷をもって宿駅を整えた。それで、この宿場は、以来北殿村大泉村合宿[注19]と称した。



北殿宿絵図

この一二人一二匹の常傭の人馬によって松島宿から来た旅人や荷物の世話をしたら継ぎ立てを行なって、伊那部宿まで送り、伊那部宿から来たものは松島宿まで送ったのである。問屋は、その事務を司り、また、大名、旗本や公儀の役人の宿泊所の本陣も兼ねた。その他一般の旅人を泊める旅籠屋もできた。旅人だけでなく馬も泊めた。次の写真は江戸末期のものである。

はたご看板

本陣看板表

本陣看板裏（表後藤忠一郎様御宿）

警戒を厳しくするために、どこの宿場でも入口や出口の道は、わざと鍵の手に曲げたが、ここでは、もと伊那街道が塩ノ井から明和坂を登って今の国道一五三号線に出るところで鍵の手に曲っていたのである。

然し、この人馬だけでは、大通行のとき、不足することがあるので、その時は役所に願いでて次の八か村から村高に応じた人数の割当をもって人馬を差出すよう助郷村が決められた。それは、田畑村神子柴村大萱村上戸村中条村与地村羽広村南殿村である。さらに大通行の時には、次の村村が増助郷として助け合いをすることに決められた。それは、大泉新田村吹上村富田村中曽根村八ツ手村野口村中坪村である。

はじめのうちは、一か月の半分、一五日宛大泉と北殿が交代で勤めたが、後には、正徳年中（一七一一～一七一五）の御裁許にて北殿が二〇日、大泉が一〇日宛勤めるようになって明治に及んでいる。

（大泉中宿文書）

どのくらいの通行人があったか古いことはわからないが、明治二年六月伊那県への届書に、元治元年（一八六四）より五か年間の勤数についての記録があるが、そのうち元治元年一年間についてみると、人足千弐百弐拾人と馬三百

匹、それに最寄村々より助人足五百六拾人が動員されている。その賃銭としては、人足は平均一人につき銭弐拾四文馬一匹につき弐百四拾八文であった。この賃銭の合計は、当時の通貨にして金四拾六両永百弐文であった。そのうち金拾六両弐分弐朱永拾弐文弐分八厘御払賃銭として受取って、差引金参拾四両三分三朱と永弐拾七文弐分弐厘が宿場の負担になっている。（千桐屋文書）

右の負担以外に木曽助郷の負担は別にあったのである。

明治維新になって、宿場伝馬の制度が改められ、明治二年八月に、北殿大泉合宿の常備人馬は、次のように定められた。

人足拾五人　但　壱人拾四両弐分

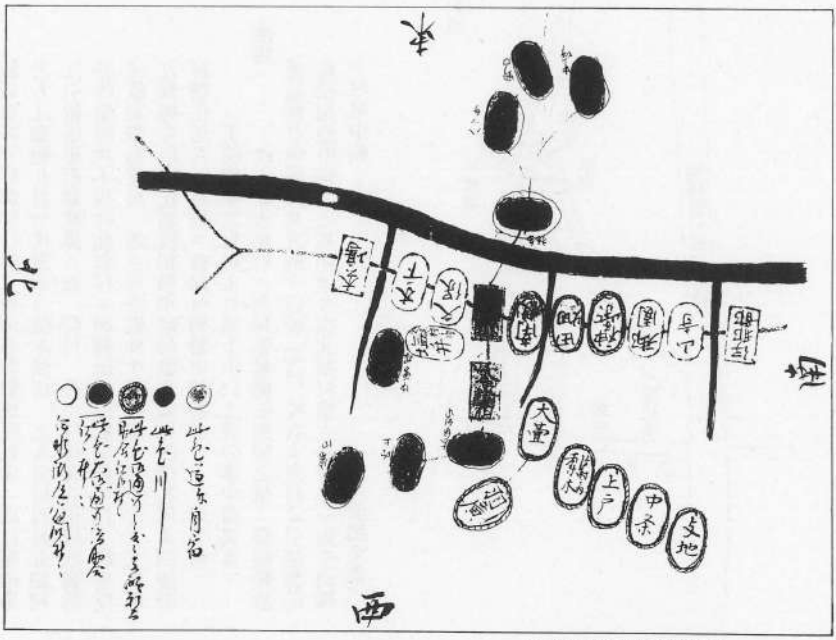
馬　弐匹　壱匹ニ付廿九両

右給金〆　弐百七拾五両弐分

然し、この常備人馬だけでは、間に合わないときは、このお定賃銭の外、仮に決められた賃銭を渡してくれれば、北殿大泉合宿では何時でも次の人馬を出すことも定められた。

人足七拾人

馬　四拾匹



大泉北殿宿助郷絵図

なお、さらに通行多数の場合は、次の宿附属の村から人足、馬の割当が、臨時触当次第何時でも出すように定められた。

人足　拾九人　馬　八匹　与地村
人足　九人　馬　四匹　中原新田
人足　拾参人　馬　六匹　中曽根新田
人足　拾人　馬　四匹　野底村
〆人足　五拾壱人　馬　弐拾弐匹

（千桐屋文書）

このように維新によって改められたが、明治五年に、助郷制度が廃止になり、「相対人馬通法」になるまで、この制度が続いた。

注17「信州伊奈郡北殿村ト大泉村伝馬役之者家帳出入御裁許取替証文之事」

北殿村より御訴訟申上候ハ伊那海道古来は大泉村通りニ而御座候所道順悪敷候付六拾六年巳前慶安二丑年脇坂中務少輔様御領知之節北殿村へ往還御附替北殿村宿場ニ被仰付伝馬拾弐匹之内六疋大泉村六疋は北殿村ニ而相勤可申旨被仰渡其節より問屋伝馬役に上畑弐町五畝七ト之御年貢諸役御赦免……

（千桐屋文書）

注18「……大泉村之儀往古ゟ伊奈海道宿場ニ而御座候馬拾弐匹之御伝馬大泉村斗ニ而相勤申候然処ニ六拾六年以前丑年脇坂淡路守様御知行所之節道筋悪敷御座候由ニ而往還道東之方江御廻北殿分往還道ニ罷成候依之大泉村百姓北殿村江引越伝馬相勤候様ニ被仰付候ニ付迷惑之由達而御訴訟仕候得共不相叶北殿村ニ而御伝馬屋敷壱軒ニ付上畑壱反弐畝宛御割渡被遊ニ付百姓仲ケ間鬮取リヲ以七人大泉村江罷越今以御伝馬役相勤申候勿論北殿村江茂其年ゟ問屋壱軒御伝馬六軒新規ニ被仰付相勤申候御事……以下略」

（正徳四年大泉村より差上申口上書の事中宿文書）

注19「……往古ゟ大泉村ニ而相勤候御伝馬宿之儀ニ御座候故道筋替り申候得共古例ヲ以被仰付候故大泉村ゟ引越御伝馬役相勤申候依之其節ゟ今次北殿村宿大泉宿と一宿を両様ニ呼来申候……」

（前掲文書）

(二) 北殿橋

北殿から福島へ渡る天竜橋は、もと北殿橋といって、ほぼ現在の位置にあった。

あばれ天竜といわれたほど洪水があるたびに、河川は氾濫し、住民は苦しめられた。現在の天竜橋は、昭和九年五月に竣工しているが、以前は太い丸太棒を打ち込み、その上に丸太を並べ、土砂を乗せて築いた土橋で、荷車が通れるくらいの幅で、橋上ではすれ違いは出来なかった。洪水があると橋の上まで増水し、流失することはしばしばで、その度毎に幾日も不通となり、橋の上流百メートルくらいのところに渡舟があって、それを利用した。[注20]

明治四三年に土橋を架設する際の文書は、当時の架橋の状況を知る上に興味ある資料である。

明治四三年三月「仮橋架設御届」を北殿（倉田弥治兵ェ）福島（松崎健六）の有志総代および北殿耕地総代（入戸登二）福島区長より提出、さらに四月には、福島の有志総代（斉藤十三郎・井口彦司・井口輝蔵）福与の総代（小島金太郎）も加わって「橋梁架設願」を提出し、六月にそれが許可になっている。一二月一〇日起工、二九日竣工している。

費用は寄附金によってまかなっている。福島区、北殿耕地、大泉耕地、鵜木、八ツ手、塩ノ井、南殿、久保、神子柴、野底および長田製糸はじめ、辰野諏訪の製糸工場から集めて、合計金四九七円三五銭となっている。その他個人の寄附や材料等現場の寄附もあった。

工事請負人は有賀末吉で橋は北殿側から一六間三尺で中州へ掛け、さらに中州から福島側へ一四間架けた。

なお諸雑費をみると当時の物価などが知れる。

五月二四日

一、　十二銭　菓子

一、四十二銭　酒一升

一、四十三銭　鮭缶　二ッ

この橋がかかってから、三回流失しているが、三回とも寄附金や区費でまかなっている。三度目のときは福島手良から寄附金が来ないので、高利貸から借金して精算をした。

渡舟の権利は当時まで、問屋が持っており、堀越が実際の運営をしていた。

現在の永久橋架設に際しては地元負担金があって、北殿では、中ノ原区有林を伐採してそれに当て完成のとき北殿橋を天竜橋と改めた。

注20　黒沢家文書による。

(三) 道標

道標　道標

国道一五三号線から八幡参道への分岐点にある。

右　八幡道
左　いせ道
天保二辛卯歳
正月中浣建之

これは伊那街道を通る旅人のための道しるべであった。天保二年（一八三一）は今から約一五〇年前である。また、中浣とは中旬の意である。江戸時代庶民の旅は主として信仰のために神社仏閣への参詣をする目的のものであったので、このような道標が建てられたのである。

伊那街道は今の藤野屋の北のところまでは一五三号線と同じで、ここから小学校下の庚申塚のあるところまで行き、八幡社へ行く道と分かれ、小学校運動場下の道を南殿の方へ通っていた。この道標はその分かれ道に立っていたものである。

(四) 水準点

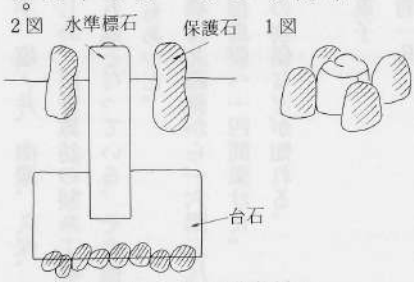
北殿の問屋の門の横に、1図のような石がある。これは土地の高さを測る水準測量をする場合、その基準となる点で「水準点」と呼んでいる。

建設省国土地理院が、水準原点[注21]から出発して全国にわたり、主な国道または都道府県道にそって設けている一等水準線路上に、約二キロメートルごとに設置したもののひとつである。一等水準点では、その高さがミリメートルの位まで正確に測定されている。

一等水準点は全国でおよそ一四九六〇カ所にあり、北殿にあるものには五三四七という番号が刻んである。地形図の上では、⊡印でその位置と高さが示されている。高さは水準点標石の上部の半球の頂点の高さである。北殿の水準点の高さは、六八二・一五メートルである。

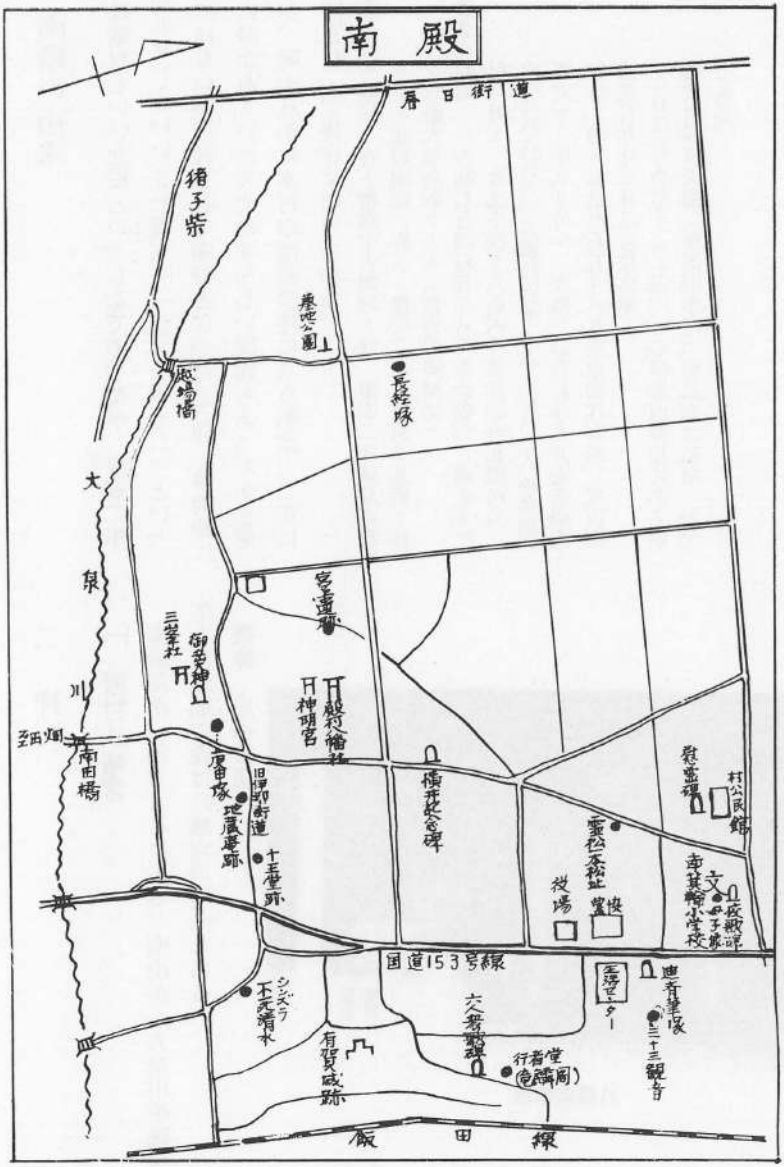
この近くには、松島、木下、北殿、田畑（信号の西）、伊那市前橋町にある。水準標石は2図のように堅固に埋められているが、高い精度を必要とするものなので、大切に保護したいものである。

注21 水準原点は東京都千代田区永田町の尾崎記念館のわきにある。東京湾の平均海面から二四・四一四〇メートルの高さである。



水準標石はカコウ岩（花崗岩）で長さ約1m

第五　南殿


南殿
春日街道
猪子柴
墓地公園
長経塚
大泉川
宮道橋
御名神
三峯社
殿村神社
神明宮
南田橋
唐塚
地蔵尊跡
旧伊那街道
十三塔跡
横井氏公碑
霊松寺跡
役場
郵便局
村公民館
文化財保護小学校
国道153号線
インターチェンジ
シンジュラ不元清水
有賀城跡
六人塔
行者堂
(南隣)
三十三観音
飯田線

一　南殿の由来

古くは殿村といい北殿といっしよであったが、慶安二年[注1]（一六四九年）といいまた寛文一二年[注2]（一六七二）といって定かではないが、独立して南殿となった。天領（幕府領）と私領に分かれていたのでむずかしい問題もあったかと思われるが、明治八年に本村の南殿耕地になり明治二二年には南殿区となって現在に至っている。

注1　。殿村　古エ殿衛中古殿村ト改　慶安二年南北両村トナル北殿南殿ト称ス　慶安二年大泉宿ヲ北殿エ移シ北殿大泉合駅トナル（長野県町村誌）

注2　殿村　。古高七百四石五斗八升壱合壱勺　南北弐ケ村ニ分ル　今高千四十六石四斗弐升壱合北殿村分内（九八六石六一五御代官所　六一石八〇六松島領）寛文十二年ヨリ分ル　今高三百石五斗八升壱合南殿村分　内（五拾七石五斗八升壱合御代官所　弐百四拾弐石九斗三升三合松島領）

「これは元文五年（一七四〇）の伊那旧事記にあるが御代官所は天領（伊那旧事記）、松島領は私領」の分である。

二　神社

㈠　殿村八幡宮

南殿部落の西方よりにある。南山から大泉川を眺望する広大な地域の森は八幡宮の境内である。

祭神　応神天皇

八幡宮参道

由緒

伝えによると、全国の八幡宮百九座の一である。朱雀天皇（九三〇～九四六）のとき、源満仲が勅命によって、信濃国水内郡戸隠の逆賊征討のため下向した際、賊徒の勢が甚だ強かったため、平定に難渋した。そこで石清水八幡宮に祈り、神助を願って、漸くにし賊徒を平定することができて、国中の百姓はじめて安堵することができた。満仲は凱旋の途中、この地の形勝なるをよしとして八幡宮を勧請し、弓矢を奉納して、神への礼とした。この年承平二年壬申（九三二）のことであった。

八幡宮拝殿

その後、満仲の弟満快という者の子孫の伊那真人為公が長治年間（一一〇四～一一〇七）箕輪の上の平に城廓を構えたが、その後裔の知久信定は祠殿の修造をし、崇敬すること厚かった。

鎌倉時代は、八幡宮は源家の氏神とし敬神の令を下して尊崇させたといわれた。文治元年（一一八五）信濃守小笠原長清は伊那に居城し、其の子長経、孫長忠ともに崇敬篤く、田園を寄進した。

南北朝時代におよび、信濃守護職小笠原貞宗は特に神域を拡め祭祀を盛んにした。

箕輪六郷の主となった藤沢行親の子孫は累世崇敬厚く頼親の時には武器を奉納し社殿の修理を行なった。

天文二三年（一五五四）武田信玄は伊那郡を略取した戦功に謝し七貫二百文の土地を奉納した。天正一一年（一五八三）八月木曽義昌は伊那郡北部に侵入し一時箕輪の地を領有した際その臣山村七郎右衛門をして五貫文の土地を寄進させた。

江戸時代になり、飯田領主菅沼大膳亮定利の臣朝日受永はその禄高のうち拾四石を寄進して次の各神社に分けた。八幡宮四石、三日町八幡宮三石、木下南宮神社三石、三日町御射山神社三石、松嶋稲荷大明神五斗、大泉諏訪大明神

五斗

御朱令印地は東西（一九八〇メートル）南北（二八八〇メートル）であった。

後、慶安二年（一六四九）将軍家光のとき朱印地に改められ、特に社中竹木諸役を免除せられた。その後、将軍家継のとき以来、書換が例規となり、現に朱印状九通が保存されている。注3

慶長一九年（一六一四）小笠原秀政神殿修造の事をすすめ、二〇年竣工遷宮式を挙行した。明暦二年（一六五六）飯田城主脇坂安吉は田園を寄進し、拝殿造営を行なった。その後板倉重宣、同頼母領知の節元禄三年（一六九〇）社殿修理陣幕一帳を奉納した。

明治五年村社に列した。同七年朱印地奉還に代って逓減録金を交付されることになった。

明治二二年夜火災により社殿悉く焼失したが二六年崇敬者の寄進によって神殿造栄が行なわれた。

明治九年本県第一回神饌幣帛料供進指定神社となり、昭和三年郷社となった。

明治三五年まで舞台があった。

朱印状

注3　棟札

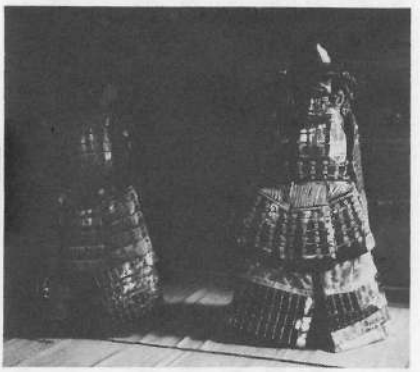
応需写旧称以贈之干時明治二十三年十月従四位勲四等伯爵小笠原忠忱　願主小笠原従五位上兵部大輔源朝臣秀政　奉行二木彦兵衛朝家　同市右衛門吉久　奉脩造八幡宮御宝殿　干時慶長二十年乙卯九月十五日願主敬白　御遷宮導師安楽寺権大僧都法日弁大和尚大工井沢二右衛門家近　小工数十人　宮奉行遠藤本齋可ト　神主鳥山甚之亟

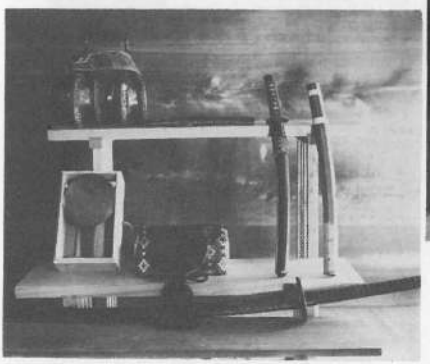
右ハ慶長年中小笠原家御寄附殿村八幡宮御宝殿火災ニ罹リ候ニ付今般御造仕候　明治廿四年十一月廿一日上棟祭　仝年仝月廿二日遷宮祭

社叢、宮殿

八幡宮本殿

八幡宮の樹林帯は数百年を越える常緑樹林で昭和五四年二月南箕輪天然記念物に指定された。特に境内参道の樹木は見事で、太さ四・二メートルの杉、二・七五メートルの桧、三メートルの松等の大樹が両側に並び聳え森厳の風満ちこゝに歩を運ぶ者の身心をしておのずから引き緊るのを覚えさせる。社殿の南の大杉、東の桧は共に古来神木とされ、樹令四〇〇年を越えると推定される。





八幡宮宝物

鳥居は控え柱を持つ両部鳥居で、かたわらにあるみたらし(手洗鉢)は明治七年に有賀光彦の寄進によるものである。数十段の石段を上ると左側に元禄三年(一六九〇)奉納のみたらしがある。宮前の広庭には、享保三年(一七一八)同七年(一七二二)をはじめ三対と四基の灯籠が奉納されている。

拝殿は入母屋作り銅板葺き正面向拝は唐破風作りである。擬宝珠つきの上り高欄のついた木階五段を上れば、正面及び側面に擬宝子高欄つきの切縁をめぐらし、脇障子が設けられている。正面三間は格子戸側面二間は横板張りである。虹梁様頭貫木鼻は単純な雲形、組物は出三ツ斗の変りものである。

本殿は切妻流れ向拝作りで棟の両端に千木をおき、五本の鰹木をのせ鬼板をつけている。正面板戸で三方は横板張り、軒支輪の三段はきれいで組は三手先の変形、向拝柱は左右へ二手出る組み方をしている。かえるまたもまたきれいにできている。虹梁はつなぎ虹梁になっている。

(二) 境内社

神明社

祭神 天照皇大神

由緒 不詳

(三) 三峯神社

三峯神社

殿村八幡宮の南、庚申塚の西の丘にある。

祭神 伊邪那岐命、伊邪那美命

由緒

明治一〇年前後から南殿には火災が頻発した。中には悪質の放火と思われるのもあった。そこで部落の人々は話し合って、明治二〇年ころ火災盗難防除に霊験あらたかであると信ぜられている三峯の神をお迎えして祭ることにしたものである。神主として、神道実行教伊那教会より下伊那の人、林岩志郎を招いて教会を開き祭司とした。毎年四月一八日を祭日として部落中の人が集り、北側の公園(太平洋戦

中食糧増産のため畑となった）で桜の花見を兼ねて祭りをするのがならわしであった。現在も四月一八日を例祭日とし、各戸へ御札が配布されている。

また、林氏は此の地において、神下（かみおろ）しの占いを行なったので、農作の豊凶、養蚕、失せ物、病気などの占いを求める人々が遠近より多く訪れたという。近年まで当村において、神占をした一、二の人は林氏の弟子である。

なお三峯神社は埼玉県秩父郡にあり、伊邪那岐、伊邪那美二神に、景行、文武、聖武天皇と天御中主神、高皇霊神、神皇産神、天照大神を合わせまつっている。維新前は観音を本地仏とし、神仏習合の修験者の行場であった。

㈣ 御嶽大神

南殿の公園内に建てられている。

祭神　御嶽大神

由緒

大正八年九月五日南殿の有志者が大泉白木屋の御嶽行者を先達として木曽の御嶽山に登拝した。その後毎年替り番に四、五人登拝していた。そのうちに以前大峯詣の行者堂で使っていたものが、その講が閉講になったとき講員が分け合って保管していたのを持ち寄ってそれを中心に講を結ぼうということになった。講ははじめ大峯講としていたが、後、南殿御嶽講となった。先達は山崎寿恵吉、鹿角辰次郎有賀善重であった。

太平洋戦中、行者堂の管理者中東や洒屋の理解を得て、行者堂を借り、行や祭事を行ってきた。その後、昭和二五年四月に三峯神社の西に御嶽大神の碑を建立したのである。

例祭

正月一四日　公民館で行なう。

八月一六日　石碑の前で行なう。

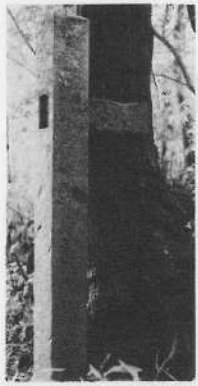
㈤ 山の神

三峯神社に合祀してある。

以前は農協低温倉庫西にあったが、祠が老朽したので三峯神社に合祀した。

三　堂庵

一　行者堂（龍麟閣）



鳥居
（右半分）

役優婆塞

南殿の行者坂の中程西側にある。

祭神　役優婆塞（えんのうばそく）

由緒

宝暦年間（一七五一～一七六三）のことである。南殿の有賀兵右ェ門の分家で隠居していた新左ェ門が重い病気にかゝり、医療に手を尽くしたがなかなか効果がなかったので、諸国の神仏に願がけをして平癒を祈願した。そこで兵右ェ門は、同姓の重左ェ門を伴って諸国神社仏閣巡拝の旅に出た。その途中大峯山へ参詣したとき、道中なかなか賑わい、御山の待遇もたいへん良かった。両人は感激し、大峯講を結ぶことを思い立って帰宅した。まず講本に重左ェ門がなり、続いて、庄蔵、政八、弥七とともに四人が先達となった。

講を結んでから約十年後の明和四年（一七六七）村の丑寅（北北東）の、俗に鬼門といわれる地に堂を建て、こゝへ役の行者を勧請しまつることにした。おいおい信者が集まり、他村からも参加するものが多くなり、繁栄したという。毎年村方から一人か二人、他村の者一人と金子（きんす）弐両をもって大峯山へ代参を立てたと。

本尊とした役の行者の木像の台座に作者名と年月日が記されている。

「信洲飯田城紬大仏師井出橘姓通正　六十八才ニテ作之右兵衛

信州伊那郡南殿講中

干時　明和四「丁亥九月吉日」

境内に滝を作り水垢離の行をしたり、（行者堂の名ある所以）大峯山代参の者が帰郷すると無事を祝い、盛大な祭りが行なわれた。参道には鳥居も建てられた。石柱には左の文字が刻まれている。

心霊本覚　龍麟閣御宝前
両部習合

なお当時先達の用いた旗や掛軸は次頁の写真のとおりである。（有賀善重氏蔵）

この行者堂はその後御嶽信仰の先達によって後年まで利用されたが、現在は廃屋となっている。

境内に南殿六人一首の寿碑がある。

注5　行者堂由緒

一　由来

抑々此の由来と云うは中興兵右ェ門と言ふ者重病にて医療少しも印なく、故に諸国の神社仏閣江重き願懸致し大峯山へ参詣す。其節金毘羅懸て参る故同姓親類成故に恒太郎弟今の平右ェ門之祖父重左ェ門と云者同道して参詣せし所大峯参りの別而の道中ははなやか成りし、又御山に而も御取用ひ能故思ひ立し事と申す也（大峯講結成）

先講元重左ェ門と相成り続い而庄蔵政八弥七四人先達と相成り候也

一　行者堂建立

当村丑寅ニ当リ俗ニ鬼門除と申す場所也故ニ此所江大峯行者（役行者）勧請し奉る也、是れは宝暦中の事也追々信心の者他村迄相加り益々繁昌と相成り大峯講と相成也当時金子弐両ニ他村壱人村方ヨリ一人か二人宛年参とは成りけり（大宗館文書）

信　仰　軸

先達の旗

(二) 地蔵庵跡

地蔵尊

殿村八幡宮の南の道を下り、宮前の道との辻をさらに百メートルほど東に進んだ右側に地蔵庵跡地がある。大泉川の段丘の中腹杉林の西である。今は堂もなく、石仏の地蔵尊一体と、大乗妙典千部供養塔一基、庵主の石塔三基その他石塔八基と念仏百万遍供養塔一基が、落葉の中に倒れたり埋れたりしている。

こゝにあった地蔵庵は円明庵ともいわれる。元来は金左エ門の家の個人の庵であったが、いつのころからか経済的に苦しくなったので、南殿村へ差し出したもののようである。[注6]

創建年代は不明であるが、元禄年間(一六八八～一七〇三)[注7]には村方へ差出されていた。天明五年(一七八五)三月一六日に念仏百万遍が行なわれ、また天保一四年(一八四三)に嶺頭方丈が来て、三〇人余の尼僧が集って大乗経一千部の読誦が行なわれたと記録にもあるところからみると、りっぱな庵であったものと思われる。[注8] 文化八年(一八一一)[注9]に改築されている。

明治初年までは尼僧が庵を守っていたが、明治三年時の庵主恵照尼の「餞別に遣す品々」の記録があって、其の後は無住となり、明治六年四月二九日一切が競売に付されて廃庵となった。

注6 元来ハ村方金左エ門先祖自庵ト申ス事也。左も可有。其早晩頃より身分衰ヘ村中江差出ス。村中一統ト相成申候。委敷事ハ是非ヲ不知(大宗館文書)

注7 「信州伊奈郡箕輪領南殿村差出帳」に「御除地御座候一地蔵庵地　弐畝歩　是ハ水帳ヘ茂乗不申御証文茂無御座候」(大宗館文書)

注8 大宗館文書、諸事聞書日記帳

注9 文化七年十月より村方地蔵庵造建ヲ思立チ八年ニ至リ成就ス。大財木ハ金左エ門、紋三郎、善八、清助、重左エ門、又夫より少し小木ハ文左エ門、文蔵、孫右エ門出ス。残之小木ハ文左エ門、文蔵、右エ門出ス。残之小木等ハ羽広村弥吉ト云白木屋より買求メ成就致ス所也名主孫右エ門出ス。施主同様之世話人。……文化九年清兵

衛ノ家売払ニ付ひさしを弐分ニテ買求拵ひさしと成也。其時之庵主は美濃国尼僧柔香ト申、比丘尼也。（大宗館文書）

㈢ 三十三観音

三十三観音（一）

三十三観音（二）

南殿の農業協同組合倉庫の北側に三十三観音の石像がある。これは大国屋のものであるがその由来は明らかでない。古老の話によると、「昔、大国屋が盛んであったころ、南殿の地蔵庵へ寄進したものといわれていた。ところが明治六年地蔵庵廃寺処分のとき、寄進者の大国屋へ返したので、同家ではそれを墓地である現在地へ移したのにちがいない。」と。

三十三体の観音像を見ると、なかなかできもよく、一番から三十三番までよくそろっている。製作年代も作者も不明である。

㈣ 十王堂址

地蔵庵（延命庵）遺跡より更に五、六〇メートル東の方にカヤと欅の大木が聳えている。其の場所に明治末期ころまで十王堂があり、祠（ほこら）の中には閻魔大王を中心に一〇人の王の木像が安置されていたという。其の当時を知る人の話では見るも恐しい形相をしていたと伝えられる。

この十王堂は近くに住む家庭に不運が続いたなどから、取壊すことを懇願され部落として焼却したと言う。

今にしてみれば文化財的な面から残念なことをしたと思われる。

十王堂址

四　南殿学校

南殿の西方、字宮ノ下にあった。明治六年に第一一〇番小学区第一〇一番校として発足したときは、大成学校と称した。生徒数は三〇人程であった。

明治九年に「南殿学校」と改称したときは、男生徒二六人、女生徒二〇人の盛況であった。明治一一年七月一日、南箕輪学校が字桜ケ丘に創立されるようになったので、南殿学校の生徒は「南箕輪学校」[注10]で塩ノ井・北殿・大泉の生徒と共に学ぶようになった。田畑や神子柴・久保の生徒と共に学ぶようになったのは、明治一九年からである。

注10　南殿学校

壱ケ所本村南殿耕地西ノ方字宮ノ下ニアリ南殿学校ト云生徒男二十六人女二十人　（明治九年　村誌）

五　古蹟名勝

一　宮の上遺跡

南殿八幡にある。

この遺跡は計画的に発掘されたことがないのでどのくらいの規模で、どんな遺構、遺物が蔵されているか全貌を把(とら)えることはできない。今までに採集されたものでは先史時代の石器類が多い。珍しい石匙、有孔磨石斧や石棒、石錘、円盤石、縄文期の土器や土師器須恵器等もある。（先史及び原始時代の上伊那郷土館所蔵遺物）「先史及び原始時代」の遺跡地図には先史時代の薄手を混ずる大遺跡地の記号が付けられている。貴重な遺跡地である。

同書に記載されている遺物が本村郷土館に所蔵されていないのは残念である。

宮の上遺跡出土石器

二　有賀の城

有賀城址（明治初年）

南殿の、天竜川と大泉川の作った段丘上に、有賀の城址がある。古くから有賀氏の居住した館址といわれている。

この城趾には、今も南と北に空濠があり、自然石の石塁が残存している。東は天竜川の河成段丘で急峻な崖になっており、その崖下は今鱒池になっているが昔は深い沼田だった。西に大手があったと思われるが、このあたりの道路にかぎの手が多いのはその名残りであろうか。長野県町村誌によると、「東西二十間南北三十五間余、今ニ城壕巌垣囲壁

ノ形ヲ遺ス。中古土ヲ鑿チ古瓦折刀ヲ得。」西に囲らされた石垣の上の塀は、明治初年（七年ころか）火災に罹った時、消火に不便であったことから取り払われて、中東のところに一部を残すばかりである。この館址には今も有賀氏が居住し、古くからの文書、什器、飾物などたくさん蔵して大宗館と名づけられ、本村文化財となっている。

㈢ 猪の子柴

殿村八幡宮の森の西、農協倉庫、工機部の南側を通って大泉川段丘のはたを西に、しばらくして坂を降りてゆくと、越場橋がある其の西南の高台に松の木が二、三本見えている。この段丘の上の辺より春日街道附近一帯が猪ノ子柴と呼ばれ、昔ここに猪などが群棲していたといわれ、其の地名の猪ノ子柴もこれから出たものと思われる。

注11 〔猪ノ子芝〕
本村南殿耕地の西南五町許にして、大泉耕地の東南方、交界の処にあり、今畑となりたり。往昔猪鹿群集、常に此地を占めて、児を乳養し、甚だ民害をなせり。健此事命御狩の御名方命之を駆り攘きたりと云ふ条に詳なり。（長野県町村誌）

㈣ 長慶塚址

三好長慶塚は南殿の西にあった。今は西天竜の水田になっているが、塚は三間余で、古は周囲が樹木が生い繁っていた地であって、里人がこの上で午睡しても誰も寝ることができなかったという。文久三年（一八六三）まで塚の上に大きな椹の木があったという。

この塚は天文六年（一五三七）藤沢頼親が武田信玄に敗戦したとき、松尾城主小笠原信貞と共に四国出の実力者三好長慶を頼って数年を過ごしたが、三好氏も兵乱で頼めなくなったので箕輪へ還った。後三好氏が亡びたので、頼親は其の恩に報いようと、遺物をここに埋め塚を造って、その霊をとむらったという。

西天のできる前まではこの辺を長慶塚という字名で呼んでいた。

㈤ 不死清水

南殿の美坂の下に清らかな水が湧きでてワサビ畑に注いでいる。その湧水は昔から不死清水と呼ばれ、長寿の水と尊ばれた話が伝わっている。[注12]

不死清水

昔、旅の長者が供人をつれて歩いていた。長旅で疲れ喉が渇いたので道ばたに湧く清水で喉を潤おした。

生き返った思いでまた旅をつづけた。幾年か経てその長者が病の床に臥し、臨終も近いと思われた時、供人を呼んで、かって旅をしていた時飲んだあの清水をもう一度飲みたいから汲んで来てもらえまいかと願った。そこで供人は遠い道のりを水を汲みに出かけた。そしてこの坂のたもとまで来てこの水をくんで帰った。供人は余り遠く来て日数もたったので、主人もあの病気の様子ではとてももはや生きていまいと思い主人のもとに帰っていった。汲んで帰った水を主人に飲ませた。しばらくすると病人は何となく生気を取戻したように見え、数日後には次第に元気となって、やがて病気も癒えて長寿をたもったと言われる。

注12　〔不知清水〕

本村南殿耕地の南端、人家尽くる所、美坂と字する坂の下に湧出す。其味極めて甘く其冷亦舌を穿てり、昔近郷に人あり、此道を歩する毎に、此水を飲みて其味を愛す。後此人死に臨み願くは又此水を味ひて、後鬼籍に就きたしと云ふ。旅人来り、この水を酌み、携へ帰りて与ふれば、病忽ち癒へたりと、旅人来りて此水を酌む時、帰路の遠きを憂ひ、嘆して曰、病者已に(しんずら)方言にして已に死に及ぶ可しと云ふ意なりと、故に以て泉の名となる。口碑今に亡びず。(長野県町村誌)

六　碑

一　横井記念碑

殿村八幡宮の鳥居の北約五〇メートルの道路わきにある。

横井記念碑

官幣中社諏訪神社宮司　従六位　安東正胤篆額

横井記念碑

農之本在水、無水鋤犁無所施焉。良農之用意真有以哉。我南殿居民少、十有余戸、天竜大泉二川、画東南其沿岸雖有饒田、崖上邑之所在、水利不洽、　姥懐之一泉、不過庖厨之用。有志者夙憂之、明治二十六年相八幡入之地、　欲鑿横井以使灌漑。而横井之起地以属御料林、陳情御料局静岡支庁。当路特解除保安林畝十一歩、而容其請。於是哉、　投資起工、掘鑿三百余間、乃湧泉滚滚焉。尓后開田五町歩余移居于此者、至十有余戸。嗚呼、水之利於人如是大矣。起業者等之功、不偉哉。今茲関係者、胥諮勒石、以貽于後人云爾。

大正四年五月

○碑陰

起業者　有賀光彦、清水平一郎、有賀寅蔵、山崎清七、山崎喜七、有賀幸三郎、有賀益四郎、清水庫三、清水甲子太郎、山崎大八郎、清水賢三

開　田　有賀光豊、清水甲子太郎、清水国武、清水篤、有賀錬治郎、有賀宗三、山崎清直、清水良子、清水庫三、有賀寅蔵、山崎光慶、清水義宣、山崎光治、唐木豊太郎

この碑は明治の中ごろ、南殿部落の有志者と地主が協力して、横井を掘り、苦心の末水を導き出し、四ヘクタール余の畑地を水田に開発した記念碑である。碑のそばを流れる小川がそれである。今はその下流に役場、農協を初め多くの住民の生活用水ともなり、水田と共にその恩恵に浴している。

明治二六年一月着工、二七年に開田工事を始めた。三〇年一部水稲の作付をし、三二年総反別四ヘクタール余の開田が完了し、三三年工事すべてが終了した。

横井工事請負費（水代金という）は一〇アール当り四八円余であった。（当時人夫賃は一人一日につき二五銭内外であった）

明治三四年より横井は開田地主の経営となった。三五年には水量を増加する工事を行ない、北の方向に支線一四〇メートルを堀りこれにより本支線合わせて六〇〇メートル余となった。その後、地主の交替もあって開田者一四名となり開田面積は五ヘクタール余となった。大正四年一〇月この碑の除幕式を行なった。

〔二〕迪斎先生筆塚

南殿の農業協同組合の北、国道東の小高いところ桜丘にある。

碑　面

迪斎先生筆冢碑

迪斎先生有賀翁退筆冢碑

信濃伊那郡、南殿村、令望之賢、曰迪斎先生有賀翁。諱光敏、字士和、迪斎其号也。通称全八、後曰迪斎。其先出藤原氏之裔。考喜内、名因利、妣大槻氏。考中歳而歿。妣性貞淑、孀居、数十年、能守家産、以授於翁。年既長、頎然、肥大、受学諏訪武井見竜、作近体詩、傍詠国歌、筆札亦研麗有法。従学者前後数百人、好延詞芸客。然恐私好文墨、以害農事、且戒子弟軽躁、毎率先力作、家道稍隆、数献銀於幕府、資所営築脩整、節用而能及於人矣。娶野村氏、孝於姑、而順於老、有一男二女、男則光彦、野村氏先翁而歿。翁以享和二年七月五日生、以明治紀元二月六日終。享年六十有七。葬祖先墓側。其編著有迪斎輯録詩歌集。及数十巻既而門人感翁教沢者、僉曰可表吾徒之誠、以慰先生於泉下者、其在埋遺愛筆、以鐫状於石歟。於是及門諸弟子、議卜地于桜丘。今茲辛未余偶来遊、以碑文見属。余辞不可。乃拠其状撰之。以授焉。

明治四年八月
昭年二十七年仲秋

岐蘇　用拙　武居　彪撰
雲溪　小島　春書

迪斎先生筆塚

碑陰

迪斎遺吟

立　秋

梧院風来一葉飛　更看雨打窓扉
長嗟歳月如流水　心緒悽然悟昨非

桜

のどかなる春にこころのなれそみてけふも桜の花の志た陰

卯　花

夏ぞきぬ衣やうすき白妙のひとへに勾ふ卯の花の里

明治二十七年仲秋　幹事　清水十郎
有賀文蔵
門弟子一同　據資建設管理者　男有賀光彦

題額「迪斎先生筆塚之碑」は東京森森高津柏樹の書である。迪斎の人となり、子弟訓育の功績を述べた碑文は、木曽福島の代官山村氏の学問所の学頭武井用拙（一八一六～一八九二）の撰で小島雲渓の書である。

迪斎は号で諱は光敏、通称を全八といった。享和二年（一八〇二）南殿に生まれ明治元年（一八六八）に卒した。漢学、国学に通じまた書もよくして、弟子数百人に及んだ。没後門弟子相謀って遺愛の筆を埋めてこの碑を建てたのである。

㈢　南殿の里六人一首の寿碑

南殿行者堂境内にある。

碑面

南殿乃里六人一首の寿碑

迪斎母大槻みし子　時年八十二才

ながらへて齢のか須も嬉しきに君が恵みをかさねつ

るか那

織部　清水政守　時年六十四才

いつしかもいはたのをのの月影にぬれて吹良ん秋のはつ風

小文次有賀其奥　時年五十九才

千早振松のを山能神垣にかはらぬ春の花も咲きけ流

迪斎有賀光敏　時年五十九才

竜川を月もわたりて筏船こきゆくかミに千鳥なくなり

次郎兵衛有賀守義　時年五十八才

多なひける霞のな可をこえゆかむ名こその関の花の盛りに

重左ェ門清水光康　時年五十一才

世の中のうつるならひもさく花は昔の春の匂ひこそすれ

碑陰

安政六年己未歳三月十八日

南殿里　清水徳光敬書

管理者　有賀光彦

醵資建設

六人一首の寿碑

四　霊松一本木遺址

霊松一本木
（昭和初年）

霊松一本木遺址

村公民館より百メートルほど西、八幡道の東側にある。

○碑面

霊松一本木遺址

官幣大社諏訪神社宮司正五位　高階研一書印

○碑陰

天然記念物霊松一本木高九十尺、周囲十五尺余、樹齢五百年相伝我祖宗所手植也直幹嵩々聳于雲表独立于四隣姿勢偉秀所世之希覯也是以名聞于遠邇夙入于貴紳墨客之諷誦与画図近得県之旌表焉偶昭和九年九月二十一日駘風襲来其猛烈惨怛

之状、古来未曾有老幹難支倒壊今。噫乎千秋之恨事也矣。今茲為記念刻石表遺址更植稚松一株継後永示後昆云爾

昭和十一年九月二十一日　　清水　磐源政明誌
　　石工　唐木儀三郎

注13　南殿有一老松
　挺立数仞　里人言　斫之血出
　按玄中記曰　百歳之樹　其汁赤如血　然非血也
　（伊那志略巻十六附録）

本村南殿耕地戌の方、二町許の道傍にある老松なり。周囲凡一丈四尺余、麓葱として高く雲を突き、風景絶奇行客常に樹下に息ふて奇を叫ぶ。霊松の名空しからず。

（長野県町村誌）

碑面には諏訪神社宮司高階研一の書になる「霊松一本木遺址」と刻まれてある。碑陰には清水政明の記になるこの松に関する記事が刻まれている。それによると、この松は高さ九〇尺（二七メートル余）周囲一五尺（四、六メートル余）の大木でその偉容は遠くからも望まれた立派なものであった。天然記念物に指定されもしたほどの木であったが、昭和九年九月二一日の颱風で倒壊した。古来霊松として近隣の人々や旅人からも嘆賞された。また口碑によると嘗ては二本の夫婦松とも呼ばれた。

(五)　慰霊碑

村公民館の南庭にある。

慰　霊　碑

碑面

慰　霊　碑

諏訪大神宮司三輪磐根謹書

碑陰

碑陰には本村出身の日清戦争以降大東亜戦迄の戦没者、義勇軍並開拓引揚物故者、公務殉職者名が刻まれている。昭和四十四年四月　南箕輪慰霊碑建立委員会の建立である。

日清戦役以降大東亜戦争迄之戦没者

有賀三次郎、高木栄三、有賀放太郎、松沢峰三郎、倉田春三郎、征矢弥七、清水修三、白鳥義則、倉田幸雄、入戸治男、有賀忠敬本村勝男、松沢守人、松沢重臣、山口文晃、原道広、唐沢次雄、唐沢重信、松沢太郎、小林政司、清水末次郎、唐沢清可、唐沢準三、関根信吉、清水芳雄、高木秀美、清水孝好、丸山広、加藤次郎、植田忠治、倉田藤吉、有賀一三、有賀喜三郎、堀敏秋、征矢輝雄、征矢利美、下島英雄、伊東博人、有賀貞良、有賀重幸、原久雄、白鳥三一、征矢幸一、征矢庄平、高木利保、征矢一男、五味丈夫、安藤務、山崎正光、永井長雄、堀井健、倉田杉雄、征矢七衛、丸山唐三郎、松沢直治、倉田勘蔵、松沢二郎、原忠直、唐木喜雄、清水幸次、丸山広、北条栄一、加藤明、唐沢義男、唐沢千明、中林孝義、原義人、有賀宏平、原正七、唐沢泰人、三沢進原利徳、小島正行、唐沢金人、藤沢範雄、加藤義雄、征矢得之、酒井弘人、池上安人、黒沢芳周、穂高正秋、小松利根雄、出羽沢重春、有賀久勝、原霊人、池上輝夫、小沢芳雄、丸山基康、酒井博義、加藤利治、原正利、上田喜一、清水辰雄、唐木正春、征矢孝行、清水四桜、関根総吉、清水美行、耳塚英雄、北川米一、清水利市、高木良雄、高木重理、加藤修次、飯島勝由、唐沢重信、池田守雄、小林賢、清水正孝、征矢克郎、安積保、岩佐甲子男、沢田直志、安藤節雄、加藤清弘、小林高治、倉田正雄、高橋通夫倉田孫衛、出羽沢善弥、唐木元顕、太田義人、加藤春雄、川上光雄、高木重冬、原一美、杉沢義雄、飯塚勇、唐沢武雄、伊藤四郎原伯郎、征矢国雄、藤沢孝一、下平正一、小林禎三、穂高千鶴、日戸章、丸山清志、伊藤富男、池田正甲、北条政人、矢沢源十郎唐沢杉太郎、木下久太郎、三沢実、征矢清司、原恵美、小野正吉堀富夫、有賀武、唐沢利男、山崎嘉明、白鳥半吾、樋代義雄、清水文賢、沢田兼之、

義勇軍並開拓引揚物故者

有賀みさと、伊藤兼義、沢田詔次、唐沢正一、立石その、立石浩子、立石夏子、立石ほなみ、清水縫男、清水竹子、清水弘司、清水達夫、茅野時子、杉本定雄、大沢三郎、倉田英光、片桐千代美武井弘重、杉本恵子、清水征夫、平杉けさよ、清水重子、平松勝伊藤今子、伊藤光子、伊藤富貴子、池上昭治、熊倉文雄、倉田四良、松沢富美子、正木千春、平松勝雄、清水美智子、山崎千代子山崎ふみゑ、山崎俊子、征矢克彦、伊藤君子、大沢正明、田畑斌原正芳

戦　没　者

征矢万千代、山崎隆行、加藤正巳

公務殉職者

丸山寛一、高木誠三、清水義宣、山崎大八郎、征矢義一、有賀正

一、唐沢正一郎、倉田重樹、加藤友光、有賀忠文、原孝澄、松沢寛、原参三、赤羽専一、征矢善高、征矢啓三、赤羽菊七、堀善左衛門、原義十郎、加藤五郎、唐沢辰義、高木義章、唐沢文亀、原作太郎、小島友一、征矢吉郎、

昭和四十四年四月　南箕輪村慰霊碑建立委員会建之

六　母子像

母子像「いづみ」

小学校玄関前にあり「いづみ」と題されている。

碑陰　昭和四十三年三月建立　南箕輪村　南箕輪ＰＴＡ

小学校では新校舎建築なって以来情操教育のため環境整備につとめた。庭園、理科池等次第に整備されたが、さらに芸術的気品の高いものを欲しいとの声が揚がった。そこで村の予算と、村民からの一般寄附によって瀬戸団治氏に製作を依頼し、ブロンズ像を建立し、昭和四〇年二月一三日除幕式を行なった。時の予算は五〇万円

村の予算より三五万円、

ＰＴＡ会員一戸二〇〇円　準会員一戸一〇〇円　計一五万円

㋹ 小学校校歌碑

小学校玄関前左側に立っている。

碑面

一　窓べに聳てる駒ケ嶽
崇高さ訓ゆこの教室に
学びて我ら人となる
前途に待てり新使命

二　天竜川の音清く
心を濯うこの校庭に
遊びて我ら人となる
前途に待てり新文化

三　秀麗伊那のこの丘に
由緒もふかき学校の
南箕輪の名を負いて
いざや進まんもろともに

碑陰

作詞[注14]青山榛三郎
作曲[注15]井上武士
書　矢野路雄
贈　昭和四十八年度卒業生一同

校歌の碑

注14　作詞者青山榛三郎は当村田畑の人、松沢修一郎（一八九一―一九七二）が本名である。氏は若くして上京府立一中卒業後、第八高等学校より早大に学び、大正六年より県下の小中高校に教鞭をとり、昭和二八年退職した。短歌をはじめ若山牧水に師事し、後「潮音」の同人となり、また短歌誌「山河」を主宰した。

注15　作曲者の井上武士（一八九四―）は群馬県に生まれ、東京音楽学校甲種師範科を卒業し音楽教育者の育成に専念した人で、長野師範の教諭も勤めたこともある。音楽創作指導には特に力をそゝいだ人である。

右の両氏に依頼して昭和二五年九月二五日制定された。

ハ　庚申塚

八幡森の南、通学路の西側にある。

一　**庚申供養**　享保一七年（一七三二）
一　**庚申**　元文五年（一七四〇）
一　**庚申**　寛政十二年（一八〇〇）
一　**庚申**　安政七年（一八六〇）
一　**庚申**　大正九年
一　**甲子**　元治元年（一八六四）
一　**甲子**　大正十三年
一　**蚕玉大明神**　安政七年（一八六〇）
一　**南無大勢至菩薩碑**　天保五年甲午
一　**道祖神**　明治廿五年十月十日勧請
一　**金毘羅大神**
秋葉大神
一　**十一面観音像**　享和四甲子年　奉□講中
一　**馬頭観世音**　閑竜拝書

南面　南殿村田畑村山寺村羽広村神子柴村塩ノ井村
沢尻村御園村北殿村

北面　嘉永三庚戌年二月吉日桑嶋流馬医山崎政八建
世話人　山崎清七、清水彦兵ェ、石工　有賀伝蔵
有賀善ェ門

一　**廿三夜**　寅政二乙卯吉日
一　その他　馬頭観音三十七基、地蔵　二基、如意輪観音一基

七　井堰

一　大河原井

南殿には昔から井堰が五筋あった。大泉川から四筋、天竜川からの取水が一筋である。大河原井は、天竜川の北殿の橋の下二〇〇メートルほどの所で取水されていた。天竜川の瀬に牛枠（うしわく）を入れ沈床を作って水を揚げ、黒川の流れの上は木製の樋で打越し、高い土手は暗渠（あんきょ）で通していた。暗渠から出た水は西井、中井、東井の三筋に分かれていた。[注16]

天竜川の満水で井堰が欠壊したときには黒川の水を利用したようである。[注18]

今は伊那土地改良区の一貫水路に合わさって南殿の大河原田約九ヘクタールを潤している。当時は興亜電工中央工場が無かったので、暗渠から出た水は約一五ヘクタールの田に灌漑していた。

天明三年（一七八三）は全国的に気候不順、雨多く、天竜川出水の時柳土手が流失したので、百間枠に願ってそのように作られた。

注16　堰五ケ所御座候。内四ケ所大泉川より水取用申候……壱ケ所北殿村前よりくろ川と申を七町余り上より水取用申候。尤北殿村田へも用申候。杭そだ、芝にてせき上げ人足百人程入申候。……此反別三町九反七畝壱歩之所へ用申候。……」元禄十二（一六九九）南殿村差出帳（大宗館文書）

注17　当村井口之義ハ天明年中迄北殿村黒川天竜川堀川両様共相用候。堤土手柳等年来生茂り夥しく有之所、天明三卯年出水之節欠流、夫より古之通り百間枠御願申、揚口川除出来スルナリ。（大宗館文書諸事聞書日記帳）

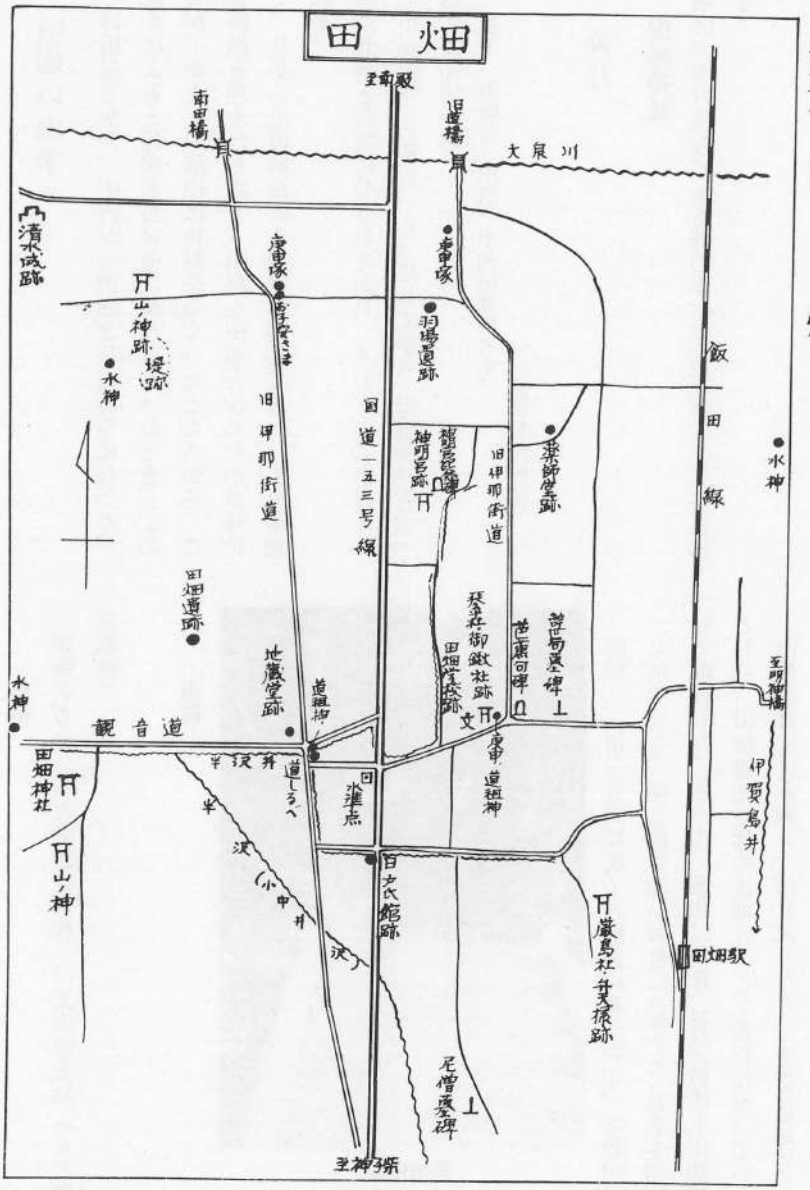
注18　伊那土地改良区　昭和二六年設立　南殿地区加入面積は十三町九反五畝〇一歩、内大河原九町二反〇二九歩、
二十八年九月区画製理、三九年南殿地区幹線水路布設四六年土型水路をU字管に改修、五四年法五十条に基き余剰地処理完了

(二)　大泉川井

南殿には村中をきれいな水が幾筋も流れている。字清水の自然湧水を引水したものであるが、不足するときは大泉川から引水している。昔からその井が四か所あった。[注19] 元禄の頃すでに三七六アールもの水田用水としていた。

注19　四ケ所大泉川ヨリ水取用申候此人足年に廿人程、芝三拾七駄程ヅツ入申候、反別三町七反五畝廿三歩之所へ用申候、普請之義図指斗ニテ致来り申候。（南殿村明細帳大宗館文書）

第六　田畑


田畑
至南殿
南田橋
道橋
大泉川
清水城跡
庚申塚
庚申塚
山ノ神跡
堤跡
水神
羽場遺跡
旧伊那街道
国道一五三号線
神明宮跡
旧伊那街道
飯田線
水神
田畑遺跡
地蔵堂跡
道祖神
水準点
田畑神社
山ノ神
道しるべ
半沢
半沢（小中井）
沢
日吉氏館跡
尾崎遺跡碑
至神明宮
道祖神
庚申塚
田畑遺跡
観音道
蔵島社・井戸跡
田畑駅
伊賀島井
至明神橋

一　田畑の由来

古[注1]くは田畠とかき、中古から田畑とかくようになった。古い伝えによると建御名方富命が狩をなさったとき、この地の者が、命とその群臣に食料をおくったところから、この地を田畠と呼んだという。田畠を田畑と改めたが意味は同じで、昔から土地柄がよく農耕が盛んであったことが想像される。

田畑は北割と南割に分かれており、それぞれ神社をもっていたが、昭和二三年に一しょにして祭り、田畑神社となって今日に及んでいる。

注1　田畑古へ田畠、中古田畑村とす。

（長野県町村誌）

二　神社

一　田畑神社

田畑区の西方段丘にある森の中、字前宮原七〇二三番地にある。

祭神

建御名方命（もと諏訪社祭神）、天照皇大神（もと神明宮祭神）

由緒

田畑神社

昭和二三年三月両社氏子の総意に基づいて、字神明にあった神明宮を、前宮原の諏訪神社に合祀して社名を田畑神社と改称した。さらに、昭和二八年二月宗教法人田畑神社となり、田畑耕地全体の氏神社として現在に至っている。

田畑神社には本殿（一間社流れ作りの本殿が覆屋の中にある）、拝殿のほか、宝蔵、舞台、社務所、水屋等の建物が

ある。この中で舞台は、青年衆による奉納演劇、演舞や、地芝居等を目的として建てられたもので、正面一一・七〇メートル、側面三・六メートルの大きさであるが、村内唯一の舞台で貴重なものである。なお、鳥居は控え柱のある両部鳥居であり、境内には三対の信者による献燈（石燈籠）があるが、天満宮前のものは宝暦一二年（一七六二）に建てられた古いものである。

1　諏訪社（諏訪大明神）

この神社はもと前宮大明神で、伝[注2]えによると大山田神社穂屋の神事の遥拝所であった。社領の荘園より神饌（せん）を供することがあったが、天正年間（一五七三～一五九一）以後このことは廃絶したと。

諏訪社舞台

諏訪社の社地の地名や伝えによって察するに創建年代は古く、大山田神社（延喜式に式内社とある）、御射山神社と深いかゝわりがあると思われるので、このことについてなお研究の余地がある。明治五年村社となり、同四五年九月神饌幣帛（へいはく）供進指定社となった。

昭和二三年まで南割耕地の氏神社として、いくたびかの維持修復が行われ、多くの社地も持つに至り、諏訪社として南割氏子の尊崇を受けてきたのである。

2　神明宮跡

神明宮[注3]は元禄三年（一六九〇）北割耕地の氏神社として宇神明の地に造営が始められ、翌四年四月一日鎮座式が行なわれた。その後、理由はわからないが社殿を失ったものか、創建後約五〇年、享保二一年（一七六三）千載（さい）不易の鎮守なりとして再建された。更に増築修復が加えられ明治五年村社となり昭和二三年合祀（し）まで、北割耕地の氏神社として尊崇されてきた。

合祀後の神明宮跡地には、昭和四六年一〇月「神明宮跡」の碑を建て永久に史跡として残すことにした。社域は現在区有地となり、運動場として利用されている。

3　境内社

弁財天社　（昭和二三年三月弁天ケ崎より遷座）
御嶽社
塩釜社
居森殿
天満宮　（万延二年二月二四日子供連再建、昭和二三年神明社域の天満宮を前宮原天満宮に合祀）
秋葉社
琴平社　（昭和二三年三月金刀原より遷座）
厳島社　（昭和二三年三月峡ケ上より遷座）
蚕霊社　（二社あり）
御鋤（鍬）社

旧神明宮

4　御頭郷祭と田畑神社

諏訪神社上社の祭りの当番が一〇年に一度旧中州村福島区に回ってくる。その時の御頭祭に田畑、神子紫、御園、山寺四区の代表者が招待される慣例になっている。

そのいわれについては記録がないので確かなことはわからないが、次のように推察することができる。

1　遠い昔、四区が狩の獲物や農産物をたくさん持って行き神様にあげた。

2　遠い昔は太田切まで諏訪領であったといわれるから、諏訪大明神の社領が四区の地域にあった。

3　福島区の氏子が少ないので、技郷として四区を氏子に加入してもらった。

4　上社本殿の幕を明治以前に四区で奉納したことが誌されているので、古いつながりを持っていた。

5　神様にお供えする鹿など伊那の御射山あたりで猟をした。その時に四区が協力をした。

いずれにしても遠い昔からのことで由来をつかむことは困難であるが、今後も続いていくことだろう。（以上伊藤光麿氏談）

注2　「……該社は大山田神社（式内社）穂屋の神事の遥拝所にして神領の荘園より神饌を供す、天正年間兵乱以降廃す」　（長野県町村誌）

注3　田畑神社棟札

イ　神明宮造営

元禄三年九月十六日宮作り鋸始メ翌年四月朔日鎮座式ヲ行フ時の氏子十七戸、

大工　高遠町番匠善之亟

ロ　神依人敬増威

当社千載不易之鎮守也中興従造宝鳳暦五十一年今般新奉再覆天下泰平氏民繁栄

神主伊藤伯耆守、田畑村名主松沢勘太夫、同村大小氏子、大工清水清左衛門、葺師伊藤権兵衛、井口杢衛、齋藤兵右ェ門、御代官室七郎左衛門、干時享保二十一年三月祭日

(二)　山の神

(1)田畑神社の南約五〇メートルの林の中に小さな社殿がある。これが山の神である。

こゝは南割部落から西山への登り口であって、同部落の山の神であるという。

(2)けいじの庚申塚の所から上の段に通ずる道路が、上の段へ登り始めるところに一アール程の区有地があるが、そこに山の神が祭ってあったと伝えられている。

こゝは、北割部落から西山への登口であって、同部落の山の神であったといわれている。

三　堂

(一)　地蔵堂とお子安様

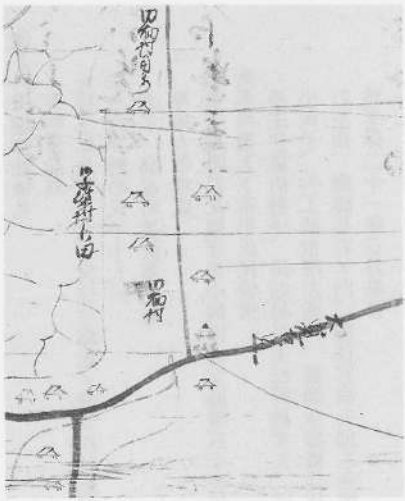
お子安様

田畑部落の西北にある庚申塚の南端に、子を抱いた石仏（子安観音）が建てられている。田畑の人達は安産や幸福の祈願によくお参りをしている。

天明四年（一七八四）[注4]の田畑村明細帳に堂一か所とあるが位置が不明である。しかしそれより古い天和四年（一六八四）[注5]の古絵図にはっきりと堂の図がかゝれてある。従ってこの堂はそれ以前からの古いものであるが、この堂とお子安様について次のような話が伝えられている。

今から一二〇年ほど前、安政年間（一八五四～一八六〇）に、旧地番一八四番地（現在喜多側家宅地内）に地蔵堂があった。この地蔵堂に老僧尼夫婦が住んでいたが子供がなく、身寄りもなかったので、死後は無縁仏になることを思いこゝに石仏を建てゝ、道行く人々の供養を願い、また、お産をする人の安全をも願ったという。そのため、石仏に二人の法号、釈大石開道、釈大鏡利貞と刻まれているということである。

この石仏にまつわる因縁話にこんな話が語り伝えられている。



天和四年の絵図

この地に、おしようぶさんという人がいた。お産が大変難産で二日も三日も続けて眠っているとき、夢まくらにこの仏様が立たれて、「お出産のお手伝いをしたいがわれはうつ伏せに倒れているので、起こして献灯し祈願すれば必ず安産できる」とのお告げがあった。さっそくお告げのとおりにしたら間もなく女の子が生まれたという。そして、このおしようぶさんは、その後千数百人の出産の取り上げをしたといわれている。

田畑婦人会は、この話を語り継いで二十三夜様の日には僧を招いて法話を聞き、安産の祈願を続けている。

地蔵堂の建物は明治になって壊されて、その材は田畑学校の建築に利用されたといわれ、石仏は、お子安様が庚申塚に移され、他の石仏は内原に移され、その跡地にはいまなつめの木が一本残っていて昔を語っている。

また、この石仏を建てられた尼僧は明治元年に没し、田島屋の墓に葬られ、「仏参慈生尼油弥」の法号の墓碑が建てられて供養されている。

注4　天明四年辰四月明細書上帳信州伊那郡田畠村（門屋文書）

一堂　壱ケ所御座候

注5　天和四甲子年田畑神子柴林場境界論争関係絵図（門屋文書）

(二) 薬師堂址

田畑の北割地籍にも一箇所薬師堂があったといわれている。薬師堂の跡地はもと区有地であったが、昭和二〇・二一年の農地改革によって私有地となり、現在は松沢氏の宅地の一角になっている。

この薬師堂については、物証になるようなものが現在のところ見つからず、いつ頃建てられたものかを明らかにすることはできないが、明治の初めに壊されて南割の堂と同じように、その材が田畑学校の建築に利用されたといわれている。また、次のような話が伝えられている。

このお堂には一人の僧が住んでいて、この僧は眼病を治すことが上手であった。そのために近郷の村々からも眼病の治療に多くの人が通って来た、と。

四　田畑学校

明治五年八月三日国民皆学の精神による学制発布に基づいて、各村に相次いで官立学校が設立され、田畑学校[注6]は、筑摩県第一八中学区、第一一二小学区の第一〇五番学校として、現在の田畑公民館のところ（字金刀原）に設立された。開校は明治六年で、初期の校名は養蒙学校といい、これは官立（村立）の尋常小学校であるが、現在のように義務制ではなく（明治一二年より義務化が始まる）、生徒は授業料を納める必要があり、修業年限、教育内容等の詳細は今は明らかでない。

金毘羅神社（昭和初年）
（この金毘羅神社をこわして学校を建てた）

養蒙学校時代の教師は、士族出身の山崎就正という人で、生徒数は六一名であった。明治一〇年頃[注7]の生徒数は、男三三、女二〇、計五三名であって、当時は、およそ生徒数五、六〇名の学校であったが、明治一二年美和学校となり、神子柴部落の生徒が通うようになってからは一二〇名前後の規模の学校になっている。明治一二年からは修業年限四年のうち最低一六か月が義務化され、部落にとっては最も重要な場所になったものと思われる。しかし、その運[注8]

営のためには多額の費用を必要とし、生徒の負担する授業料の外、戸数割、地価割、部落の動産に対する賦課等の形をとって集めており、部落の人々にとってかなりの負担ではなかったかと想像される。

設立後の変遷は次のようである。

明治六年　養蒙学校（開校）→ 明治八年　田畑学校と改名（知致学校一部吸収）→ 明治一二年　美和学校となる

明治一九年　南箕輪小学校田畑分校となる → 明治三四年　南箕輪尋常高等小学校に併合

このようにして、設立以来多くの変遷があり、明治一九年からは南箕輪小学校の田畑分校としてではあるが、明治三三年まで二七年間田畑金刀原の地に学校があり、多くの人たちがこの学校で学んだのである。

なお、田畑学校の建築には、二つの堂を壊した材が利用され、学校廃校に当ってはその校舎が、南箕輪村役場に移されて利用されたといわれている。

注6　上伊那郡誌資料十四（上伊那学校沿革要覧）（昭和三十四年刊）このうち第二官立学校設立伺

注7　長野県町村誌（明治一一年刊）

注8　美和学校元資帳（明治一二年）（増美屋文書）

明治一二年美和学校元資出途方法

一　学齢　六十五人　田畑耕地
　　五十三人　神子柴耕地
　　合計　百十八人

此学資三百三十六円　百人三百円
　　十八人三十六円
　　戸数百二十六戸　一戸ニツキ
　　内訳。金三十三円六十銭　廿六銭七厘

此訳　十九円四十五銭一厘　田畑七十三戸
　　十四円十五銭一厘　神子柴五十三戸
　　。金三十円六十銭　学齢百十八人　一人ニツキ
　　三十八銭七厘

此訳　十八円五十二銭　田畑六十五人
　　十五円十一銭五厘　神子柴五十三人
　　。金弐百四十一円九十三銭
　　地価三〇九千八百十七円七十六銭
　　金割百円ニツキ八十一銭一厘一毛

此訳　百四十一円廿七銭五厘　田畑
　　百円六十九銭六厘　神子柴
　　。金弐十六円八十八銭　動産

此訳　十六円八十八銭　田畑
　　十円　神子柴

（以下略）

五　古蹟

一　清水城址

国道一五三号線から大泉川右岸を約四〇〇メートルほど西にさかのぼったところに、清水（権現とも云う）という字名のところがある。ここに、中世ころから清水某という人が地侍として居城を構えていたものと考えられている。中世末天文（一五三二～一五五四）のころは、倉田氏、高木氏、日戸氏等と共に箕輪福与城城主の藤沢氏の旗下となっていた。しかし武田氏の伊那侵入により、藤沢氏に従いこれと戦ったが、天文一五年（一五四六）武田氏に敗れたので、その後は農民に戻って南殿に移り住んだといわれている。[注9]

現在権現といわれる地名は残っているが、城址らしい証拠となるものは何も残っていない。したがって、城址がどこであるかを確定することは困難である。ただ、権現といわれる地籍に大泉川が形成した数メートルの河岸段丘があり、東北に面して段丘崖を持っている。また、南側にもかれた小沢があり、中世の小豪族が居城を構えるのに格好な場所がある。また、段丘の下は、現在わさびが栽培されているが、多くの湧水があり「清水」というにふさわしい場所である。

古老の話によると、今はくずれてよくわからないが、がけの一か所に古い横井戸の跡があったという。

なお、この地籍の字名が権現といわれるようになった由来が究明できれば、昔の姿を浮彫りにすることができるものと思われる。

注9　「本村田畑耕地の酉の方四町許にあり字して清水（又権現という）藩墻古壁今に遺存す
古清水某之に住し、木曽氏に属す。天文年中武田氏と戦い、後民籍に帰し本村南殿へ移転し戸を並べ……
以下略（長野県町村誌）

二　日戸氏館跡

いつのころから日戸氏が田畑に居住するようになったかは、資料不足で今明らかにすることはできない。しかし、天文年中（一五三二～一五五四）地侍としてこの地に居を構えており、箕輪福与城城主藤沢頼親の旗下として活動し、武田氏の伊那侵入に際しては、倉田氏、清水氏、高木氏等と共に藤沢氏に従って戦ったが、戦に敗れ農民に戻ってこの地で生活をしたといわれている。

館跡は、半沢の分流が田畑の東村地籍に流れているが、

その分流が国道を横切るあたりの南側一帯を考えられている。物的証拠になるものは今は何も残っていない。しかし、古老の話によると、館の一角に昔は尼寺があったといい、その名残りと考えられる「阿弥陀仏」と刻んだ塔が残っており、いまでも日戸姓を名のる一家によってそれが祭られている。また「内城」という家名も日戸館跡と関連がありそうに考えられる。

注10 「日戸氏館跡……本村田畑耕地にあり、古より日戸氏居住し、累世箕輪氏に属し、天文年間同氏武田氏の為に滅亡して後民籍に帰す……」（長野県町村誌）

注11 「箕輪氏附属の地士に清水、日戸、高木氏等この地に点在し居るといえども主家と共に滅亡し民間に下り……」（南信伊那史料）

注12 「日戸館……南箕輪村田畑……箕輪氏の家臣のち武田氏により没落」（探訪日本の城第四巻）

三　富士塚（浅間塚）

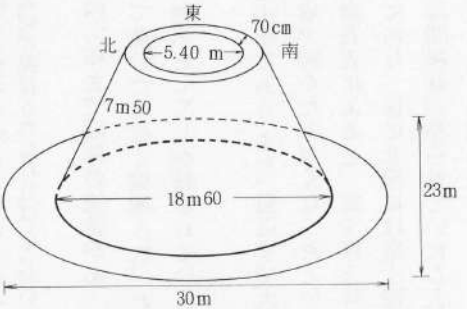
西天竜幹線と中央自動車道との中間、営林署南箕輪苗圃の南約五〇メートルの地点にある。

高さ三、四四メートルの円すい形の塚である。塚の裾（すそ）は東西一九、六〇メートル南北一八、六〇メートル、さらにこの塚をめぐって高さ〇、三メートルぐらいの土手が築かれている。東と北側は開墾されて跡かたはないが南と西ははっきりと残り、そこにずっとうつぎが植えられている。塚の裾から土手までの距離は狭いところで三、五メートル広いところで四メートルぐらいである。塚の頂上は深さ〇、七メートルくらいの丸い穴になっていて、穴のまわりは〇、七メートル幅で人があけるようになっている。（次図参照）頂上穴の東西は六、二メートル南北は五、四メートルである。この塚の敷地は東西約二三メートル南北約三〇メートルと推定される。

この塚が築かれたのはいつ誰によったのか、文献も伝えもまだ見つからないのでわからない。現在は頂上の穴の部分を除いて塚全体に二、三〇年生の雑木が立っているが、古株の残っているところから察すると、だいぶ古い時代に築かれたものと思われる。

東西裾	19m60	頂上穴	
南北〃	18m60	南北内径	5 m40
高さ	3 m44	東西	6 m20
境内地		深さ	70cm
東西	23m	縁巾	70cm
南北	30m		
縁高さ	30cm		

（うつぎ植樹）



富士塚見取図

富士山信仰は木花咲夜毘売命を祭神としてわが国には古くからあった。それが山嶽信仰や修験道と融合して、信仰のうえからの登山が盛んになったのは江戸時代の後半になってからである。江戸時代の初期長崎の人長谷川角行（一五四一～一六四六）は富士講の開祖となり富士山の神は、日月星の本体である仙元（せんげん）大菩薩（浅間様）であるとした。この講は江戸を中心として、商人、職人、農民の間に発展して江戸で八百八講もできたといわれる。浅間様を信仰して、呪術や祈祷を行い、日常の道徳も説いたもので、また、庚申信仰とも習合し、次第に地方にも浸透していった。

元禄以後は日増しに盛大になり、講社又は団体を結んで登山するものが多くなった。先達は富士行者と称して、修験者のように白衣を着、鈴を振り、呪文を唱えながら登山し、講中一切の世話をした。先達は平素は講中を巡回して、教を説き、孝行、尊王等をすすめ、加持祈祷を行い一身上の進退や縁談の相談や指導などもした。

富士山信仰は登山によってその秀麗の気をうけ、浅間神社に祈請するものであるが、登山が盛になるにつれ、山霊をまつった浅間神社の信仰が高調せられ、各地に浅間神社が建てられるようになり、さらには地方にあって日夕の参拝、祈願を徹底させようとすることから、模造の富士を築いて、登山崇敬の気分を味うようになった。こういうことで築かれたのが富士塚である。浅間神社を勧請しているところから浅間塚ともいわれる。

この祭りには身を浄め、白装束に後鉢巻姿で鈴を振りながら実際に富士山に登るように振るまった。登って「南無浅間大菩薩」と唱えながら、いわゆるお鉢回りをしたようである。なお大祭は

庚申の年に行われ、そのときお鉢ざらえをしたようである。これら由緒についてはなお研究しなければならない。富士講は富士教となり、更に神道扶桑教・実行教・丸山教と分派し、それぞれ教義を立て活動していたが、幕府は尊王呪術中心の教義に疑問を抱き、富士講を全面的に禁止した。しかし、明治維新後扶桑教・丸山教・富士教として復活している。民衆に深い影響を与えたことでもあり、当村の平田学とも関連が無いとはいえないとも考えられるので、尊い遺跡として大切に保存されなければならない。

なお北殿にも最近、昭和四〇年まで同様の遺跡があったが、住宅団地の造成に際して跡かたもなく破壊され、わずかに浅間塚団地と呼ばれる地名としてしか残されていないことは残念である。

近くの西箕輪羽広の御射山平にあり、また、最近まで大萱にもあったが、ゴルフ場造成で跡かたもなくなったという。

さて、昭和一七年の地字調査表によると、富士塚と称する地が、久保、北殿、田畑にあり、殊に北殿には富士塚浅間の地名があるところから浅間神社が祭られていたことも推察され、富士講が盛んだったことが思われる。

富　士　塚

㈣　弁天ケ崎

田畑の東村地籍から国鉄飯田線田畑駅へ下る道、天竜川が形成した段丘崖を下り始めるところの南側に、一段低い段丘の出崎がある。この出崎が弁天ケ崎である。

この出崎の平な部分は大部分が水田や畑になっているが南の方の一角に面積一〇平方メートルくらいの小高い丘がある。この丘は社の跡地であって、昭和二三年に田畑神社の合祀に際し、その境内社として移すまで弁財天を祀る小さな社があった。また、社木として大きな木があったという。

弁天ケ崎遠望

ここに弁財天がいつごろから祭られるようになったのかを明らかにすることはできないが、天明四年（一七八四）[注12]の田畑村明細帳に氏神として弁財天の記載があり、更に古く宝暦一二年（一七六二）[注13]の古文書に弁財天の社木のことが書いてあり、天和四年（一六八四）[注14]の古絵図に記載があることから天和以前であることは確かである。そして、弁財天はもと河川を神格化したものであるところから、天竜川を目の前に望むこの地に祭られたものと考えられる。

長野県町村誌[注15]には弁天ケ崎を単に景勝の地としてのみしか書いてないが、ここは七福神の一つとして広く民衆から信仰された弁財天を祀る場所であった。また、弁財天が吉祥天と次第に混同されて福徳を与える神として親しまれるようになり、今も北割地籍から弁天ケ崎へ通ずる小道が弁天道として残っているように、村人にとっては信仰生活上の大切な場所であったのではないかと思われる。

昔の人は弁天様の大きな社木を田畑耕地の境界を見出す基準にした。天竜川が氾らんするたびに他の村との境界がわからなくなるので、社木からの方向と距離を予め定めておいて、氾らんのあった後はそれを基準として測量をし、村の境を誤りなく定めたという。今でも社木からの方向を

示すための矢印を刻んだ石がある。

注12 右古文書の中に「御除地」として次のように書いてある。

一　小宮六ケ所　前宮大明神
　　神明宮
　　弁在天　当村氏神ニ御座候
　　御鍬大神宮（天明四年田畑村明細）
　　山神二社　書上帳（門屋文書）

注13 為取替申一札之事（門屋文書）

一　田畑村分弁在天之社木より東神子柴村上牧村上之定杭より田畑野底両村定杭迄間数、三百四拾間目也

一　田畑村分地付けは下西海子木よ里東右定杭迄弐百八間目也

右者御絵図御裏者ニ有之候得共猶又此度両村立会間数相改候処相違無御座候以上

宝暦十二壬午年三月　野底村役人　源次郎　印
　　同断　孫蔵　印
　　同断　庄蔵　印
田畑村御役人中

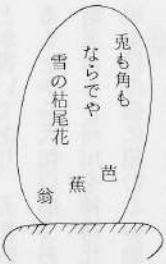
注14 天和四甲子年田畑神子柴秣場境界論争関係絵図（門屋文書）

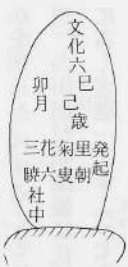
注15 「本村田畑耕地卯の方三町許にある出崎にして東長沙を望み、遠く高遠城址、或は六道の郊原を併せ望み、絶崖尽くるところの沢岡、伊那部の村落あり。南は遥に三遠の天遠く、目下に竜川激湍を帯び

春花秋月峯の白雪麓の紅葉なべて絶景の勝表なり」（長野県町村誌）

六　碑

(一)　芭蕉塚（尾花塚）





旧三州街道が田畑南割地籍で大きく東に回るように、公民館の前を通って北割地籍に入っていくが、その北割への入口附近の路傍東側に、高さ六三センチメートルの倒卵形の句碑が立っている。これが芭蕉塚である。

かっては丘塚があり、そこに碑が建てられていたようであるが、現在は民家の庭石に囲まれた二メートル四方くらいの空地の中央にひっそり立っている。句碑の両側には新しくまさきが一本ずつ植えられてあり、そばに石仏が二体

並んでいる。

この句碑には、図のように芭蕉の句と発起人等が彫られてあって、文化四年（一八〇七）加舎白雄門下の俳人中村伯先の命によって、その門人である里朝、匊叟（そう）らによって芭蕉翁をしのんで建てられたものである。[注16] 同時に建てられた四塚（他の三塚は、山寺の秋風塚、鳥居峠の雲雀塚、木下の蟹清水の塚）の一つであるといわれる。

伯先は伊那に蕉風を導入した人であって、その生涯の大部分を伊那市山寺の坎水園（かん）に居て活動したが、三二才のときから三六才の正月まで、約四年間田畑に生活していたために、多くの門人が田畑に生まれたと考えられる。句碑に発起人として名を連ねている里朝[注17]（一八〇七年田畑に没す）、匊叟（俗名松沢弥兵衛一八一九年田畑に没す）、花六（俗名加藤伝左ヱ門一八一八年田畑に没す）、三暁（俗名松沢左忠治一七九七年田畑に没す）は共に同時代の田畑の俳人として活動していたものと考えられ、この地に句碑が建てられたものであろう。しかし碑の側面の年号は文化六（一八〇九）巳己歳とあって、伯先の命により二年後に建てられている。

碑に刻まれた句は、

兎も角もならでや雪の枯尾花

という句で、同時に建てられた四塚が、それぞれ春夏秋冬の句をわけて彫ってあるといわれるが、この句は冬を詠んだ句である。これは[注18]元禄四年（一六九二）一一月芭蕉が江戸へ帰ったときの感懐で、折しも訪れて来た旧友、門人へのあいさつの意が出ている。雪の中に秋を過ぎた枯尾花が、雨風に折れもせずまだ残っている。自分も長い旅を経て、多病の身がどうにかここにたどり着いていることよ、という意味である。

なお、長野県町村誌には『これを見れば翁もまた、わが本国穂屋の薄の古事を慕ふの意明らかなり』と記している。

注16 上伊那誌歴史編

注17 墓　碑

(1) 松沢かまや家墓碑　清光院旭山里朝居士
行政五十一才卒　文化四丁卯臘月十四日

(2) 松沢井桁家墓碑　匊叟鑒水信士
文政二年巳卯冬十一月十三日俗弥松沢弥兵衛

(3) 加藤家墓碑　花六孤月居士
俗名　加藤伝左衛門　文政元戊寅元
行年六十六才

(4) 松沢糸家墓碑　日生山三暁信士
寛政九丁巳年　七月廿九日

注18 芭蕉講座俳句　（三省堂刊）

(二) 辞世歌碑

1 松沢里朝辞世

松沢かま屋墓地内に松沢里朝の墓碑があり、その右側面に、次の辞世の歌とその年月が刻まれている。

世をされば浮世に残る雲もなし
　みらいは同じ蓮の下露

文化四丁卯　月十四日　里朝
行年五十一才卒

2 松沢匂叟辞世

松沢井桁屋墓地内に松沢匂叟の墓碑があり、その左側面に辞世の句とその年月が刻まれている。

辞　世
尊とさや死出の首途のたいらくも
　六権庵匂叟

文政二年巳卯冬十一月十三日
俗称　松沢弥兵衛

3 松沢善右衛門辞世

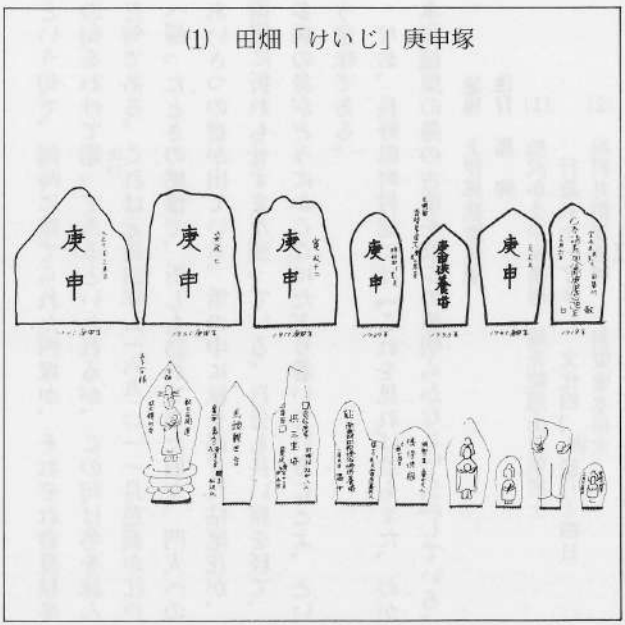
松沢糸家墓地内に松沢善右衛門の墓碑があり、その右側面に同氏の辞世の句と年月等が刻まれている。

淡雪や導るゝもたゞ六字

行年六十八齢卒　俗名　松沢善右衛門
文化七庚午正月九日

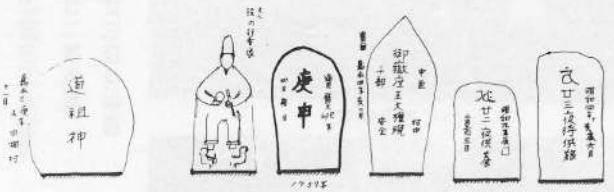
(三) 庚申塚

田畑部落西北の字けいじの庚申塚、旧伊那街道旧道橋の南約五〇メートルの所にある庚申塚、公民館東の庚申塚と、三か所に分かれて建てられている。

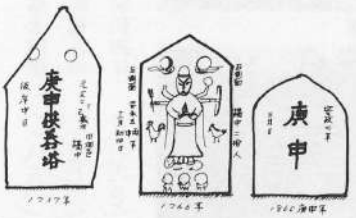


(1) 田畑「けいじ」庚申塚

(2)　田畑「公民館東」庚申塚



(3)　田畑「旧道橋南」庚申塚



(1)　けいじの庚申塚

一　奉請青面金剛庚申信心色主　宝永五年　（一七〇八）
一　庚　申　元文五年　（一七四〇）
一　庚申供養塔　享保十八年（一七三三）
一　庚　申　寛政十二年（一八〇〇）
一　庚　申　安政七年　（一八六〇）
一　庚　申　大正九年　（一九二〇）

庚申塔以外の石碑石仏

一　子安観音像　年号不明
一　馬頭観世音　嘉永三年　（一八五三）
一　供三宝塔　寛延二年　（一七四九）
一　南無阿弥陀仏念仏供養塔　□保十二年（　　）
一　摂待供養　明和二年　（一七六五）
一　他に石仏四基

(2)　旧道橋南庚申塚

一　庚申供養塔　元文二年　（一七三七）
一　青面金剛像　安永五年　（一七六六）
日月　三猿　二鶏の揃った立派なものである。
一　庚　申　安政七年　（一八六〇）

(3) 公民館東庚申塚

一 庚　申　　宝暦九年　（一七五九）

庚申塔以外の石碑石仏

一 役(えん)の行者像

一 御嶽座王大権現　　嘉永四年　（一八五一）

一 廿二夜供養　　明和九年　（一七七二）

一 廿三夜待供養　　明和四年　（一七六七）

けいじの庚申塚

旧道橋南庚申塚

公民館東庚申塚

(四) 道祖神

(1) 公民館の東、路傍の石碑群の中にある。

道祖神

碑陰　嘉永三庚卯年（一八五〇）十一月　田畑村

(2) 国道の信号機の西約三〇メートルのところにある。

道祖神

碑陰　安政二乙卯歳（一八五五）二月　田畑村中

(五) 水神

(1) 田畑の西北　字新田の西の山中にある。

水神

碑陰　連屋敬書　明治十三年十月　社中

(2) 田畑の川原　明神橋の北約三百メートルの所にある。

水神

碑陰　大正十五年四月二十四日

(3) 半沢の田畑上水道水源地の所にある。前は新田横井戸組合によって泉屋前に建てられていたものを、新たに田畑上水道の水神として移し祀ったものである。

水神

碑陰　昭和二十六年四月二十日竣工　田畑上水道組合

七　井・堰

一　半沢井

半沢井は、初沢口より出る湧水を飲用水、水田用水、家事用水に利用するために設けられた水路である。

主要水路は、天和四年[注20]（一六八四）の図面をみると現在とほぼ変らないが、人家がふえるに従って整備されてきている。延享三年[注21]（一七四六…戸数六五軒）の図面によると、三カ所からの湧水を集めている。

古老の話によると、「明治の末ころの水利権[注22]は神子柴七分、田畑三分であった。初沢口のところに神子柴、田畑の番小屋が設けられて水確保に留意しておった。水量は少なく、この水を使っての稲作はごくわずかであった。従って、当時は主として飲み水に使用されていた。水路は細くて現在より短かく、下の方は自然のくぼみを流れていたところもあった。昼間は洗いものなどに使用されるので、夜おそくに次の日に使う水をかめに汲みためておいた。」ということである。

昭和四年、西天竜用水が来るようになったら、半沢の水量も急激に多くなり、開田も増してきた。しかし、水は汚れ、飲み水に適さなくなってきたので、各戸では井戸を掘り飲み水を確保するようになってきた。昭和二六年に田畑簡易水道ができると、井の水は飲み水には全く利用されなくなった。

水路は昭和の初め石垣積みが改修され、近年になってコンクリートに改修された。

半沢井は、古来より田畑の大多数の家が利用する田畑にとって極めて大切な水路である。現在でも、この水を汚さないように区長はお互いに気をつけ合っている。

注20　天和四年三月廿日と記された門屋古地図による。

注21　延享三年八月一五日と記された門屋古地図による。

注22　「水を導き三派となし、二は神子柴耕地田畝の用に備ふ。一を田畑耕地に導きて飲料に供し、且田の養水とす。余流共に東に流れ天竜川に入る」とある。

（長野県町村誌）

(二) 伊賀島井

伊賀島井は、土地改良をしたためにかつての面影はないが、大泉川末端あたりにあった、天竜川から水田用水として水を引いた井である。

この井がいつごろ造られたものか、現在のところでは判明しない。[注23]長野県町村誌には、この井の水の取り入れ口が南殿耕地の東端にあったと記されてあり、[注24]天明四年（一七八四）の村明細帳に、天竜井、黒川両井は大泉川の下をくぐって水を引いたような記述がある。この二つの記述を考えるとき、天竜井、黒川井のどちらかと伊賀島井と関係があったのではないかという気がする。この関係が究明できればと思われる。

伊賀島という名は土地の地名からとったもので、この井によって約二ヘクタールの水田の水をまかなっていたといわれる。

注23　長野県町村誌（明治一一年刊）

注24　一　天流井黒川両井大泉川を伏越引来り申候、此両井者前々ゟ御普請所御座候。外ニ初沢、大泉川両井用水引取申候（天明四年田畑村明細書上帳）（門屋文書）

八　街道

(一) 水準点と馬頭観音碑

国道一五三号線田畑の信号機のある所の西側、大きな馬頭観世音、摩利支天、蚕霊神塚のわきに水準点がある。

西に向かった面に五三四六号、東に水準点の文字が刻まれた花崗岩の水準標石が埋設されている。この水準点は標高六七六、三六メートルで、前は国道の東側にあったが、道路工事のため現在の位置に移され、そのときに本来の形が変えられたものと思われる。本来の形と水準点のことについては、北殿の水準点のところに詳しく述べてあるから参照されたい。

水準点と馬頭観音碑

(二) 「右ぜ……」の道しるべ

水準点のあるところから西へ三〇メートルくらいのところに昔の道しるべがある。残念なことに下の大部分が欠けていてわずかに「右ぜ…」「左…」の文字が読めるだけである。

古老の話によると、この道しるべは前には今の場所より四〇メートルほど北の辻の所（もと地蔵堂があったところの辻）に立っていたが、いつのころか現在の所に移され、数年前の道路工事の際に現在のようにコンクリートで固められたとのことである。

もとは一メートル余の角柱で、「右ぜんこうじ道」「左やま道」と彫られてあり、筆跡、字の彫り方が北殿にある天保三(一八三二)年の道しるべと酷似しているから、同一人による同時代のものではないかと推定される。

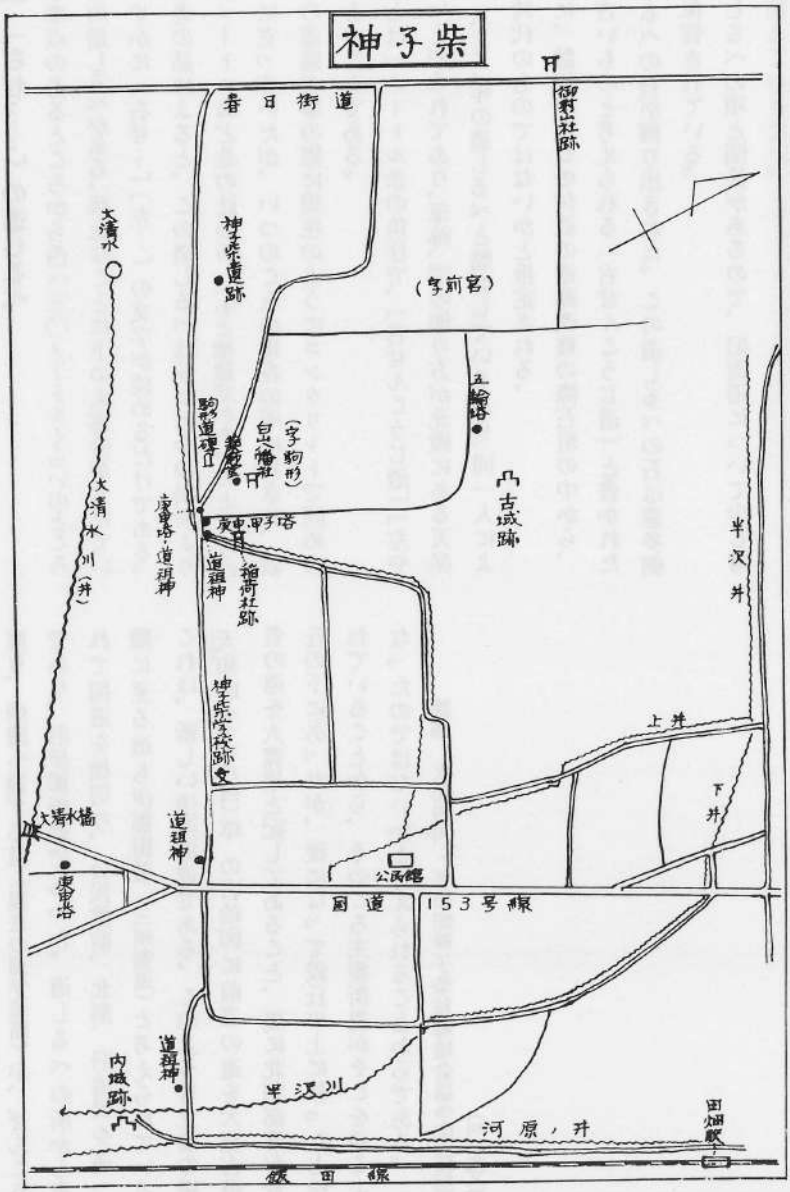
更に、数年前にこの付近の道路改修の際石垣の中から、より古いものと考えられる「右ぜんこうじ道」と書かれた道しるべの石が掘り出された。この道しるべの石は喜多側家に保管されている。

道しるべの項と関係があるので、旧街道について少し考察を加えておきたい。

この道しるべを通って田畑けいじの庚申塚から大泉川を渡り、南殿へ通ずる道（現在の通学道路）が、ぜんこうじ道であり、旧伊那街道であった。道しるべの所から東に折れて国道を横切り、公民館前、北割、旧道橋を通って南殿に至る道も伊那街道（三州街道）と考えられているが、これは、新しい伊那街道である。このような立論の根拠は天和四（一六八四）年[注25]の古絵図に前者の道を大寛古道、後者の道を大寛道と記してあること、更に北割部落が昔は段丘の下にあったが、後になって段丘の上に移ったと伝えられていることから、そのころ主要街道がそこを通るようになったのではないかと考えられることからである。

注25 天和四甲子年田畑神子柴秣場境会論争関係絵図（門屋文書）

第七　神子柴


神子柴
春日街道
御射社跡
(宮前)
神子柴遺跡
大清水
五輪塔
駒形道祖
(子駒形)
白山神社
古城跡
庚申塔
庚申塔・道祖神
道祖神
稲荷社跡
半沢井
大清水川(井)
神子柴学校跡
上井
下井
大清水橋
道祖神
公民館
庚申塔
国道153号線
道祖神
内城跡
半沢川
河原ノ井
田畑駅
飯田線

一　神子柴の由来

その昔「御腰場」と「御園」とは一村であったが、いつのころ分村したかは明らかでない。中古になって「御輿場」と書くようになり、後に「御子柴」とあらため、更に延宝六（一六七八）年に「神子柴」とあらためられた。

区名の由来ははっきりしないが、南箕輪村から西箕輪へかけての一帯は、建御名方命の御狩の古跡であったらしい。命が御腰をかけられた行宮（かりのみや）の地なので「御腰場」と名づけ、御射山大祭が行なわれるようになってその御輿を出した村なので「御輿場」といわれるようになったという。いつしか「御子柴」と書かれるようになっていたが、命との関係がものたりなかったのか、「神子柴」とはっきりあらためられて今日に及んでいる。現在もなお、一〇年に一回上社の祭に諏訪中州の福島区へ招かれる事実からも、神子柴の名は諏訪明神と関係が深いと思われる。

注1　神子柴

「古ヱ御腰場御園ト一村タリ分村年暦不詳。中古御輿場ト云フ。後御子柴ト改メ延宝六年神子柴ト改ム」（長野県町村誌）　「御腰場　今神子柴ト改ム。即命行宮ヲナセシ地ナリ」（長野県村町誌）

二　神　社

(一)　神子柴神社

神子柴部落の西段丘中腹、字駒形にある。白山社、八幡社の合社である。

祭神　伊弉諾尊・誉田別尊

由緒

創立年月不詳、由緒もまたはっきりしたことがわからない。伝えによると平安時代の初め大同年中（九世紀初頭）に奉祀され、当時盛大な祭典が行なわれたといわれる。

神　馬

社宝に木製の駒があるがそれに「天文五（一五三六）年丙申正月献ず」とあるところより推して古くからの社であったことがうかがわれる。寛文十一（一六七一）年再建、天保十三（一八四二）年また再建、明治五年村社になっている。

なお社内には次の二社が併祀されている。

高丘社

祭神　高津神（明治九年の町村誌にはこの祭神は天狭霧命とある）

この社の創立年月日は不詳。明治四一年一月、半ノ木原より遷座された。

稲荷社

祭神　倉稲魂命、猿田彦命、大宮女命

この社も創立年月未詳。安政年間（一八五四～一八五九）再建、明治四一年一月字駒形より遷座された。

社殿

鳥居は控柱を持つ両部形式のものである。

拝殿は三間三戸の入母屋造りで、大正七年改築したものである。

神子柴神社（昭和初年）

神子柴神社

本殿は一間社流れ造りで正面には唐破風がついている。虹梁の頭貫には獅子と象の木鼻がついている。えび虹梁はみごとな龍の彫刻が施され壮重なものである。また本殿のギボシ勾欄をめぐらした縁のはてには脇障子があり、右は雲上の宝剣に乗る仙人、左は雲上の鳥に乗る仙人が彫刻された優美なものである。

本殿内中央には「天文五（一五三六）年丙申五月十一日」と墨書された神馬が奉祀されており、右は金刀比羅社等五社左は天狗社等三社が奉祀され、その棟札[注2]が一部残っている。

覆屋の棟木には「奉上棟天郷中主神宮営永久吉祥大正元年十二月十五日吉祥」と書かれている。

注2　合祀された社の棟札

壱切日皆善一切宿皆賢諸神皆威徳
奉新殿造立大天狗宮社内繁栄如意飫
羅護皆行満以斯誠実言願我成吉祥

裏面には「維時明和三丙戌初穐吉曜□信州伊那郡手良郷中坪村大工酒井九右衛門尉重英」とある。

もう一つの表には

「奉謹請大天宮御社　神主伊藤加賀守源光雄□」
裏には「干時文久二壬戌年後一月十五日　名主勘兵衛」
両札とも天狗社合祀の際移されたものであろう。この天狗社はもと半ノ木原天狗林にあったものを明治四一年に移し、高丘社となったのである。

(二)　御射山社

御射山社

春日街道沿いの字前原、広域選果場の南にある。

御射山社

御射山社　碑陰

碑面

御射山社　華表之礎　在レ焉ニ　原大同四己　丑之歳　坂上田村丸願勅征而建ツ本社ヲ後経ニ四百五十一年ヲ文応五年庚申年再造スギ過ニ三百二十六年一天正十三年乙酉十一月　地大ニ震動シテ而遂ニ破壊スル也　爾来物換リ星移リ今茲ニ丁亥巳ニ度リテ二百四十三年一而造営不ニ亦復成一矣　家々空ク嘆スル而已ニ旧貫既已湮没スル況ヤ後年基礎亦可レ知乎　因リテ為記シテ其旧一立テ碑云フ爾
干時文政十年歳在丁亥秋七月　神子柴村中

この神子柴の御射山社址前が、昭和五三年国体の聖火の出発点となった。南箕輪から選ぶとすれば、これ以上の出発地はない。しかし、この社址については、古い由緒をもち、またとほうもなく大きなものであったらしいが、詳しいことははっきりしていない。今後の発掘等の研究にまたなければならない。[注4]

御射山社祭典（昭和52年）

明治九年の村誌によると、この社址は当時東西が三六〇メートル、南北が三二四メートルもある広い原野で、前原といわれていた。建御名方命・八坂刀売命の二神を、大同四（八〇九）年に坂上田村丸が勅を奉じてまつられ、後しばしば奉幣があり、穂屋の大祭をおこなったようである。七月二七日には神子柴からだした御輿を、御射山平に移して、大祭を行った。

またこの社に別当寺として仲山寺（一説に藤宝寺が普光寺となり、仲山寺となると）があり、一二坊もあったのからみても、かなりの大社であったらしい。この大社もたまたま兵火にかかり、羽広[注5]に移ったがまた兵火にかかり、ようやく

建てかえたら天正一三（一五八五）年大地震にあい、すっかりつぶれてしまって、再び建てられなかった。まことに惜しいことで昔の姿はすっかり見られなくなってしまった。

ただ、前宮の跡には鳥居の跡がのこり、字として御射山平、鳥居原、前宮原等の原野名が残り、神輿が休んだという三本木原には老松が三本高くそびえて残っていた。北殿の里宮も、田畑の前宮も、この御射山社の名残りをとどめているという。[注6]

今、写真に見るように大きな落葉松の木の下に穂屋がかかり碑が立っている。ここで今も神子柴区では毎年八月二六日に神事をおこなっている。田畑、神子柴、御園、山寺の区長が一〇年に一度諏訪大社へ招かれて御頭祭に参加しているのも、深い関係があるように思える。

御射山社については、不明なところが多く、上伊那誌等では与地から羽広へ移ったように書かれてもいるが、南箕輪の歴史を語る重要な神社として、研究を深めなければならない。

注3

諏訪御射山に明神の遺禮にして年々大禮行はる我伊那郡にても三日町に例式あり私に考るに三日町の例式ははしめ西山にありと今その地を御射山平という御子柴は御輿の出し地にて御輿場なるへし御子柴の西に古鳥居の立ちし跡あり礎存せり今その地を鳥居原といふ往古中條上戸の邊は神領にして神官唐澤氏これを掌とる中條は中城なるへし中古にすへて宅地を城といふ唐澤氏の宅地より出し名ならんか上戸は神戸なり上と神と國訓同しけれは神の字転して上となり遂にがうとの訓を字のままにあがつとはなりしなり唐澤氏地を失ひて三日町に移り住むより其神事も廃して僅に三日町に行はるるのみ再考るに木下の神事に大泉村福輿村より隔年に獅子を出し隣村より数多の勢子を出しぬ獅子も古へは野猪頭なりしよしこれも御射山神事の遺れる例なるへしさらは唐澤氏亡ひし時に其祠を西山より木下に移せしならん但し御射山祭は七月廿六日なるを木下の神事は六月に行ふ唐澤氏の亡ひし其年月詳ならす天正十一年木會義昌與地嶺を越て伊那へ打入り伊那衆と與地原にて戦ひし事あり其時に逐はれしならん土俗の伝に往昔中條村に唐澤備前といふ城主ありといふ祠官の祖も備前といふ是同人なり祠官にして神領まてを掌れり諏訪の祝部の諏訪を領し小野の祠官小野氏の小野を領せし類なり今三日町の祠官唐澤氏は御射山より中條上戸までの神事を掌るも其遺例なるへし御射をみさと読むはさは矢の字の訓なりほやは神事のかりいほの名にして宝屋の義なりすすきはあつまり生ひしけりたる草をいふ字書に木曰林草曰薄と見ゆ和名抄に草聚生曰薄是なりされは書紀に荻の字蘆の字とともにすすきと訓せり叢生するものなれはなり今は一草の名とは芒の字を用ゆべし　（蕗原拾葉、ひとつはなし）

注4　御射山社の址

東西二百間、南北百八十間、面積一町二反歩の原野にして、本村の内神子柴耕地の正面にあり、前原と称す。祀るに健御名方命、八坂刀売命の二神なり。大同四年己丑年坂上田村丸勅を奉じて創立し、後　奉幣あり。大山田の神社式内社と称し、穂屋の大祭を執行すと天正年間故あり（神官宮島某たり、）て、土人の為に族滅せられると云ふ（今の御射山平）七月廿七日御射山平に御輿を移す（神子柴より出す）又別当あり。養麻山普光寺と称し、十二坊を設く、実に本郡の大社たりしに、偶兵燹に罹り社頭纔に存す（寺坊兵燹の後、西箕輪村羽広耕地に移り、復び兵燹に罹ると云ふ）神宇漸く造営すと雖も亦往日の盛なるが如くならず。天正十三乙酉年大地震に會し、殿宇盡く破壊し、還た成らず、遂に各所に祀る。惜哉旧姿此に湮没す。（本村の内、里宮社、前宮鳥居原社等あり）唯前宮の址跡を残し、所在に鳥居の残礎を存し（方三間あり）字御射山平、鳥居原、前宮原等の原野あり。又字三本木原は老松三樹、塊として喬く、雲表に秀て、周囲数尋（今其形を遺し、址跡を存すのみ）春秋の二祭、此樹下に御輿を休ふ所とすと。其佗流鏑馬所、神戸云、（今西箕輪村に属し上戸と云、神を上に誤るなり）御舞瀬（今伊那村に属す、方言にミマイデと云ふ）あり、カンナギ八乙女を出せし処なりと。（長野県町村誌）

注5　西山の諏訪明神大社

いにしへ箕輪の西山に諏訪明神の大社あり、数多の神領ありて、祠官唐澤備前といふ人これを掌る、其居所の地を中條村といふ、條は城の字なるべし、但し小澤村の古城跡を土人伝へて唐澤氏の居住の由申せば、これに住せしも知るべからず。天正十一年木曽義昌伊那へ打入りし事あり、伊那の諸士與地原に出て防ぎ戦ひしが、利あらずして松嶋氏も戦死せしといふ、思ふに唐澤氏も此時地を失ひて逃去りしならん、唐澤氏三日町に移り住て、明神の社をば木下に移せしならん、今に至るまで、六月廿六日の祭禮に、隣村よりも、獅子の頭を出して祭の禮を行ひ、且三日町に御射山の神事あり、これら皆西山の大社より移りし事ならん、獅子も古は野猪の頭を用ひたりといふ、御子柴の西に当りて鳥居原といふ地あり、鳥居の礎残れり、御子柴は御輿場なるべし、上戸も神戸にて、上を神と同訓にて転じ、また其訓を転じてあがつといふ、これみな神事より出たる名なり、尚深くたづぬべとし。（箕輪記附録下終）

御射山平翁塚

注6

三日町御射山明神

往古在西山、神領之地、祠官唐沢氏管之、中城其所居、後為木曽家逐唐沢氏亡。神祠亦廃、或日小沢村古城唐沢氏所住。或是乎。神子柴村有鳥居（神門也）蹟存曰鳥居原。神子柴即御輿場国訓同也。今三日町村祠官有唐沢氏即其後耳

（伊那志略）

三　薬師堂

神子柴神社の境内にある。神社の南側にある切妻造の小祠があり中には正面唐破風の屋根を持つ小じんまりとはしているが、よく手のこんだ組物による優美な堂である。中に昔天竜川方面に流れついたといわれる薬師如来が安置されている。そのまわりに薬師如来の眷属（けんぞく）十二神将（一体は台だけ）が配置されている。これらの像は頭にそれぞれ十二支を頂いて力動感があり、しかも温雅優美である。台の裏に、「文化拾三子九月吉日木曽宮越住加藤喜置作之」と印されている。

旧薬師堂
（昭和初年）

薬師堂

薬師如来

十二神将

四　神子柴学校

明治五年九月五日に筑摩県下で二六番目の学校として、山寺村に開校された第二六小校の学区に神子柴村は加わっている。その後明治六年一月にこの小校は解散し、神子柴村には、第一一二区一〇四番「致知学校」が設立された。これが神子柴村にできた学校のはじまりである。当時男生徒二四人女生徒一二人であった。

明治一〇年には校名も神子柴学校と改称し、支校大萱学校をもつようになった。明治一一年には山園学校へ併合されて神子柴学校は廃校となり、山寺・御園といっしょになったが、明治一五年（又は一二年）には田畑の美和学校へ併合して、明治一九年南箕輪尋常小学校で学ぶようになった。

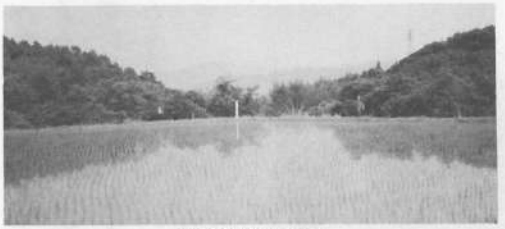
神子柴学校は神子柴耕地中央（現在の北屋の西、三叉路の辺）にあり、山園学校へ合併後は建物は村の集会所として使われ、鉄棒や庭は子どもらの遊び場として残されていた。しかし昭和二七年に建物は牧の唐木氏宅へ移されてしまい道路も開かれて、昔のおもかげは少しもとどめていない。

学校田があって、当時はこの水田からあがる米代が子どもらの奨学資金として使われていた。

五　古跡名勝

㈠　神子柴遺跡

神子柴字大清水七八八八番地、大清水丘の突端にある。昭和二八年ごろこの地の耕作者が遺物を採集したのがきっかけとなり、昭和三三年一一月から一二月にかけて上



神子柴遺跡全景

神子柴遺跡全景（昭和33年）

伊那誌歴史部の人たちによって第一回発掘調査が行なわれた。この発掘で多数の石器や土器が発見された。翌三四年に第二回発掘調査が行なわれ、石器土器片の外、竪穴住居址三箇のあることが確認された。この両度の調査によって、石器には神子柴形石器の名が与えられるほどの珍しいものがあり、ここには先土器期時代、縄文時代、平安時代の遺構、遺物の貴重なものがあることがわかった。

昭和四三年この遺跡地を土地改良工事を施して水田化したいとの地元の希望があったので、第三回緊急発掘調査をすることになり、一一月一四日から二五日にわたって一二日間行なわれた。このとき先土器時代の石核調整の作場と思われる遺構と石器多数、縄文時代の石組遺構一〇址、土器、石器の多数、それに歴史時代の土壙墓と、土器や灰釉陶器や土師器、須恵器が発見され、さらに竪穴住居址が確認された。この遺物はこのあたりに一万二千年ほど前から人が住んだことを物語っている。しかし縄文時代までは直接生活の場ではなく、狩猟場であったが一一世紀後半から一二世紀前半にかけてより大清水丘陵の南側のゆるやかな低地が水田耕作地となり、ここに人々が住みついたものと思われる。

この遺跡は青森県の長者久保遺跡とともに、長者久保御子柴文化として、石槍や片刃石斧をもつ文化の栄えた一時期のあったことが考えられる遺跡である、と考古学上注目されるようになった。

神子柴遺跡出土
（凹石，磨石）

神子柴遺跡出土
（石器・剥片）

(二) 三本木原遺跡

この遺跡は南原遺跡の北、東西にのびる台地にある。三本木原三六七二―一～二番地にある。現在畑地であるが中央道はここを南北に横断している。中央道開通工事のため緊急発掘を行ったところであるが、遺構や遺物は確認されなかった。縄文中期の土器片が発掘されただけであるが、遺跡の中心は中央道用地外西方、あるいは、沢尻部落に面した台地の先端近くにあるものと考えられる。

(三) 曽利目遺跡

南原、三本木原遺跡の北に続く地にある。三本木原八四六〇―八四七八番地にある。ここからは縄文期の土器片と思われるものが一点出土したのみである。

(四) 五輪塔

神子柴の北西の段丘上に古城があり、そのすぐそばの山林の中に五輪の碑石が三塔たっている。里人の言い伝えによると文明年間（一四六九―一四八六）古城に居住していた箕輪氏の墓であるという。[注7]

注7 【箕輪氏の墓】
本村神子柴耕地戌の方、古城百歩外の地にあり。五輪の碑石三塔を建つ、里老伝えて箕輪義建左衛門義俊小太郎義嶺刑部の墳墓とす。（長野県町村誌）

五　輪　塔

五輪塔（昭和初年）

(五) 古城

神子柴耕地の北西の段丘上を高圧線が横切っている。その段上の山林中にある高圧線の鉄塔のあたりを古城といっている。ここに現在三角点があって標高七一一・一メートルとしるされている。

文明年間（室町時代）一五世紀半ばに箕輪義俊[注8]（小太郎）同義嶺（刑部）という木會義仲の末孫という者がここに居

古城址

住していたと伝えられている。城の遺構らしいものは何もないが、この山の下に字城の越（腰）、殿垣外、小太郎という地名が残っているところからも、城かあるいは、内城との関係のある見張所や狼煙台地があったことも考えられる。南北の展望も開け、東は高遠方面まで見通せる好位置である。

注8　【古城】

本村神子柴耕地子の方三町許にあり。文明年間箕輪義俊小太郎と称す同義頴刊部と称す、共に木居住すと云ふ。城の下に字城の越、殿垣外、小太郎等の称呼今に残れり。曾義仲の遠裔なり

（長野県町村誌）

(六) 内城（うちしろ）

半沢の水の末流が神子柴の東端に流れ出して、大清水川附近に出る所の独立した台地を内城[注9]といっている。田畑駅の南六、七百メートルの断崖の上にあって、飯田線のある所より二〇メートルぐらいの高い所である。東西六〇メートル、南北一〇〇メートルのほぼ円形の地で、西は三〇メートル幅の堀、北は掘り崩した道の空掘道である。城地の南端に一メートル位の高さの土塁があり、その南に二本の濠（ほり）があって、半沢川の溝川の堀に続いている。

昔、近藤某が城主であったということだけで、その他のことは何もわかっていない。

ここには上伊那一二騎の一人高木氏がいたという。高木[注10]氏は初めは小笠原氏に従い、次に箕輪氏に属し、後、高遠の保科氏に属して上伊那一二騎の一人と呼ばれたという。

注9　【内城】

本村神子柴耕地寅の方三町許にあり。其他三方に大濠を扣へ、東面に天龍川を帯ぶ。北の方少許にして、町田等の字を存す。往古近藤某住すと云ふ、詳ならず。土を鑿つ者、稀に古城具を得る事あり、又北の方二町余、櫓田と呼ぶ地あり。文政年間此地にて古銭一瓶を得たり。安政三丙辰年三月十日、又一瓶を得其員数百三十貫文余、盡皆往昔の銭なり。

（長野県町村誌）

注10　【高木氏の宅址】

本村神子柴耕地にあり。東西十六間、南北廿間面積三百二十坪、古より高木氏居住す。其先小笠原氏の家臣たり。後故あって箕輪氏に従ひ、天正十年七月又保科氏に属す上伊那十二騎と云同十八年民籍に帰し、子孫今に此地に住す

（長野県町村誌）

六　碑

(一)　庚申塚

1　旧伊那街道が神子柴から御園へはいる大清水橋の手前にある。

一　**庚申**　寛政　三月

一　**庚申**　安政七年

一　**馬頭観音像**　八基

一　**馬頭観音碑**　五基

2　神子柴神社入口にある

一　**庚申**　年代不詳

一　**庚申**　大正九年三月

神社前庚申塚

一　甲子　大正十三年二月

(二)　道祖神

1　神子柴神社の入口にある

一　**道祖神**　年代不詳

2　神子柴神社の入口から少し東へ下った三叉路にある

一　**道祖神**　年代不詳

一　**道祖神**　年代不詳

3　神子柴ポンプ屯所の西にある

一　**道祖神**　嘉辛亥夏四月

鼎齋方寛書□□

4　神子柴の東部「志茂」の入口にある。横倒しのままある

一　**道祖神**　年代不詳

三叉路の道祖神

七　井　堰（せき）

㈠　半沢井

みなもとは初沢前宮原であるが、途中神子柴耕地の北方、半沢から流れ出る沢水を引き入れて神子柴耕地へ引水する井を半沢井と呼ぶ。この井は途中で三筋に分けられて、二筋は神子柴の田用水となり、俗に上井下井と呼ばれている。一筋は田畑の飲用および田用水となって末は天竜川へはいっている。

㈡　川原井

この井は田畑耕地の東の地点で天竜川の水を引き入れ神子柴耕地の川原田の用水とした。余った水は再び天竜川にもどされている。

八　橋

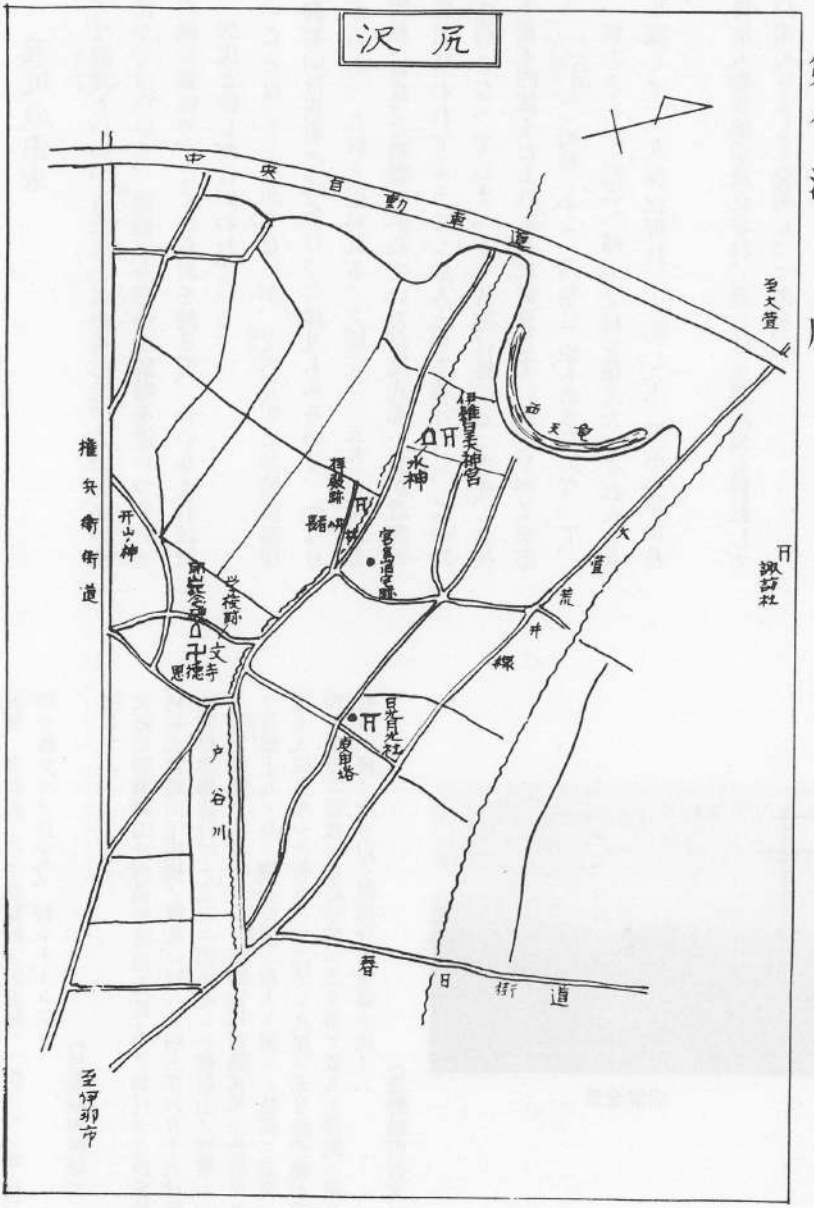
㈠　大清水橋

もと、田畑耕地を過ぎた伊那街道は神子柴耕地を南北に通りぬけて隣村の伊那村御園に通じていたが、神子柴を過ぎて御園に入るときはその境界を流れている大清水川を渡らなければならなかった。ここに渡されていた橋が大清水橋で、長さ二間（三・六メートル）、幅九尺（二・七メートル）の板橋であった。（長野県町村誌）

㈡　神子柴橋

伊那街道の一部が神子柴耕地の中央部で東にわかれて天竜川原に至り、大清水川が天竜川に流れ入る地点より（現在数本の木立ありその下に小祠あり）天竜川を渡って伊那部村に通っていた。ここの渡しに神子柴橋があった。はじめのころはアシの生い茂った中州の間を丸太で渡して牧に至り、高遠に通じた重要な橋のようであったが、後には橋脚をもった土橋となり、長さ三五間（六三メートル）幅六尺（一・八メートル）の長い橋であった。（長野県町村誌）

第八　沢尻


沢尻
中央自動車道
至大笠
諏訪社
大宣荒井線
日貫見社
春日街道
戸谷川
文寺
至伊那市
水神
宮島遺跡
開山神
撞矢衛街道

一　沢尻の由来

古くは沢渡（さわたる）といい中古沢尻と改められた。この区名の由来も定かではないが、建御名方富命[注1]が猛獣を追いつめたきわみの地の意味で、ここから沢を渡る所、いいかえれば沢の尻、沢尻と称したといわれている。

古いことはよくわからないが、文応元年[注2]に神職宮島津盛が御射山社再造の式を行った棟札（むなふだ）もあるので、かなり古くからあった村と思われる。文禄元（一五九二）年になって里長（村長）と神職をかねていた宮島式部一族が近郷の土人におそわれてようやく数人と村を逃げだし、この時より亡村となってしまった。式部は姉のとつぎ先、久保の城主棚木四郎をたよりここに寄食していた。やがて承応年間（一六五二）（明暦二年（一六五六）説もある）になって、再び一族とともに沢尻へ帰って村を構えた。それから久保村に属して、「久保沢尻村」と称して、明治八年に及んだ。

戦後信大農学部が設立され、近くに上農高校も移転して来て以来めざましく発展しつつある。

注1
沢渡　今沢尻ト云フ命猛獣ヲ沢渡極ハミ駆尽セシ地、極ハ即チ尻ナルヲ以テ今、称トナルト云フ
（長野県町村誌）

注2
文応年間御射山社再造栄宮島氏其式ヲ執行セリ西箕輪村羽広耕地山王権現ノ棟札ニ曰（文明五年六月十五日祭主宮島津盛謹行）ト之レニ因テ考レハ御射山ノ神職ニシテ他ヲ兼務スル者ナラン　文禄元年宮嶋式部一族故アリテ近郷土人ノ為ニ襲ハレ僅ニ数人ト遁レテ他邦ニ流寓シ後土人罪ニ坐シテ斬ラルルニ及ンテ久保ニ来リ姉夫棚木四郎ノ旧臣ニ寄食シ承応年間ニ至リ再ヒ族人ト澤尻ニ還リ村落ヲ構フ故ヲ以テ沢尻今ニ久保ニ属ス
（長野県町村誌）

沢尻全景

二　神　社

(一)　日光社月光社

沢尻区の北方、八三〇九番地にある。[注3] 古くは下日光平にあったのを、中古に今の日光平に遷したのだという。

日光社月光社

祭神　天照大御神　月読命

いつごろ創建されたか詳でないが、棟礼によると明和四丁亥（一七六七）年に建立され、「日光大権現社」と称し、神主は伊藤伯耆守、大工は小沢の小林喜右衛門と記されている。同じく明和四年に「月光大権現社」が建立されている。[注5] 古書には「日光権現社」とあり、合殿はいつか不明である。嘉永五（一八五二）年に覆屋が造られている。明治十年には久しく風雨にさらされ祭典も滞っていたのを憂えて、覆屋を村中で葺替えその古い祭典も復活した。

明治四一年に氏子の少ない神社は合祀するよう時の県知事から訓令があり、川島は飯沼沢の諏訪神社に合祀された。しかしそれは帳簿上の合祀であって、実際はそのままで祭典も毎年行なわれていた。昭和二七年五月県知事の認可を得て神社本庁に所属する神社となり、今日に及んでいる。

社殿

覆屋はかやぶき。本殿は一間社流造り、擬宝珠こうらんの縁を廻し、脇障子があり、屋根はコケラ葺で、二重繁垂木である。拝殿は昭和五一年に建立された。

なお本殿内には、祝殿などの十五社が祭られている。列記すると、諏訪社（文政九年村中）、御射山宮（嘉永五年二月二八日村中）、式部明神（明治二年三月一九日村中）、稲荷社（文政九年村中）、寿命天神社、筒男三社、伊知気社、弁財天社、等である。

境内社には右に木造の**秋葉神社**があり、左に石祠の**天満宮**（村中）がある。また石碑の**蚕玉神**（村中）も右にある。

注3

「日光月光社」沢尻ノ卯ノ方ニアリ日読命月読命ヲ祭ル其創ヲ知ラズ其先下日光平ト称ス地ニアリ中古今ノ日光平ト呼ブ所ニ遷祭ス　（長野県町村誌）

注4　棟札

1.「奉建立日光大権現御社」　神主　伊藤伯耆守
　明和四丁亥年　大工小澤小林喜右衛門　沢尻村産子
2.「奉謹請月光大権現社」明和丁亥年　氏子中
3.「奉上棟月光社月光社拝殿」宮司伊藤光麿謹言
　維時昭和五十一年四月十日上棟式斎行（以下略）
4.　神社梁簡
　信濃国伊那郡南箕輪沢尻之里鎮守日光月光社星霜已久雨蝕露敗覆社既廃礼典有欠故今葺脩輝其旧儀焉冀神明重感応郷中艾安部内康楽風雨順序梁穀豊登矣敬白
　明治十年十二月廿六日　惣氏子中

注5

沢尻村　日光権現　（伊那郡神社佛閣記）
日光権現祠　在沢尻、例祭四月朔日、祠官伊藤氏掌之　（伊那史略）

(二) 伊雑皇大神宮

沢尻区の西方丘の上にある。

祭神　天照皇大神と思われるが明らかでない。

伊雑皇大神宮

一説には天照大神のおばに当たる神ともいわれている。

由緒

創建等詳でない。明治四一年区内の小祠[注6]を合祀した際この神宮だけは合祀することができなかった。村人はこの宮を「いぞうこうさま」または「おこわさま」と言って一二月二〇日を祭日として祭祠を怠らない。

注6 棟札

1. 表　奉祀　伊雑皇大神宮
　裏　丁時文政十三庚寅歳三月二七日祭之氏子村中也
2　表　奉上屋葺替伊雑皇大神宮殿社掌源光麿
　裏　明治三十二年一月一日　氏子中

(三) 山の神

沢尻恩徳寺の西方一〇〇メートルにある。

(四) 諏訪社

上農高校の西三〇〇メートルの地にある。

祭神　建御名方命

由緒

西天竜の開田に当って入植した人々が奉祀した神社である。

諏訪社

三　恩徳寺

沢尻区のほぼ中央丘の上にある。

本尊　不動明王

恩徳寺全景

由緒

恩徳寺はもと西春近（現伊那市）表木にあったものを移したものと伝えられている。寺伝によると、この寺は建永二（一二〇七）年真海法印の開創で、春近郷の祈願寺であったものを、寺有の山林田畑等の財産をはじめ、歴代住職の墓にいたる一切のものを明治一七年に移した寺である。現在は沢尻のお不動様として近郷近在の人々から尊崇されているが、以前は薬師如来を本尊とする寺であった。現在庫裏になっているのがもとは本堂であったが、現在の堂宇が建てられ不動明王が本尊とされるまでには次のような経過をたどった。

明治維新まで箕輪領のうち五千石の領主であった太田資智という人の奥方に梅崎という方があった。維新の後不仕合わせが続いていたところ、ある夜梅崎の夢枕に不動明王が現われ、「成田不動明王を迎えまつれ」とのお告げがあった。このことを聞いた沢尻村の人達は梅崎のためにも、世の人々のためにもと成田不動を迎えることを決心し堂を建てることにした。[注7] 近くの村へも呼びかけて協力を願った。明治一七年太田氏の寄進百円をもとに沢尻村の人達の献身的な奉仕と努力によって、二二年漸く完成することができた。

仏像

1本尊不動明王

不動明王は火焔光背を背負い、巻髪の弁髪、ハスの花をつけ憤怒の相をして、せいたか、こんがらの二童子を脇侍としている。千葉県成田山信勝寺の行場に安置されていた不動金兵衛という仏師の作と伝えられているのを明治一七年に迎えてまつられた。

本尊不動明王

2薬師如来

この堂の前の銀杏の木で雲海法師が刻んだといわれる。不動明王を迎えるまで当時の本尊とされていた。現在の大銀杏はこの切株から芽生えて育ち、樹令約三五〇年と推定されるものである。

薬師如来

3行者三体の像

これは沢尻に古くからあった大峯講の人たちが、大和の大峯から迎えたものだろうと伝えられているが、作者も年代も

行者三体

不詳である。

4 二体の不動明王

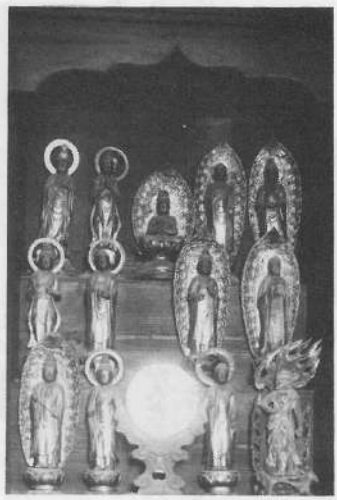
明治三五年西春近上嶋の法性院から一体、もう一体は神子柴の金剛院から法性院に移されていたものをいっしょに迎えたと伝えられているが作者不明である。

不動明王
（金剛院からの）

不動明王
（法性院からの）

5 十三仏[注8]

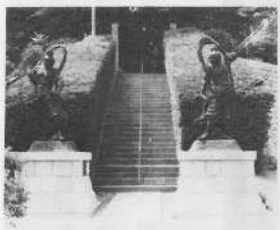
明治二八年西春近恩徳寺から迎えたものであるが作者等不詳である。



十三仏

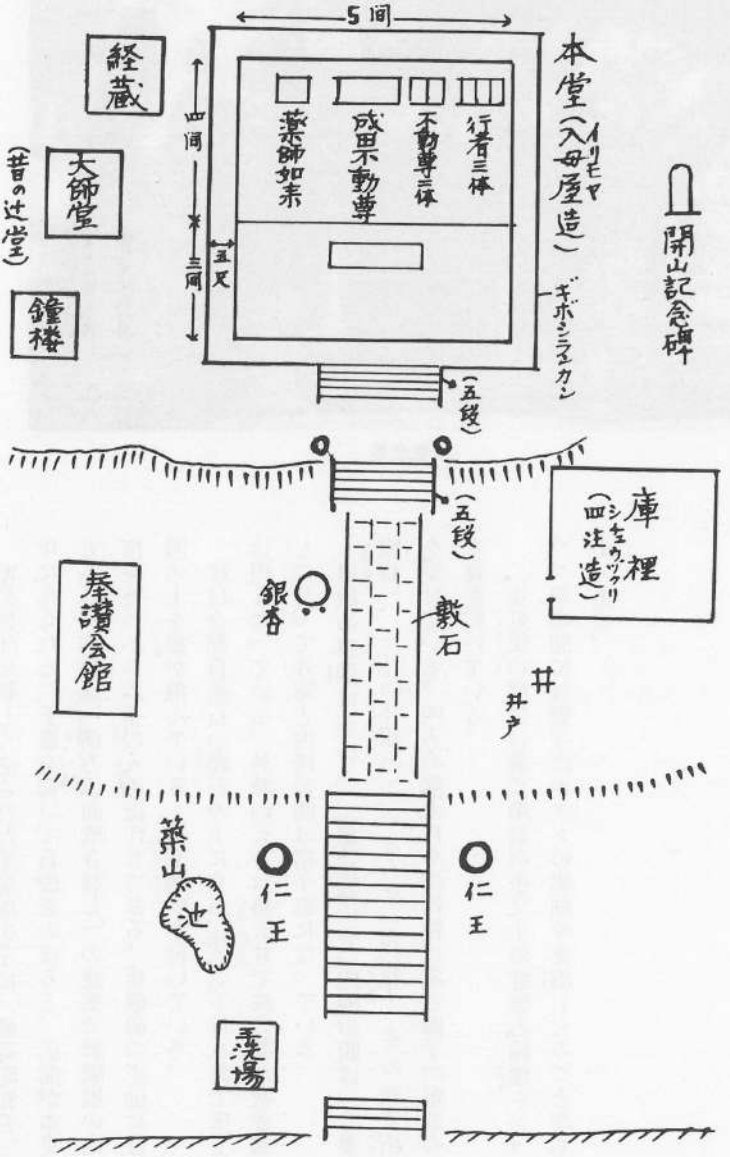
6 仁王像

昭和五三年建立



仁王像

恩徳寺平面図


5間
経蔵
大師堂
(昔の辻堂)
鐘楼
四間
三間
五尺
本堂(入母屋造)
イリモヤ
薬師如来
成果動尊
不動尊三体
行者三体
ギボシヤエカン
開山記念碑
(五段)
(五段)
庫裡
シヤエウツクリ
(四注造)
奉讃会館
銀杏
敷石
井戸
築山
池
仁王
仁王
手洗場

堂宇

本堂全景

1 本堂

昭和四年に新しく造られた手洗場を左に、最近昭和五三年に作られた仁王様を仰いで石段をのぼると、正面が本堂である。本堂は「前方二面吹き放し」の建築で唐破風の向拝を持つかやぶきの入母屋作りである。唐破風の正面には雲の上を鶴が飛んでいる「兎毛通」が付いている。

柱は全部自然石の礎石の上に立ち、床から下は八角で床上は円くなっている。外陣の天井は格天井で柱の間が吹き通しになって外陣と内陣の間は格子窓になっている。

屋根の四隅は太い「二重隅尾棰」で、四隅の間は「二重繁棰」、三斗の斗組の上にさらに「花肘木」をのせて桁を受けている。四方の隅の柱や向拝柱に象と獅子の彫刻の木鼻が付いている。

二重虹梁の間には龍の彫刻があり、上の虹梁と輪棰やショウブ棟の間には獅子にボタンの彫刻を充填したみごとなものである。

本堂建築の棟梁は諏訪郡南真志野村の大隅流の伊藤義範で、彫刻は立川流の流れをくむ木曽上松の人林作十の作である。長谷村非持の伊藤助弥もこの建築に従事し、南隅と北西隅の三か所の木鼻はこの人の彫刻である。

旧本堂（庫裏）

2 大師堂（旧辻堂）

弘法大師と興教大師および十三仏を安置してある。

3 庫裏　この寺の最も古い建物でもとは本堂であった。

4 経蔵

大般若六百巻および十六善神幅等を収めてある。

明治二八年　建立

5 鐘楼

昭和四八年　建立

6 奉讃会館

昭和三二年　建立　檀信徒の休憩所

注7　沢尻信日講結講の趣旨

「……下総国成田山信勝寺ニ安置シ奉ル不動明王ハ其霊験殊ニ著明ナルコトハ洽ク世人ノ信スル所ナリ由テ同局ニ請ヒ尊像分体ノ允許ヲ得テ当郡南箕輪村沢尻耕地ニ一堂宇ヲ建立シ永ク霊像ヲ奉祀シ自今歳時（年々三月廿八日並旧暦八月二十八日）ニ祀奠ヲ奉ケ護摩供養並ニ大般若転読ヲ施行シ衆生ハ共ニ其加護冥福ヲ受ケン事ヲ祈願ス仰キ願ハクハ信者諸君此挙ヲ賛成シ本講ヘ社入アランコトヲ乞フ……

明治十七年十一月日　（中宿文書）

大師堂

注8　十三仏　死者の七七日乃至三十三回忌を司る仏

不動明王、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、地蔵菩薩、弥勒菩薩、薬師如来、観音菩薩、勢至菩薩、阿弥陀如来、阿閦如来、大日如来、虚空蔵菩薩

四　沢尻学校

沢尻学校は、明治六年六月二日創立の久保学校（九八番）の支校として発足した。場所はお不動様（当時薬師堂）の庫裡であり、唐沢金一郎氏が先生であったといわれている。古い沢尻耕地の図面[注9]によると、「三百二十四番、学校、三畝十六歩村扣」とある。

明治一〇年四月九日学区改正により九八番小学の「沢尻学校」となったが、同年一二月一二日伊那村の西伊那部学校[注10]と合併の相談がまとまったので廃校となった。しかし、雪の深いときは本校から授業生がきて、通学困難な幼童の教育をする約束であった。

それいらい沢尻の児童生徒は行政区域の異なる現伊那市の伊那小中学校へ通学して今日に到っている。

沢尻学校附近絵図

注10

爲取替定約証

一 今般西伊那郡学校澤尻学校合併之爾諸相整候
其條款左ニ
一 教則ハ御趣意ニ遵奉可致事
一 [illegible]
可致事
一 西伊那郡学校資本金千五百[illegible]
一 澤尻[illegible]
一 [illegible]金拾圓也[illegible]
一 澤尻より本校へ[illegible]金之儀者一[illegible]金拾[illegible]

事

一 澤尻如稚之生徒通学難出来者ハ本校より授業生ヲ
差遣シ教育可致事
一 授業生差遣シ候ニ付此豫給トシテ澤尻[illegible]金二円差遣シ可
申事
一 澤尻利子金之内金三円ハ澤尻支校ニ置補難費費
用可致事
一 通常本校入費ハ納金拾圓之外一切賦課不致候
得共爾後猶合併等之挙有之變合移轉等有之
節ハ就事世話係協議之上費金割賦ヲ至當ニ取斗

可申候得共平常費用ハ金拾圓之外一切賦課不致候
事

右之通確定熟議之廉々違變無之
將來親睦協力可致且書外之事トモ
實意ヲ以テ万端取斗可申爲後證仍
而條約如件

明治十年三月吉日

澤尻学校世話役 中村由助
同 熊谷庄平
同 中村宗助
同 熊谷又藏

沢尻学校合併約定書

五　宮島氏の宅跡

宮島氏の宅跡は、沢尻の西北字古屋敷（藩在家ともいう）にあったというが、はっきりここだとは定められない。[注11] 古絵図には「長者の井」があり、「拝殿」「神殿」「的射場」等もあって、この地に宮島氏という長者が確かにいたと思われる。

記録によると関ケ原の戦の少し前、文禄初年（一五九二）までは宮島氏がこの地に邸宅を構え、里長（村の長）と神職を兼ねていた。それよりずっと昔、文応年間（一二六〇）[注12] には御射山社が再造営され、その式をとり行なったのが宮島氏であった。また羽広山王権現の棟札には「宮島津盛」の名が記されている。これらによってみると、宮島氏は遠い昔から箕輪郷の総社である御射山社の神職であり、他の社の神職もかねた実力者であったことが推測される。[注13]

ところが、文禄元（一五九二）年に宮島式部一族が、近郷の土人におそわれて、僅かに数人と他国にのがれ、後久保に来て、式部の姉の夫棚木城主棚木四郎のもとに寄食していた。それから約六〇年たって、承応三（一六五四）年に、再び族人と沢尻に帰って、久保の枝村として、村を構えた。

これから明治初年まで、沢尻は久保に属していた。

注12　【宮島氏の宅址】

本村久保耕地の内澤尻、戌亥の方位にあり。東西四十間余、南北五十六間余、字して古屋敷（藩在家と云ふ）と云ふ。今畑となる、稀に武器古瓦を得る事あり。又南方井あり、長者ノ井と云ふ。又小丘あり、拝殿の址を存す、文禄初年に至る迄、宮島氏此地に邸宅を構ふて里長、神職を兼ぬと云ふ（文応年間、御射山社再造営宮島氏其式を執行せり。西箕輪村羽広耕地、山王権現の棟札に曰（文明五年六月十五日、祭主宮島津盛謹行）と、之れに因て考れば、御射山の神職にして、他を兼務する者ならん。文禄元年宮島式部一族、故ありて近郷土人の為に襲れ、僅に数人と遁れて他邦に流寓し、後土人罪に座して斬るに及んで久保に来り姉夫棚木四郎の旧臣に寄食し、承応年間に至り、再び族人と澤尻に還り村落を構ふ、故を以て沢尻今に久保に属す。（長野県町村誌）

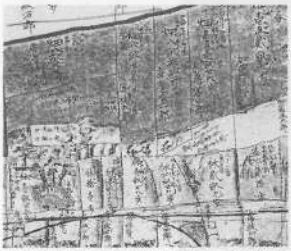
宮島氏宅跡（明治初年）

注13

1. 宮島式部　住沢尻、家尤豪富、嘗為盗殺、而後沢尻邨廃、国主再命隣里墾開、又為一邑、而属久保邨、承応中式部子孫、又住此　（伊那志略）

2. 一久保
一澤尻
久保村南に天正年中棚木四郎と郷士居館の跡有澤尻村如何成故にや潰れ承応三年脇坂淡路守代久保村より取立枝村と成延寳六午年御代官設楽源右衛門御検地也
天正の比宮島式部と云者の居館の跡有　同十八年没落　（伊那温知集）

3. 宮嶋氏ノ宅跡　仝村澤尻ニ在リ氏ハ草創タル豪家ニシテ代々里正幷ニ神職ヲ兼掌セシカ永禄年中宮嶋式部ノトキニ及ンデ賊徒ニ亡サレ為メニ住民八方ニ散乱シテ終ニ亡村トナリ后チ明暦二年久保村ノ百姓移住シテ一村ヲ興セシト云フ　（伊那史科叢書）



宮島氏古跡（拝殿・井）

六　碑

一　成田山開山記念碑

恩徳寺本堂の西に立っている。

碑文

題額　**成田山開山記念碑**

筆額　太田資時閣下

抑モ当山不動尊ハ明治十七年春旧領主太田道灌ノ後系太田資智室梅崎ノ夢枕ニ依リ下総国成田山不動尊ノ金兵衛ノ作トイフ第一御分像ヲ元太田領ト元高遠領等ノ境界整理職唐沢金一郎安正等ハ信州信日講員弐千人ヲ募リ世話人トナリ当地薬師堂ニ御迎ヒシ村内唐沢紋四郎池上亀次郎有賀濱太郎加藤雅賢有賀福太郎先達トシテ村民一同寝食ヲ忘レ一意専心御堂建立ニ力ヲ竭シ明治廿二年漸ク其工ヲ竣ヘ御遷座シタルナリ

次テ明治廿八年ニハ世話人唐沢元一唐沢寿一加藤善四郎加藤代三郎唐沢勇次郎有賀利三郎等西春近村恩徳寺ノ寺号ヲ移シ経蔵ヲ建テ大般若経六百巻及十六善神幅等ヲ収メ弐本建等及石段等ヲ修シ今日ニ及ヘリ　本年ハ恰モ六拾周年ニ当ルヲ以テ其年回ノ記念碑ヲ建立シテ其由来ヲ示ス所以ナリ

昭和十八年十二月笠原政市撰文　元宮内官片桐安司謹書
元宮内官唐沢恵泉建立

碑文にあるように題額は太田資時の筆になり、碑文は箕輪町木下の笠原政市氏の撰文により片桐安司の筆になるもの

である。建立は唐沢恵泉個人の志によったものである。

成田山開山記念碑

(二) 庚申塚

1 庚申塚　お宮の上り口左側に三基。

一　庚申

一　庚申

一　庚申　大正九年正月日

2 甲子塔　お宮の上り口右側に二基。

一　甲子　元治元年

一　甲子　大正一三年

(三) 水神

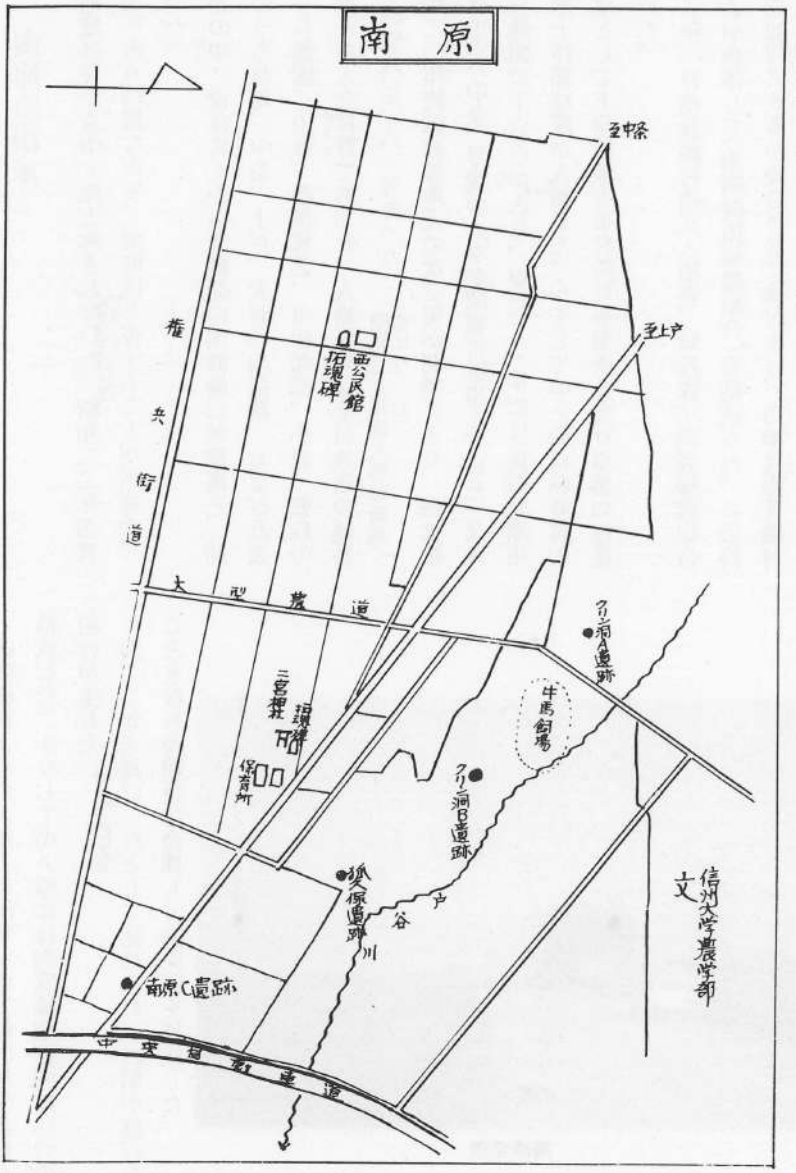
沢尻の西方伊雑皇大神のすぐ隣にある。

一　水神　大正一三年春日

庚甲塚

水　神

第九　南　原


南原
至中條
至上戸
権兵衛道
大砂崩道
西公民館
石魂碑
三宮神社
石魂碑
保育所
クリ洞A遺跡
牛馬飼場
クリ洞B遺跡
孤塚遺跡
戸谷川
南原C遺跡
中央自動車道
信州大学農学部立文

一　南原の由来

当地域は昔から中ノ原と称されていた。昭和二二年南箕輪の南にある地域なので、南原区と称することが区総会できまった。

もとの中ノ原[注1]は古くから箕輪領の南箕輪の各部落と、西箕輪のうち与地、中条、上戸、大萱の四部落、および高遠領のうち御園、山寺、西伊那部、東伊那部、小沢、狐島の六部落との入会秣野（まぐさの）であった。入植当時は全員共通の地番「字中の原八三〇六」であった。（昭和二五年個人毎の新地番になった。）

昭和二〇年終戦直後地元の次三男が開墾に入り、西箕輪からは上戸、中条、与地の人々が開墾に従事していた。又岡谷から疎開の十六戸が入り、更に二一年には長野県開拓増産隊上伊那枝隊が入植した。かくして中ノ原は県直営の開拓地として上伊那地方事務所に事業所を設け事業の推進に努めた。

二二年一月南箕輪村地元入植者、増産隊、岡谷帰農組合の三者が合体して「南原開拓帰農組合」を結成した。この時名称を如何にするか総会に於て検討され、当地は南箕輪村の最南端に在るので「南原」の名称を用いることとなった。

西箕輪村よりの入植者は同年「西箕輪開拓帰農組合」を結成した。かくして中ノ原には南箕輪地籍内に二つの開拓組合が生れた。

同二二年当地は一区として認められ、区制が施行されることとなり両組合は合体して南原区を構成した。

南原全景

入植当時の土地所有は北殿区、南殿区、片倉製糸株式会社、西箕輪の重盛家等の地主が主であったが、個人所有も入りこんでいたので、解放は困難であったが、北殿区の解放をきっかけに現在地区の解放がなされた。

水の苦労は開拓地の常で、三〇メートルも深い井戸を八基共同で掘って利用し、水汲には満洲式の巻揚げを利用した。昭和二四年には待望の電気も導入され、不自由なランプ生活からぬけだすことができた。村の発展は道からと権兵衛街道及び地区の中央を貫く上戸線の改修に力をつくし、以後営々として村造りに努力し、昭和二五年に南原四〇名、西原二三名であった入植者だったのに、今日の隆盛をみるにいたったのである。

注1 入会秣野　字中野原

。反別百弐拾町歩

是ハ箕輪領総地元ニ而与地村中条村上戸村大萱村大泉村田畑村神子柴村南殿村北殿村高遠領御園村山寺村西伊那部村東伊那部村小沢村狐島村右六ケ村入方村々ニ而野手米三斗六升御上納仕候

寛政六年寅三月村差出明細帳伊那郡御子柴村

（大和手家文書）

二　二宮神社

南原公民館西隣りの地にある

二宮神社

祭神

二宮尊徳　天満天神　秋葉権現　大山祇神

大国主神（大貴己神）ほか

由緒

南原の開拓事業が漸く軌道に乗った昭和二三年、入植者が心の拠り所としての神社を創建したいという気運が区民の間に盛りあがった。祭神は二宮尊徳にしたいとの希望であった。ときに、初代組合長原義十郎氏の斡旋により、沢尻恩徳寺の住職川上宥円師から社殿を寄贈したいとの申出があった。この社殿は高遠町香福寺の境内にあって、天満天神、愛宕大権現、金毘羅大権現、秋葉大権現、山神尊宮、大国大神、大貴己大神を合祀してあった小祠であった。ところが南原の産土神とするにはもっと大きな社殿にしたいというので、唐沢光男氏から木材の寄贈を受け、大工池上七郎氏の奉仕で覆殿を建てることとなり、基礎工事や雑費は区民の奉仕によって、二宮神社として営造されたものである。そこで初めにあげた祭神を二宮神社に合祀して旧社殿におさめ祀ったものである。春四月の第二日曜日を例祭日としている。

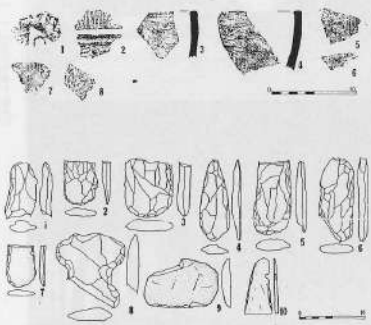
三　南原遺跡

三本木原八六六九―一～八六七二番地にある

この遺跡は現在畑地と宅地となっていて、中央道がこの遺跡を南北に横断している。

中央道の工事に際し、昭和四五年九月緊急発掘調査を行なった。

縄文時代中期の遺物が発掘された。土器片の破片と、石器では、打石斧、横刃形石器、片赤岩製孔のある石器など少なかったがこの附近が中心になった縄文時代の中期の住居跡があったと推定される。



南原遺跡出土図（土器・石器）

四　碑

(一)　南原「拓魂の碑」[注2]

南原公民館の西にある。

碑面　**拓魂**　長野県知事西沢権一郎書

樹幹聳ゆる大平地林にして流水更に無き標高七八〇米の地に地元有志開拓増産隊岡谷帰農組合合体し南原開拓農業協同組合を組織し此の地を拓く

入植年月　昭和二十一年十一月

入植戸数　四十六戸

開拓総面積　八十余町歩

電気導入　昭和二十四年二月

水道完備　昭和三十一年二月

南原拓魂の碑

碑陰

開拓者氏名五十音順

有賀重男	久保村義尊	武井清純	樋代満雄
池上安雄	久保村義行	立石威	樋代勝美
池上英明	小池正成	田畑徳治郎	松村益雄
伊沢文雄	小林常友	茅野孝夫	松村寛
伊藤寅男	小松彬人	中山朋美	宮坂智
伊藤今朝七	酒井行雄	中村清文	宮坂茂喜
補野茂	塩沢英	中村隆太郎	宮坂幸友
大沢久雄	塩沢貢	西村満次	村沢孝男
小口正恭	白鳥政雄	根橋重男	茂木宇一郎
北原昌一	鈴木民蔵	林正武	山口明
北林美行	武井源平	原正三郎	
物故者名			
有沢勝重	小林為吉	田畑斌	樋代義雄
井上松五郎	酒井専一	根橋藤太郎	神谷春子
久保村万一郎	鈴木武雄	原義重郎	

石工岡谷市長地森田石材

注2　南原開拓の業蹟を記念する為、昭和四六年に計画し、題字を当時の長野県知事に依頼し、翌四七年に完成した。「拓魂」は開拓精神を現わし、単に事業を記念するのみでなく、この魂を永く子孫に伝え、村造りの原点としたい悲願をこめたものである。

(二) 西原「拓魂」の碑[注3]

南原区西原公民館の南にある。

碑面　拓魂　　長野県知事西沢権一郎書

朝に夕に星を頂き鍬をとり原野を拓き今日の繁栄の基をなした物故者を含む左の人々及び家族の汗と涙の辛苦を讃え永遠の平和と弥栄を祈念して此の碑を建つ

一入植　昭和二十一年　入植戸数　二十四戸

一電灯完備　昭和二十七年九月

一水道施設　昭和三十一年三月

一水道完備　昭和四十七年四月

西原拓魂の碑

碑陰

有賀栄　唐沢登　離農者

伊藤一登　唐沢義美　小坂源義

伊藤清光　北村金文　菅沼要

伊藤今朝弥　倉田三郎　林末一郎

伊藤幸一　酒井久子　物故者

伊藤照夫　白鳥直人　伊藤甲子　酒井文治

尾崎静直　鈴木五郎　伊藤栄　白鳥家直

尾崎武久　鈴木四郎　岡崎儀高　鈴木福太郎

小坂俊道　鈴木友治　唐沢五一　丸山武雄

小坂治雄　西村重雄　唐沢重雄　（五十音順）

唐沢信行　丸山典良　尾崎才一

注3　西原の「拓魂」の碑も、南原のものと同様の趣旨のもとに昭和五三年一二月に建立された。題字はやはり、時の県知事に依頼した。

(三) 天満宮

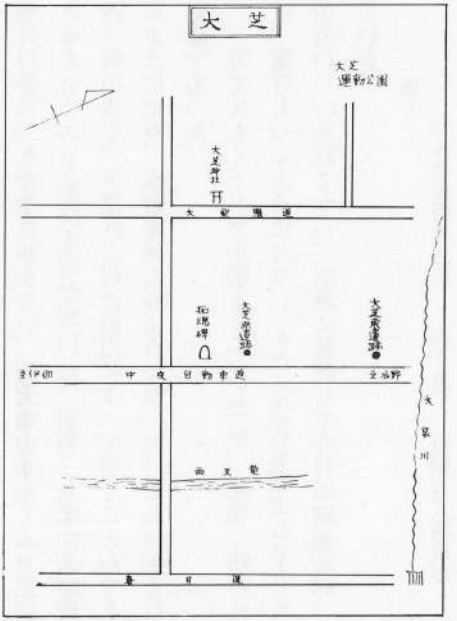
西原公民館敷地内にある

天　満　宮

昭和五十三年十二月吉日

天　満　宮

第一〇　大　芝



一　大芝区の由来

昭和二二年、大芝原の開拓によって、戦後新しく誕生した区である。区名ももとの大芝原からとって、大芝区とした。

大芝原は、その昔一八〇ヘクタールもある入会萩場（マグサバ）であった。[注1] 入会村は南箕輪の全村と大萱、羽広、吹上、寄合新田、大泉新田の一三部落（九ケ村）であった。明治一六年に実測二五〇ヘクタールの分割が行なわれたが、それでも南箕輪分は実測二三五ヘクタールの広い共有地であった。萩野というのは当時の農業に一番大切な馬の飼料の草をとったり肥料の草をとる原野のことである。

この広大な原野に、明治二八年から一〇年間、時の小学校長福沢桃十が学校林の創設を説いて植林を行った。採草地を失うというので、はじめは大反対であった村人も、だんだん理解して協力するようになり、これがもととなって、採草地の原野が現在も見られるような一大美林となったのである。

昭和二一年、戦後のどん底生活の中から、農家の二、三男対策として大芝原の開拓が計画され、県知事の開拓適地

の指定をうけた。翌二二年には入植者が入るようになり、二九戸による開拓四八ヘクタールの大芝区が誕生した。

この地は水利の便が悪いので未墾地として残ったといわれる程の地で、入植者は水には苦労した。大泉新田地区に横井戸をほったが水は届かない、西天竜の水をくんで生活するというみじめな生活が続いた。昭和二九年に大泉所四ノ沢の水を、大泉区と村の協力によって引くことができるようになり、水道が使えるようになった。これは大きな飛躍であった。

一方で久しくランプ生活をしていたが、昭和二四年には、電灯もつくようになり、だんだん生活も向上してきた。苦労の一〇を経てから、急速に発展して今日の隆盛に到っている。

注1

一、入会秣野大芝原　壱ケ所　反別百八拾町歩
是ハ久保殿村田畑神子柴大萱羽廣大泉吹上大泉新田
右九ケ村惣地元ニテ壱ケ年野手米当村ヨリ六升五合
上納仕候（天明四年辰四月　明細書上帳田畑村）
（もんや文書）

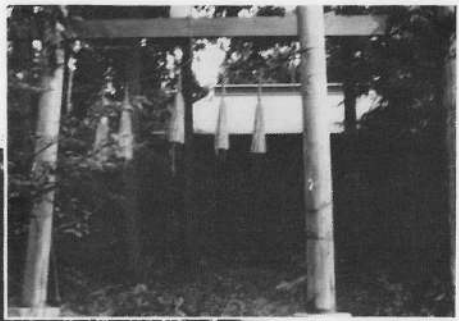
二　神社

(一)　大芝神社

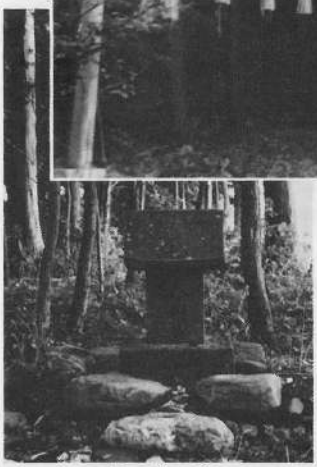
南箕輪村大芝原二三五八番地にある。

祭神

天照皇大神　伊弉冊命　大山祇命
豊受姫神　建御名方富命



大芝神社



天　満　宮

由緒

昭和二六年大芝開拓地内に神社創建の気運が熟し、一二月の組合総会において創立することが決った。翌年の一月社名を大芝神社と定め、宮司鳥山三郎外区内三名を創立委員とし、二七年四月一五日南箕輪村有林内二〇坪の境内に建立した。三三年に五畝歩（五アール）の敷地を時の村長の斡旋により村議会の了承を得て現在地に定め、ここに移転し祭典を挙行することができた。昭和四三年二月正式に敷地を譲り受けることができた。同年一〇月三日鳥居を建て、秋の祭りを一一月二日に決めた。昭和四九年に新社殿が完成し例祭日は一一月三日に変更した。

(二) 天満宮

昭和二八年二月二二日建立

三　古跡

(一) 大芝原遺跡

大芝原二三八〇―二七〇～三三七番地にある。

現在は畑地で中央道が南北に通っている。

昭和四五年九月中央道開通に際し緊急発掘を行った。縦横が一六〇センチに一四〇センチ、深さ九〇センチの土壙（どこう）など三つの土壙と、十数箇の打石斧や縄文中期、後期および弥生後期の土器片が発掘された。中央道用地外東へ一〇〇メートルほどの畑地からは、弥生時代後期の土器片や磨製石族の優品が出ているから、遺跡の中心はこの一帯にあると思われる。

大芝原遺跡発掘状況

(二) 大芝東遺跡

大泉川の南岸、河岸段丘南向き斜面に位置し、東は老人ホーム辺から西は大泉川にそって帯状に経ケ岳山麓近くまで続いている。

昭和四七年中央道開通に当って緊急発掘を行なった。遺跡は山林および畑地になって中央道はここを南北に横断している。

二つの住居址と一七基の土壙(こう)および六本の溝状遺構が発掘された。住居址は縄文中期初頭のもので石器、土器、土師器と灰釉(かいゆう)陶器、鉄製の釘や鉄鎌等多数が出土し、土壙からは、縄文中期初頭の土器片及び石器が出土した。溝状遺構は水路とは考えられない。

また、遺跡の北寄りから縄文中期初頭の土器が大量に、中央より、縄文後期晩期および、平安時代の灰釉(かいゆう)陶器が出土し、中央道用地外西方の一帯から、灰釉陶器の破片や縄文時代の土器片が多く採集された。遺跡の中心はこの一帯にあるものと考えられる。

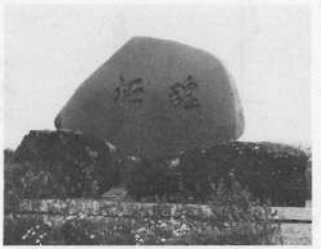
昭和四九年この遺跡地が圃場整備をすることになり、一二月末より始め翌一月一三日にわたって緊急発掘調査をすることになった。

縄文時代中期の住居址二箇と、竪穴、土壙、配石址、柱穴址、溝状遺構をはじめ土器や平安中期の陶磁器多数が発掘された。ここは、集落の中心というよりはむしろ、集落の付随的施設と考えられる。この遺跡は、中央道や圃場整備地域が発掘されただけであるのに、以上の貴重な遺構、遺物が発見されたのだから、さらにこの周辺にはもっと多くの遺構遺物が埋蔵されていると思われる。(大芝東遺跡緊急発掘調査報告書より)

大芝原東遺跡出土(灰釉陶器)

大芝原二三八六―三七八～三九二、二三八〇―四六二番地にある。

四　開拓記念碑



開拓記念碑

大芝公民館の北隣りにある。

碑面　拓魂　長野県知事西沢権一郎書

碑陰　大芝開拓碑

斯の開拓地は以前村有林として松桧等の大樹が茂る村の宝庫であった。昭和二十年大東亜戦争直後の食糧難時代に農家の二、三男対策と食糧増産のため村有林解放運動を起こせしが村内一部に強力な反対がでた。当時清水国人氏が会長の農民会が母体となって開拓組合を結成し強力な解放運動の結果効を奏し、国の緊急開拓認定と相埃って開拓されることとなった。

時に昭和二十一年五月五日先遣隊増産隊引揚者等の入植者により組合を組織し此の地を拓く。

開拓建設は水の確保がその成否の鍵であった。昭和二十二年三月大泉新田地籍の横井戸工事に始まり大泉所四ノ沢水源の導水を完成、その間実に十有余の才月を費す。開拓二十有余年事成り一般農政移行に伴い組合解散に当り主なる事業の概略と組合員の名を刻み此の碑を建立して永く後世に遺すものなり

主なる事業の概略

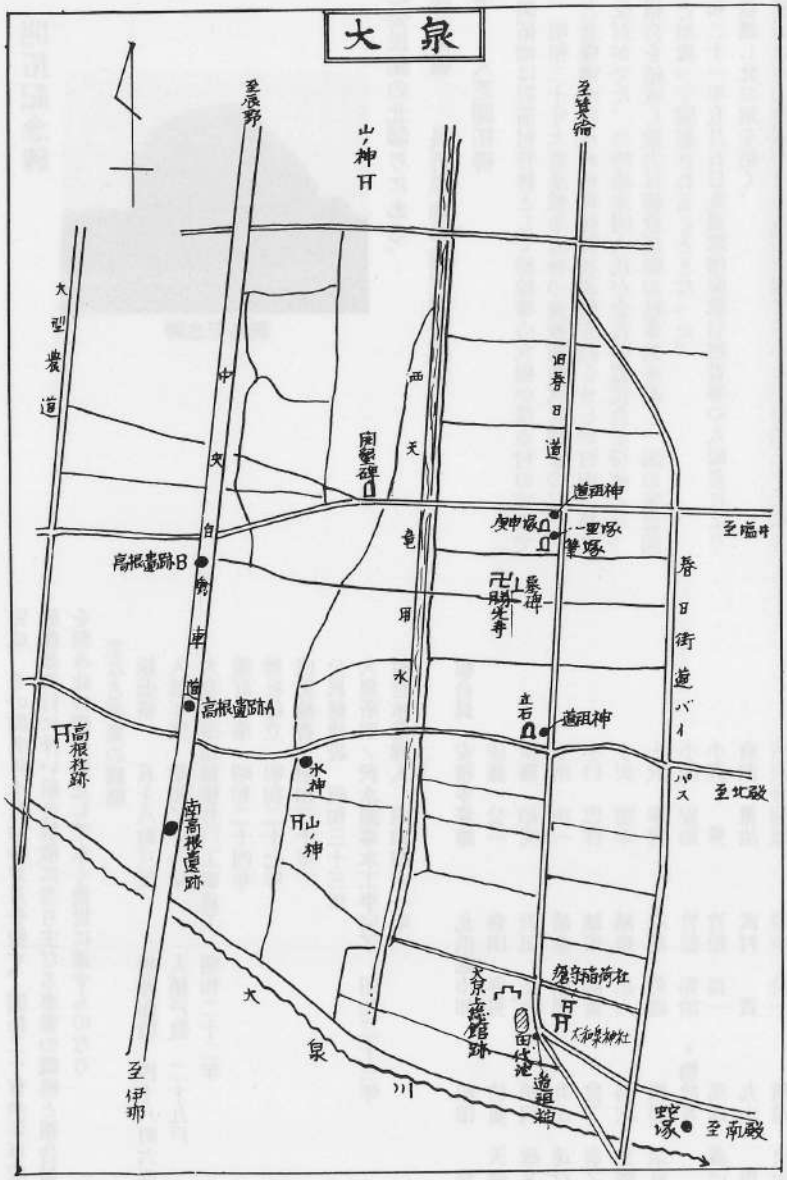
総面積　五十八町三反　耕地面積　四十八町六反
入植年度　昭和二十一年　入植戸数　二十九戸
大泉新田地籍横井戸工事着工　昭和二十二年
電灯工事　昭和二十四年
神社建立　昭和二十七年
成功検査　昭和三十年
公民館建設　昭和三十三年
大泉所四ノ沢水源導水工事完了　昭和三十三年
村営水道導入　昭和四十一年

組合員　安積多喜雄　北爪嘉市郎　原田　邦
伊藤　公一　倉田　春男　坊薗　天命
伊藤　和実　沢田　庄六　松沢　政文
宇治　由一　清水　信男　丸山　達行
小口　忠作　城田　満重　宮下　泰之
小沢　宗幸　城倉　正人　湯沢　光雄
小沢　幸男　高島　哲雄　横道　宗弘
小沢　安治　竹松　完治　。物故者
小沢　勇　竹松　良一　高島　義己
唐沢　重治　武村　貢　丸山　豊
唐沢今朝雄　田中　良一　横道　竹市

昭和四十七年三月二十二日

大芝原開拓農業協同組合

第一一　大泉


大泉
至辰野
至箕輪
山ノ神
大型農道
仲仙道
西天竜用水
旧春日道
道祖神
至塩尻
高根遺跡B
高根遺跡A
高根社跡
南高根遺跡
水神
山ノ神
一里塚
春日街道バイパス
至北殿
大泉川
至伊那
大京塚館跡
田代池
大和泉神社
塚
至南殿

一　大泉の由来

古くは尾泉（おいずみ）とかき、後大泉（おいずみ）と改めた。昔大泉は大泉川の段丘北岸にそった東西の村であり、高根社がその中心であった。大泉所山、大泉川、そして大泉村の大泉は、大泉氏[注1]が古くから住んでいたのに由来するといわれている。

尾泉とは大泉川の水がこの辺から伏流したので、尾の泉の意味かともいわれているが確かなことはわからない。ただ現在そこに大泉のもとのお宮熊野三社跡（高根社）があり、その附近には夏でも冷水の湧く泉が近年まであった。[注2]永禄年中（一五五八―一五六九）鹿踊（ししおどり）のときおめでたい名の村として大泉があげられているので、一六世紀には尾泉でなく大泉と改められていた。

戦国時代末の天文年中（一五三二―一五五四）大泉上総（かずさ）[注3]がいたところである。徳川の世となって慶長一三（一六〇八）年には春日街道ができた。この時は確かに南北に長い村となり、宝堂院から勝光寺がほぼ現在地へ移され、宿場としての八間の町割ができそのあとも南部には今なお残っている。約五〇年ほどして慶安二（一六四九）年には北殿へ宿場が移り、大泉から問屋一人と伝馬六人が北殿へ下って西側に構え、東側の北殿と合宿で役をつとめた。慶安元（一六四八）年には大泉新田[注4]が新しく開発された。諸役御免で加集杢之助を権現様にしている村が分村したのである。長野県町村誌には正保二（一六四五）年分村となっている。

水で苦労した村であるが、昭和になって西天竜と共に息を吹きかえし、美田に囲まれ、中央道や大型農道も通り昔日の面影もない。

注1　元慶六壬寅年（八八二）此地の郷士左内嫡子常之進より大泉常之丞と代々此地を治め、殊に長和三年（一〇一四）四月より大泉常之丞は郷内人民に命じ専ら開墾せしむ。大泉所山、大泉川の称此郷士より出でたり。（明治三五年内務省神社局、旧神社録）

注2　永禄年中大旱魃。近郷雨乞大願成就して為御礼と目出度村名をして鹿踊と云事を出す。
（伊那郡神社仏閣記）

注3　天文年中大泉上総居館之跡有
慶安二丑年迄春日海道馬次相勤候處小村の義勤兼脇坂中務少輔へ願上殿村へ罷出両村相會傳馬役相勤候様に被仰付傳馬役勤候者斗り殿村へ引移り候西側は大泉村分なり　（伊那温知集）

注4　大泉新田　諸役免許
是は慶安元子年脇坂淡路守代開發す（伊那温知集）

二　神社

(一)　大和泉神社

大和泉神社は大泉区の南方にあり、大泉川の段丘の上に位置して、春日街道東にある。

祭神

建御名方命（諏訪大明神社）　伊井冊尊（高根社）
速玉雄命（高根社）　事解男命（高根社）

旧大和泉神社（昭和初年）

大和泉神社

由緒

明治四〇年一一月二一日、諏訪大明神社と高根社を合祀して、「大和泉神社」と改称した。

諏訪大明神社の創立は明らかでないが、御朱印[注5]高五斗の社領をもっていたので、江戸時代のはじめにはすでに相当の格をもっていたと思われる。さらにさかのぼって、戦国時代末期の永禄年中（一五五八―一六六九）には、鹿祭りが始っているのからみて、当時大泉の諏訪大明神社は、箕輪郷の惣社南宮神社に対して、天竜川西を代表する神社であったと思われる。棟札によると明和六（一七六九）年に建替えられている。文政九（一八二六）年に焼失したため文政一二（一八二九）年に再建されて、今日にいたっている。

高根社のあとには、「熊野三社遺跡」、「昭和十二年四月建立」「大泉中」と記された碑がたっている。この高根社の創立も明らかでないが、字高根にあるこのお宮が大泉のもとの古い神社であったと伝えられている。村の神社明細帳によると、祭神は伊井冊尊、速玉雄命、事解男命の三柱で創立年月不詳、宝永三（一七〇六）年一一月再建、社殿間数方五尺（これは現在の本殿の右側の祠である）、境内坪数七九坪、信徒百人とある。

熊野三社遺跡碑

社殿（大和泉神社）

春日道から入ると、両側に高い常夜灯が一基ずつたっている。昭和八年に高遠町の黒河内仁一郎の奉献したものである。御手洗（みたらし）に続いて控柱をもつ両部鳥居が立っている。銅板でかこんだ木の鳥居で、扁額には「諏訪大明神」と刻まれている。当時は諏訪大明神社[注5]と呼ばれていたことをものがたっている。続いて「大正二年十月」に石の鳥居がたてられているが、これは控柱のない明神鳥居である。その次に古びて形のよい常夜灯が左右一基ずつ立っている。「天保十四年（一八四三）八月奉納」と記されている。

拝殿は入母屋造りの瓦葺で正面唐破風で、虹梁（こうりょう）と桁（けた）の間に竜の彫物があり木鼻には象や、獅子の美事なほりものが刻まれている。正面や瓦には諏訪の明神様と同じ梶の葉の紋がついている。渡廊を通って本殿にすすむと、本殿は、覆屋（おおいや）につつまれている。

本殿は六尺の一間社で流造り正面唐破風である。正面および両側面に縁をめぐらし脇障子を設けている。向拝の前は浜縁になっていて五段の木階登り、ギボシ勾欄をつけている。背面は横板張り両側面に七賢人の彫刻があり、向拝柱は面とり角柱で頭貫は虹梁様、木鼻は象で立川流の特徴をもったみごとな彫刻である。

正面虹梁と桁との間には鶴に仙人の彫物をおき、破風の下の軒の桁も虹梁様彫刻があり、中心の棟との間にも彫刻があり、卯の毛どおしは龍で、母屋と向拝は龍を彫刻したえび虹梁ですぐれたもので手挟もまたすばらしいものである。

正面長押と台輪の上に彫ものをおき蛙股があり、柱の上の組物は手のこんだ三手先で軒支輪も、みごとである。

これは文政一一（一八二八）年七月、諏訪高木村の立川流の宮大工小口直四郎（棟札には小口求四郎）が請負いの一札を入れ、翌一二年九月に立替えられている。この時の本殿が覆屋にかこまれて、現在まで残っている。

右側にある熊野社本殿は一間社流れ造りの階段のない見

本殿彫刻 (一)

本殿彫刻 (二)

世棚造りである。柱は全部角柱で貫は絵様くりがたで、妻は大瓶(だいへい)束である。

鹿祭り (一)

鹿祭り

大和泉神社に勢ぞろいしたお鹿が、昔からの方式に従って今も、木下の南宮神社に奉納されている。この日をお鹿祭りと呼んでいる。

この祭の起源もはっきりしないが、永禄年中[注7]（一五五八―一六六九）に大かんばつがあって、雨ごいの大願がかなったので、お礼に鹿頭七五頭をだしたのがはじめであるという。この七五は、諏訪で行なわれた御頭祭[注8]に、猪鹿の頭七五をまないたにのせて供えたという、肉の祭りの数と一致している。

また諏訪では年々御射山で明神の大祭を行なっている。伊那郡では三日町にその例式が残っている。これははじめ西山の御射山平[注9]で行なわれたものであった。しし祭りはこの御射山神事[注10]の遺ったものであろうともいう。とにかく箕輪郷一万石の惣社南宮大明神は一ノ宮にあって、箕輪二七か村の惣社であった。この惣社（一ノ宮）へ隔年に鹿を奉納する鹿祭りは、単に大泉だけの祭でなく、箕輪郷一帯少くとも西山一帯の住民の切実な祈りのこもった雨乞い祭りであったと思われる。

鹿祭り（二）

（二）境内社

1 瘡守稲荷社

大和泉神社の北に西面している。

祭神　豊宇気比売命

由緒

もとは春日道の西側（二〇〇四番のロ）にあったこの社を明治一二年三月に現在地へ引宮した。天明年中[注11]（一七八一―一七八八）に飛騨の国（岐阜県）の茂助という者が、江戸在の谷中の笠森稲荷の神主方に奉公して、国もとへ帰る土産としてこの稲荷様の分霊をいただいて、途中大泉まで来て大泉の番太郎を勤めるようになった。そこで春日道端に小宮をたてて祀ったのが最初の笠守稲荷社であった。

瘡守稲荷社

二度目のお宮は誰が建てたか不明であるが、三度目は原伝次郎の弟直八が、上州（群馬県）で石工の仕事をしているとき瘡毒にかかり、国へ帰ってこの稲荷社に神願をかけたところ全快した。その時直八の建てたのを引宮したのが現在の瘡守稲荷社である。戦前まで近郷の人々、特に町の花柳界の人々の参詣が盛であった。

覆屋におさまっているので気のつく人も少いが、建物は唐破風に千鳥破風の正規の組物で手のこんだすばらしい社殿である。

2 天満宮

祭神　菅原道真

3 蚕玉社

小さい祠の中に、美しい石像の蚕玉様がある。作者は大泉の石工原此右衛門で、お四国様と同じである。尚市場の蚕玉様（大泉の西部にあった）も昭和五〇年に合祀されている。

4 太子様

祭神　聖徳太子

建立不詳　昭和四七年春日道バイパスから遷宮した。

(三) 山の神

1 大泉南西部の老人ホーム東側にある

一、**山の神祠**

2 大泉北部、字北原の神社林の中にある

一、**山の神祠**

注5　大泉村

一、諏訪大明神　神主鳥山氏

社領五斗。御朱印。尤南殿八幡宮十四石之内。

（伊那神社仏閣記）

注6　(1)宮普請仕用帳并請負一札

覚

六尺之壱間社　壱社

。組物之義ハ弐手先　向拝之組物ハ出組　同虹梁ハ菊水　椽之組物ハ三ツ計　唐破風虹梁雲

。彫物之義ハ向拝獅子象　向拝之蛙股之義ハ人物御望次第　唐破風萱仙人曹子　同所下行飛竜　海老虹梁竜　妻之虹梁鷹須若葉　丸柱獅子　同裏之方ハ絵様蛙股四枚　絵之間乱獅子　珠輪ハ波　上之蛙股雲ニ鳳凰　大平柄脇雲水　下行鰭ハ波　六葉亀之真向胴はめ見合物　脇障子七賢人　唐戸編子形　絵の間宝尽し　手挟牡丹之駕籠彫

但し　木品桁下惣樫　桁より屋根裏迄惣松　土台ハ栗　屋根之軒附弐重　唐破風ハ蛇腹葺

建地ハ絵図之通
右は御村方産神宮再建ニテ木品より屋根迄請負仕
尤社内樫枯木三本申受金五拾両ニテ杣木挽大工屋根
や扶持米作料金物迄諸色引請申処実正ニ御座候　右
金五拾両之内木取始ニ金五両受取跡金之義ハ四度ニ
申請普請皆出来之上皆済可ㇾ被ㇾ下候　万一本人未熟
仕候ハハ加判方ニテ金子返済急度仕少茂御損御苦労
相かけ申間鋪候為念請負一札仍而如件

文政十一子年七月　諏訪高木村大工　直四郎㊞
木下村　受人　八郎右ヱ門㊞
同村同断　周作㊞
木下村受人　彦四郎㊞
大泉村　御役人衆中様
同　御世話人衆中様（大泉区有文書）

(2)　大泉神社棟札
表　奉新立替諏訪大明神御宮殿
文政十二丑九月吉詳日
裏　大工　同國諏訪高木村　梁頭　小口求四郎
同上諏訪金子村後町富五郎
木曽奈良井野村安兵衛

注7　永禄年中大旱魃。近郷雨乞大願成就して為御礼と目出度村名をして鹿踊と云事を出す。川東福與、福島に三日町寺郷は警固を出す。同川西大泉、富田に羽廣も警固を出し年々隔年に勤来る。尤鹿頭七十五づつ也。近年四五十づつ出る。（伊那郡神社仏閣記）

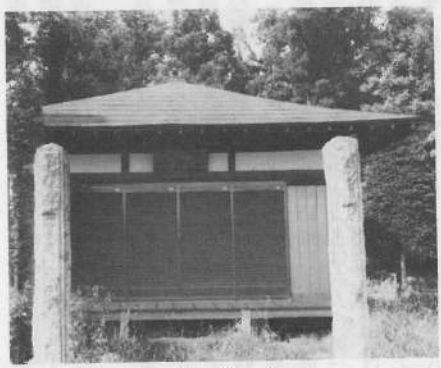
注8　御頭祭
三月酉日本社より十八丁を隔て前宮に十間廊あり（往古は鷹狩の実検廊也と云今俗に十間堂といふ）上段に一百餘の燈籠を挑猪鹿の頭七十五俎にのせて供ふ（俎は松板を二つを切四角にあしを貫く）饗膳の賄は郡中（古は國中）にて十六ケ村を頭村と定め十六年に一度つゝ祭事を勤む其年の頭村より十五歳以下の童男一人を神使と號て出す（古は六人也第一には伊奈より出る二人を外懸介外懸宮付と云二には諏方より出る二人を内懸助内懸宮付と云三に佐久より出る二人を大懸介大懸宮付といふ）（蕗原拾葉一八）

注9　三日町邨御射山明神。往古在西山。神領之地。祠官唐澤氏管之。中條。條字或用城字、其所居。後為木曽家遂唐澤氏亡。神祠亦廃。或曰小澤邨古城唐澤氏所住。或是乎。神子柴邨有鳥居神門也、蹟存曰鳥居原。神子柴即御輿場國訓同也。今三日町邨祠官有唐沢氏即其後耳、（伊那志略）

注10　一一〇ページ注3参照

勝光寺（昭和初年）

勝光寺所蔵（男根）



勝　光　寺

三　大泉山勝光寺（勝光堂）

大泉の北部の西部保育園の東にある。

本尊　十一面観世音菩薩

十一面観音

由緒

昭和三〇年四月西部保育園がこの寺の敷地内に開設されたので、少し西の現在地に移された。古くは村の西北部中央道の東の字宝堂院の地にあったが、春日街道が開通した時、村の北端の春日街道ぞいに移されたといわれている。

本尊は平安前期天台宗の高僧慈覚大師（七九四―八六四）の作と伝えられ、経ヶ岳山頂において斎戒沐浴して開眼し、大泉の宝堂院に安置されたといい、更に上古田の正全寺と羽廣の仲仙寺の観音像と一木三体で、大泉の尊像は其の最初の元材で、作られたので姉像であったと言い伝えられている。村人に深く信心され、大泉上総という豪勇の士も朝夕この観音様を崇拝していたという。

春日街道ができたとき街道ぞいに移転されて相当に栄えたこの寺も、時がたつにつれておとろえ、腐朽が甚だしくなったので、宝永四年（一七〇七）村内信徒の寄進により本堂及本尊像の修理[注12]をした。

昭和一三年春までは堂守の僧侶が居住していたが、其の後適任者がなく無住となり、現在は区の管理となり老人クラブが清掃の奉仕をしている。今でも春秋の彼岸には彼岸会を行ない、四月八日にはお釈迦様の潅佛会をしている。

堂内には別にエンマ王像をはじめ十王像がある。宝暦四年（一七五四）に記された「伊那郡神社佛閣記」[注13]には「観音堂」となっているが、村人は勝光寺と今でもいい建物の扁額にも勝光寺となっているので、いつの時代かには勝光寺であったかとも推測される。しかし宝堂院・勝光寺・勝光堂の明確な区別と関連ははっきりしない。昭和五四年にお堂が大修復された。

なお堂地の入口（現保育園東入口）の左に「郷倉敷」と

いう字名の所がある。ここは大泉の郷倉のあった所である。

境内には左の塔碑がある。

- 五輪塔　一基　権理塚より移したといわれる。
- 馬頭観音像　六二基　○馬頭観音碑　二六基
- 観音像　五基　○弥勒像　一基
- 地蔵像　一基　○二十二夜塔　一基
- 南無阿弥陀佛碑　一基　○寒念佛碑　一基
- 念佛供養塔　一基　○廻國供養塔　二基
- 観音講中碑　一基　○無縫塔　七基
- 墓碑　一基
- 秋葉神社碑　一基

注12　（本尊の台座裏銘）

当尊十一面観世音者自当初雖此草堂御座累月
茲古既覃干腐朽矣　生刻□此像村野之道俗靡風一銭
半鵜之催切於終遂々爾□□□一同有安置今此堂場云々
旹　宝永四（一七〇七）集丁亥夷則（七月）中潮（中旬）
信州伊奈郡蕗原庄　施主大泉郷中

注13　大泉村
観音堂（伊那郡神社仏閣記）

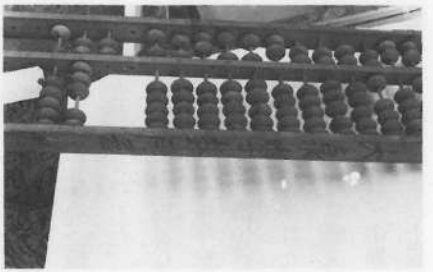
四　大泉学校

大泉学校は、大泉村の中央[注14]の中西の屋敷内にあった。現在のこうじやの倉の建っている処であったらしい。生徒数は明治九年には男四二人女七人であった。

沿革　大泉では明治五年八月三日の学制頒布をうけて明治五年九月二四日から、久保南割（塩ノ井）北殿南殿と相談して、北殿の松林寺で学校をはじめた。明治六年一〇月一五日北殿南殿と大泉で明治学校を設立して教育が行なわれた。

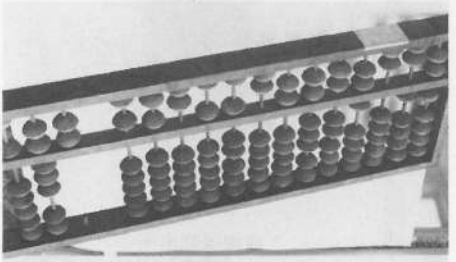
しかし、遠くて幼童の通学に不便であり雪道の困難もあったので、大泉学校を独立する計画をたて、明治七年には校舎をたてて永山権令の許可を得、明治八年四月二五日から独立開校をした。学校が盛大になってよろこんでいると、明治一〇年には早くも合併を県からすすめられた。明治一一年七月一日「南箕輪学校」が現在小学校のある字桜ケ丘に創立され、大泉学校は廃止された。

しかし幼童の歩行通学に困難であり、降雪の時は数日間大泉から通学する者はまれであって、貴重な時間をただつぶし教育上まずいので、大泉に出張所をおき授業生一名を



大そろばん（大泉学校用）

おいてこの問題に対処した。[注15] 明治一六年になっても大泉の総代はなお、独立校にする願を何度も県に出し、また許可のないのに大泉で学校をはじめようとしたりした。明治一九年から田畑・神子柴・久保も合併した南箕輪学校になったときも、大泉に派出所がおかれた。



大そろばん（大泉学校用）

現在一村一校のすばらしい南箕輪小中学校の隆盛をよろこぶと同時に、大泉のその頃の人々が教育によせる期待の大きさと熱意のほどをうかがうことができる。

注14 壱ケ所本村大泉耕地中央字西浦ニアリ大泉学校ト云生徒男四十二人女七人　（明治九年村誌）

注15

「分校御願」　上伊那郡南箕輪村　大泉耕地

「上伊那郡第二十番学区内大泉之儀ハ去ル明治六年五月中大泉ヨリ北殿へ合併ノ約成リ同八年二月迄合併致居候得共……

翌十一年中校舎ヲ建築シ南箕輪学校ト唱ヘ生徒ノ授業差閊ナク施行致シ来リ況ンヤ大泉ニ出張所ヲ設ケ授業生一名ヲ置キ幼童就学ノ緒ヲ助ケ且降雪ノ際幼童ノ通学ノ難ナル者ヲシテ授業セシムルモ本校ヲ隔ル事遠キヨリ生徒ノ歩行患難ナル事子弟ノ父兄タル者如何ゾ之ヲ徒視スルニ忍ンヤ依テ今般人民一同奮発シ成規ノ通リ学資ヲ募リ一学トナシ子弟ノ教育ヲ盛ンニセントス　伏シテ願クハ右ノ事情御洞察ノ上分画離校ノ御認可ヒ成下置度此段連署ヲ以テ奉請願候以上

明治十六年四月四月　　右大泉耕地人民惣代　七人　印

長野県令　大野誠殿

五　古跡名勝

(一)　高根遺跡

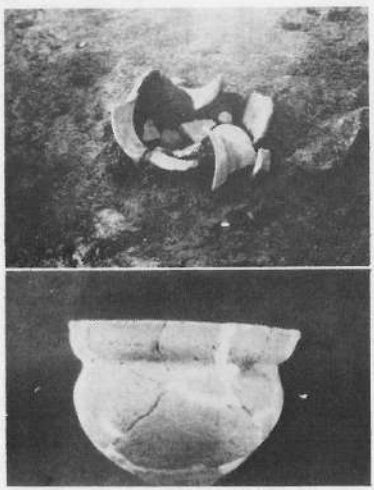
高根遺跡出土
（深鉢）

大泉高根、大泉川の北岸段丘上にある。

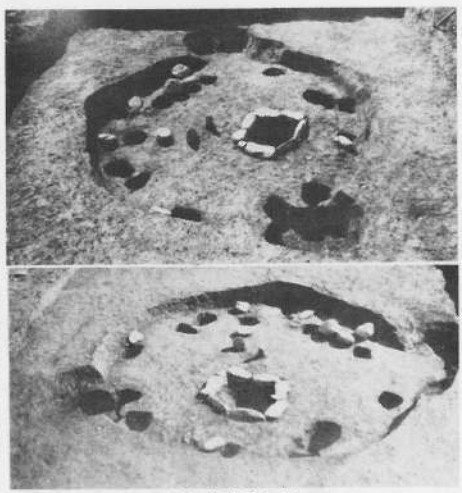
昭和四七年一〇月から一一月にかけて、中央道開通につき緊急発掘を行ない、続いて大規模農道の開発による緊急発掘調査が行なわれた。この両度の調査によってここは古代集落址として、重要な遺跡であることが確認された。

南高根遺跡からは平安時代の住居址一、土壙一と、縄文中期時代の土器が最も多く、さらに早期・前期・晩期・平安時代の土器も発掘された。

北高根遺跡からは縄文前期の住居址二、中期のもの三、弥生時代のもの五、中期のもの二と、柱穴四、溝それに土壙三七と縄文中期の土器が発掘された。



高根遺跡出土（鉢）



高根遺跡住居址

ここからは土壙五、竪穴三、縄文期の土器多数と、古銭や一一世紀後半美濃産の灰釉陶器その他が発掘された。この遺蹟は東西一五〇メートル、南北一〇〇メートルに及ぶ地域に分布しているものと考えられる。

また、ここには熊野三社址のあるところから推察すると、平安末期から鎌倉時代には、旧大泉部落はこの神社を氏神としたと考えられ、今は畑地や山林原野になっているが貴重な遺跡地と考えられる。

（埋蔵文化財緊急発掘調査報告書より）

高根遺跡出土
（深鉢）

高根遺跡出土（かめ）

(二) 大泉氏の館址

大泉の南端、大泉川の北岸、字田代という所に大泉上総[注16]の館城があった。大泉上総は箕輪城の藤沢氏の四天王[注17]の一人であった。

天文一三辰（一五四四）年[注18]、甲州の武田信玄が福與城を攻めた。信玄は諏訪まで来、有賀峠を越えて武田典厩が大将で、辰野衆を案内として福與の城にせまった。城内では藤沢頼親を大将にして木下殿村大泉其の他近郷の士百余騎と雑兵とも千五百人で防戦した。大泉上総藤沢織部は強弓の射手でさんざんに射たが、衆寡敵せずついに落城してしまった。大泉上総はこの時から民間の人となったという。

現在居館の址は明かでないが、字名田代（田城か）は残っている。

注16 一、大泉
天文年中大泉上総居館之跡有
—伊那温知集—

注17 (1)大泉上総
住大泉、傳曰本姓原氏子孫今為邑長、温知集、以大泉上総、倉田将監、木下總蔵、藤澤織部、呼曰四天王、
（伊那志略）

(2)大泉城墟、同村大泉耕地ニアリ東西二十間南北三十間塁堤纔ニ存ス古来大泉氏代々ノ居城ニシテ天

文年中大泉上総ニ至リ福與城箕輪頼親ニ属シ強弓ノ射手ニシテ既ニ武田氏打入福與城攻ノトキハ上穂、藤澤、ニ組シ三氏ヲ以テ大手口ノ大敵ヲ引受ケ武名ヲ顕シ後主家亡ヒテ民籍ニ降ル（村誌及小平物語云）

（伊那史料叢書）

注18 天文十三辰年甲州武田信玄諏訪迄出馬有て上伊那の内辰野平出衆を御手に入箕輪福與の城を攻んとて大将武田典厩有賀峠より打入平出辰野衆案内也此事府中に進達す長時よりも伊那へ入立じと赤羽の北荒神山に取手を構草間肥前さゝへたり龍ケ崎にて合戦あり草間難叶して羽場の城へ引退す福與の城には頼親を大将にて松島大出長岡小河内福與の衆木下殿村大泉其外近郷の士百余騎雑兵共に千五百人楯籠典厩進て城の北十町斗上搦に向城取相戦城方にも藤澤織部大泉上総強弓の射手にて散々に射るといへ共多勢難斗由を信府に訴長時後詰として壱万五千の人数を以塩尻迄出馬の處早落城に及城に火をかけ降人と成

（伊那温知集）

(三) 一里塚址

大泉の北、公園と呼ばれる地に、一里塚[注19]があったと伝えられ標柱が立っている。正保年間（一六四四―一六四七）に作成された「信州伊那郡之絵図」（脇坂絵図）に、大泉の北の入口に一里塚の印・・がついている。昭和二七年頃まで、落葉松の古木と欅の大樹が聳え立っていた。古老の話によると、春日街道が造られたとき、間縄（けんなわ）の古くなったのを埋めて、その上へ落葉松を植えたのだという。それがいつの頃か、一本枯れたので、その後に欅を植えたという。すると、欅の方が若いはずだが、見た目には欅の方が大木に見えた。

この大木も年がたったので、台風の時太い枯枝がおちたり幹に大きなウロができて、周囲が危険になったので、昭和二七年頃切り倒して処分された。落葉松は大泉の民家で落札し、土蔵の落し板にした。その一本でほとんどできたというから、大木であったことが知られる。

この一里塚あとの周辺は公園というか遊園地となり、庚申塚がある。

注19 一里塚

孝徳天皇御宇の斥候是ナランカ

平地ニハ土ヲ高ク築上ケ人ヲ置テ遠見シテ急ヲ告ルノ者ナリト元ハ里程ヲ知ルバカリノ事ニアラズ乱世以来修造セザリシヲ天正年中織田信長三十六町ヲ以テ一里ト定メ塚ヲ築キ道ノ両傍ニ松ノ木ヲ植ラレケリ　是ヲ並木松ト云フ奉公人一里塚ニモ松ヲ植申スベキヤト伺ヒケレハ余ノ木ヲ植ヨト仰セ有ケルヲ榎ノ木ト承テ植ケルト云フ是ハ並木ト混ゼザルノ事ナラント云リ

（木曽古道記）

信州伊奈郡脇坂絵図（部分）（正保年門）

(四) 蛇塚

大泉の東南にある。大和泉神社の南の道を、東に五百メートルばかり下ると、大泉川の河川敷から登ってくる道と交わる。そこに昔は一つの経塚があった。その経塚から約一〇〇メートルばかり西に道路ぞいに高く石を積んで、つる草が一面にからまっている所があった。ここが蛇塚とよばれていた。

この蛇塚[注20]は天正年間（一五七三―一五九一）に、時の領主保科弾正が家臣井沢某に命じて、大蛇をたいじして埋めたところと伝えられている。昭和の初期頃までこの辺一帯は蛇が沢山いて気持の悪い所だったので、まさに蛇塚の感がした。今は西天耕地整備のため、経塚も大蛇を埋めたといわれた石の山もとり除かれ、美田となってしまった。ただ蛇塚という字名だけが残っている。

注20　蛇塚

蛇塚本村大泉耕地辰ノ方弐町許ニアリ天正度保科弾正忠正直（時ノ領主タリ）家臣井澤某ニ命シテ此地ニ出ツル大蛇ヲ屠リテ埋メシ處ナリト云フ此蛇今ノ大萱耕地（西箕輪村に属ス）ニ棲ミ屢此地ニ出テ人ヲ悩ス因テ此挙アリト大蛇ノ例ニ出シ地ヲ今ニ蛇抜洞ト云フ（新著聞集ニ見ユ）（長野県町村誌）

(五) 立石

立石（庚申塔）

大泉の中央に立石がある。立石と呼ばれているこの石は二度三度道路拡張とともに移転され、今は春日道の西側に東面して立っている。古老に聞いても何の石かわからないし、石面の文字らしいものも判読できないまま、久しくすごしてきた。

ところが今年になって、朝日の光で写真をとってみてようやく判読に成功した。「奉供養青面金剛」「宝永八辛卯年二月大泉村中」とある。するとこれは庚申塔で、大泉では一番古い。辻に立っていたので厄落しに茶わんを投げつける道祖神の役もして来ている。

この辺一帯も立石[注21]と呼ばれ、昔は宿駅があり眺望のよい景勝地であった。

注21 立石本村中央ニアリ此地タルヤ古エ宿駅ヲ置キシ所正西ニ聳ヘ大泉所山アリテ大滝ト云瀑布ヲ眺望シ恰モ常ニ布ヲ晒スガ如ク春秋共ニ風景ノ街ト云フベシ（長野県町村誌）

六 碑

(一) 庚申塚

大泉北部の公園にある。

一 **奉供養庚申塔** 正徳二年（一七一二）壬辰二月吉日
願主 大泉中
（上に日月 下に三猿の像あり）

一 **庚申** 寛政十二年

一 **庚申** 安政七年

一 **庚申** 大正九年三月 大泉中
（年号なし）

一 **庚申** 大正十三年

一 **甲子** 大正十三年二月 大泉中

一 **甲子** 庚申七月

一 **念仏塔** 寛延三年 辰十二月

一 **念仏供養** 宝暦十年 辰三月日

一 **寒念仏** 明治□□午三月

一 **馬頭□□** □化十六年二月日

一 **馬頭観音像** 年月不記

一 **地神** 年月不記

一 **道祖神**

庚申塚

(二) 道祖神

1 大泉公園内に一基ある。

一 **道祖神** 安政七庚申年 願主末年男

2 大泉中央、立石の側にある。

一 **道祖神** 原周□□妻

3 大泉の「榊屋」宅地内西南にある。

一 **道祖神** □□十二巳七月 願主辰吉

4 大泉神社西南の辻にある。

一 **道祖神** 施主原信一

(三) 開墾之碑

大泉の北西、西天竜幹線水路より一〇〇メートル余西のリンゴ畑にある。

碑面

開墾之碑 耕地課長 穂坂申彦

側面 右 大泉耕地整理地区

左 昭和十年十一月 石工出羽沢為十郎

開墾之碑

碑陰[注22]

語ニ曰ク、倉廩実則知ル礼節ヲ、衣食足ツテ則知ル栄辱ヲ矣、真ナル哉。耕地整理事業者ハ開ク拓シテ荒蕪地ヲ而須レ計ラク農産物之増殖ヲ也。吾地ハ曩ニ設ケ置シ於西天竜耕地整理組合ヲ畑地シデ化為シ水田ト、雖モ鼓腹撃壌ニ於ス米作ニ、養蚕及ビ雑穀集収ハ蓋シ鮮少ナ焉。於レ茲ニ、企ル図ル大泉ハ耕地整理開墾計画ヲ而、委ニ嘱シ於其ノ設計ヲ本県ノ農林技手轟賢規氏ニ、昭和四年十一月、得テ知事鈴木信太郎閣下之開墾認可指令ヲ着工ス。当時ノ加入者ハ十六名、反別ハ六町ナリ。昭和七年七月有リ設計ヲ受ケ更ニ認可ヲ、同年十二月農林大臣後藤文夫閣下ノ受ケ助成金交附指令ヲ、更ニ昭和九年六月得テ耕地拡張設計ノ変更ノ認可ヲ。其総反別実ニ十六町五反余、地主三十一名、所要総工費一万円也。為レ是ニ被ル交附助成金四十円、並ビニ県補助金三百円ヲ、依リ地区民ノ一致協力ニ改善シ耕地区劃ヲ修ニ築シ道路水路及ビ橋梁ヲ、以テ使シ便ナラ経営ニ多角形農業ニ正シ一新ス其面目ヲ矣。庶幾ハ知ラン礼節栄辱ヲ。当リ於ル工事之竣成ニ建ル設ル開墾碑ヲ而録シ其大要ヲ、賜イ援助ヲ各位ノ芳名ヲ詒シ後世ニ爾云。

耕地課長穂坂申彦農林技手笹本重行助手征矢三郎設計者
農林技主轟賢規西天竜書記太田市衛助手中村忠道
中箕輪出張所長　林桂　施行委員長田中静雄識

注22　この碑は大泉耕整の記念の碑である。水の乏しかった大泉に、西天竜ができて見事な水田ができたことは喜ばしかったが、稲作だけの単作地帯になったため、当時北原の大森林地帯を開墾して畑作もできる地帯とした碑で、今日の大泉の隆盛をきずくもととなったものとして注目される事業であった。

四　清水重賢翁碑

大泉公園内にある。

清水重賢翁碑

碑面[注23]　子爵　渡辺　国武篆額

翁諱ハ重賢、通称三郎兵衛、清水氏。信濃国上伊那郡大泉村ノ人、翁業ニ農桑ヲ、喜ビ学ブ善クシ筆札謡曲ヲ。郷人推シ重ヲ、来リ学ブ者甚ダ多シ。翁誨爾諄々トシテ、三十年、如シ一日ノ。其徳之所レ及ブ洵ニ不レ尠ナカラ矣。明治三年十月二十九日没ス。享年六十有二、其孫正賢、現承ク重ル。頃門弟欲ス刊シ石ニ表シ其退筆之冢ヲ以伝ヘ翁ヲ。余嘉シ其誼ヲ、乃チ為リテ之ガ頌ヲ曰ク

誨ヘテ人不倦マ　此翁近シ之ニ、無レ徳不レ報ィ、門人

有焉、嘻此ノ師弟、誰カ古之則、人欲レ知レ翁ヲ、
請フ視ヨ二此鐫一ヲ。
明治三十八年十一月陸軍教授従七位　西村豊譔

碑陰　石工　唐沢　菊弥

注23　清水重賢翁は大泉村、中西家の人で、農蚕業をしながら学を好み、書道、謡曲に秀で、近郷より来り学ぶ者が多かった。門弟子がその徳を偲んでこの碑を建てた。

(五) 清水柳茂辞世の碑

大泉西村家墓地にある。

辞世　**萩の根や寄るとちる身の置所**

寿七十五才　凪静庵柳茂

碑面には繁屋柳茂信士、繁宝妙昌大姉

天明七丁未八月十五日　清水宇右ェ門重寿

(六) 清水雅康追悼句の碑

大泉中西家墓地にある。

花にくれて月の世界を見にゆかん。　雅康

碑面

清水正堅四女種子十八才逝去を悼んだ句である。雅康は中西家の先々代で久保木下家から養子に迎えられた。養父重堅は寺子屋師匠であった。

七　井　堰

(一) 下井

大泉新田地籍内の大泉川から取水して、大泉新田を通りぬけたところで、上井に合流している水路である。大泉の草わけ時代は、民家は高根社の上下に散在していたようであるが、そのころは大泉川の水もたくさんあり泉も利用できた。おいおい人口がふえてきたので上流より井堰を堀ってきて使用したのが、この下井である。

今では大泉新田の村中を通り上井から取水する二寸口の水も合流していて、大泉新田の水路のようであるが、大泉の一番古い水路として、今でも補修の費用も労力も大泉で負担し管理している。現在大芝スケート場の水はこの水を利用している。

(二) 上井

大泉所山ダムの下から取水して吹上から大泉新田を通って大泉に達する井堰で五か井（大泉、吹上、大泉新田、富田、中曽根）ともよばれている重要な井である。

元禄元辰（一八六六）年時の領主板倉頼母守に願い出て、大泉で井の許可をとることができた。しかし、大泉村だけ

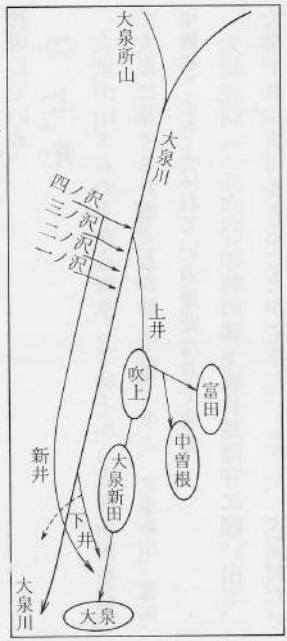
では山の斜面[注24]を堀って水を引取る力がないので、領内から人足を出してもらって堀割りを行った井である。

途中、元禄三（一六九〇）年に富田と中曽根からこの井筋の水を分水してくれるよう申込まれたが、大泉村ではむろん拒否した。領主からの命でやむなく三分を富田中曽根に分け与えることになった。鷹町分枡（大枡ともいう）がそれである。その時は吹上と大泉新田は井端でくみとる生活用水だけであったが、後にだんだんと分水の権利をかくとくし、中坂分枡（吹上）とか二寸口（大泉新田）となっている。

昔の記録にはほとんど毎年決壊大修理の事業が記されているが、昭和の今日でも大雨が降ると決壊するほどの難しい井筋であり、それだけ重要な井筋でもある。

下井に対して「上井」とも呼ばれている。

上井鷹町分枡



井筋絵図

㈢ 新井

上井下井の水をもってしても、大泉の水はまだまだ不足している。明治になって、大泉所の谷の南側（ひかげ）の水を大泉までひくことを願いでた。下流の反対を解決して明治八年にこの水路が完成し、新井と名づけられた。

大泉所の四ノ沢、三ノ沢、二ノ沢、一ノ沢の水、いわゆるひかげの水を、三〇度近い急な岩石だらけの斜面に井堰をひいてくることは、困難な大事業であった。水量の一番多い四ノ沢からは上と下の二カ所から取水している。その急斜面の山にひかれた水路の跡を見ただけで、今の工法でみても相当に困難な事業であろうと、当時の苦労が偲ばれる。

その上に土地の問題がある。明治一六年の大芝原分割に[注25]

際して、この井敷分として延三二九二坪（一一〇アール）を特売してもらって取得した。これが平地の分で二間巾（にけんはば）といわれている。更にその上の山の部分は、大正五年大泉所の分割のとき、井堰保全地として上下二〇間（三六メートル）幅、延一八町七反九畝五歩（一八七九アール）を特売している。この山の手入は現在でも入念に行なわれている。

さて、このようにして取入れた水は、大泉川を樋でわたして、生活用水とした。この樋が大水の度に流れて修復に費が多かった。西天竜もでき戦後となって、この井堰はその使命を終え、昭和三三年には水道管が敷設されて、まず大芝区の開拓に役立ち、老人ホーム大芝公園をうるおし更に村全体の重要な水源となっている。

形は変ったが、昔も今もこの水の重要性に変わりはない。改めて大泉単独でこの新井をひいた、当時の人々のスケールの大きさと見識実践力に敬意を表したい。

注26

御川除場　四ケ所　但　棚場　八拾間余
石堤場　三百間余
蛇籠出　四百間余
枠出ッ　六拾　余

右ハ大泉村呑水無「御座」候而大泉所山之水を四拾町余山之そばを引取上堰ニ仕候山沢殊ニ沢々を堀切取上申候故百姓自普請ニ罷成不レ申サ候所前々ヨリ唯今迄御入用被「下シ置カ」御普請被レ遊バレ被レ下ダ候事

（享保五年、大泉村明細帳―中西文書）

新井分水枡と二間巾

注27

新井

売渡証

一、字大芝原　延長千六百弐拾六間
原野　三千弐百九拾弐坪　但井縁トモ幅弐間ナリ
此反別壱町九畝廿弐歩
此売渡代金　拾弐円也

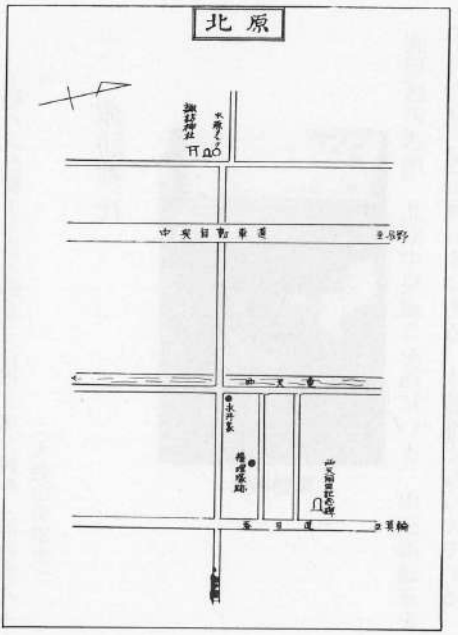
右者同原入会両村持地分轄ニ付大泉耕地新井敷ニ係ル地盤訂査ヲ遂ケ標記代金ヲ以テ売渡即チ皆金請取候処確実也就テハ将来永ク同地ニ係ル権義ハ貴耕地ノ負担スヘシ為後日入会惣代連署地所売渡証如件

大泉原入会惣代
南箕輪村　清水平一郎㊞
松沢源五郎㊞
西箕輪村　宮下源太郎㊞
原　文作㊞
上伊那郡南箕輪村戸長　穂高孫三郎㊞

明治十六年八月三十一日

大泉耕地惣代
原　孫左ヱ門殿
原　信一殿

第一二 北原



一 北原区の由来

昭和二一年北原地籍に、各地からの入植者一〇戸により、北原開拓団を設立し、北原区が誕生した。北原地籍にあったのでその字名をとって北原区と呼称した。

一時は一七、八戸になったときもあったが、現在は一四戸で、日本一小さい区と自認している。北原地区はその昔一八〇町歩（一八〇アール）[注1]もある一一カ村の入会萩野であった。入会地分割で一番早く明治四年には分割された。大正四年には統合されて村有[注2]になるに際し、入会権のなかった神子柴区が金三百円を出して、全村の村有となった。

この村有地一一町九反（一一九〇アール）を開拓して、昭和二一年に北原区が誕生し、今日に及んでいるのである。

注1

一入会萩野北原　壱ケ所
反別百八拾町歩
是ハ富田中曽根中原新田大泉北殿南殿久保木下田畑大萱
吹上惣地元二而野手米当村より弐升九合上納
（天明八年　田畑村明細帳もんや文書）

注2

字北原、南箕輪村一、六三四番地、面積二〇町七〇〇八歩。

木ノ下、富田、吹上、中曽根、久保(沢尻)、久保南割、大泉、北殿、南殿、田畑、大泉新田、大萱共有ヲ明治四年分割スル。右土地ハ大正四年無償ニテ村有ニ譲渡セリ　神子柴ハ入会権ナキ為当時金三百円ヲ出シ村有ノ権利加入スル

(入会山分割史)

二　諏訪神社

諏訪神社

北原区の西南、北原中央通りを西にいき、中央高速道をくぐりぬけた西の林の中にある。水源池とならんでいる。

祭神　八坂刀賣命

昭和四〇年一二月、区民の総意で諏訪大社(下社)より御神体をお迎えして建立した。毎年五月の第三日曜日を祭礼日と定め、区民一同境内に集まり、花見をかねた祭典を行なう。

区も小さいが社祠も小さいので、将来北原区が発展したときには、もっと相応(ふさわ)しい社殿に造りかえたいというのが、区民一同の願いであり夢である。

三　権理塚

春日街道を北へ行って南箕輪村から箕輪町へ出る手前の西側、つまり西天竜の鐘水豊物の碑の南側にあったが今は水田となっている。

昭和のはじめ西天竜開田のさい、ここから五輪塔をはじめ塚の一部と思われるものが発掘された。現在大泉の勝光寺の北側にある五輪塔一基もそれであるといわれ、永井家のやしきの西北隅にも一部が移されている。

その昔、権理塚[注3]という塚があり、秣野北原の境界の目やすになったりしていたが、その由来は定かではない。一説[注4]に加集李之助が伊予の国(愛媛県)からつれてきた若衆の中に権理というものがあり、その墓を生前にたてて供養したので「権理塚」の名がつけられたという。

また一説には箕輪城が武田に攻められて落城した際の落人達を葬ったものであるともいう。

字北原、小字五厘塚は戦前は大泉の区有地の畑であって個人に貸せてあったので、大泉区と関係があったと思われるがはっきりしたことはわからない。権理塚と呼ばれてきているが五輪塚のなまったものともいわれ、この附近に今でも字五輪と呼ばれている地帯がある。

注3

権理塚

本村久保耕地戌の方字北原ニ在石碑五輪塔ニテ三体アリ苔苔石ヲ蒸シ或ハ磨滅シテ文字詳カナラス実ニ古代ノ墓標ト云可シ　（長野県町村誌）

注4

権理塚囲之儀先御地頭脇坂淡路守様御家中加集杢之助との伊予より御召連被成候若党六十年以前右春日道上之土手を用為二逆修一に築たし申し候此もの後に権理と申し候以上

宝永三年戌八月十六日

権理若掌名五兵衛後ニ庄左ヱ門と申し候

（中宿文書）

五輪塔（在勝光寺）

四　以和清水碑

北原神社の南側にある。

以和清水碑

碑面

創設　昭和三十三年九月昭和三十九年秋建立

以和清水

清水国人村長此の地に水道を創設区民の福祉を図る

茲に碑を建て其の功徳を不朽に伝ふ

北原以和清水水道組合

碑陰

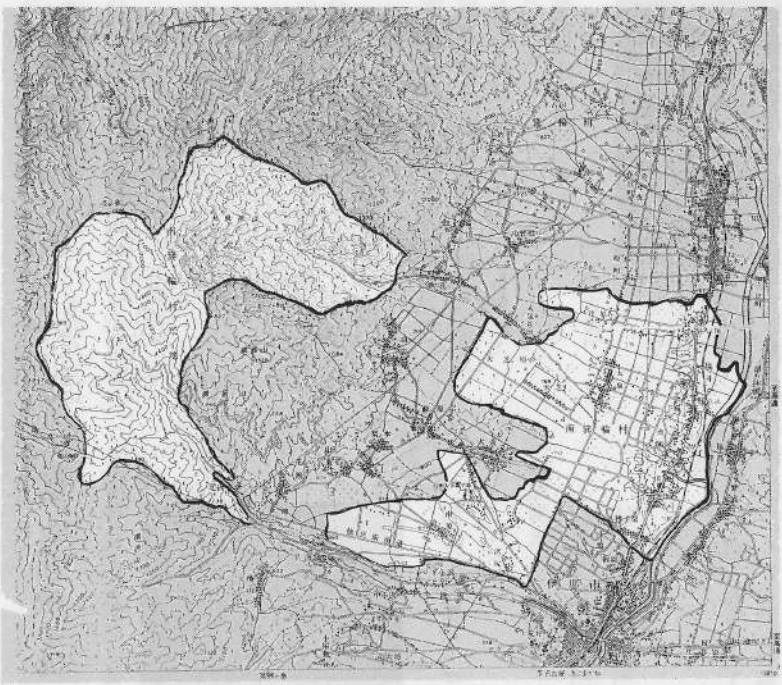
組合員名録　組合長　上原千尋　副組合長　木下英夫

会計　伊藤昇　監事　秋山治良

永井記太郎　小林信重　蜂屋諦浄　縄乙蔵

田中清勝　座間健治　赤羽史郎　永臣芳武

第十三　全　村



南箕輪村全地図

一　南箕輪村の由来

明治八年二月一八日、南箕輪村[注1]が誕生した。久保村、大泉村、北殿村、南殿村、田畑村及び神子柴村の六か村が合併したのである。

この地域は古くは蕗原庄[注2]といい、後に箕輪郷[注3]とよばれていたが、その箕輪郷の南に位置していたので、南の箕輪という意味で南箕輪村と命名したものと思われる。

明治二二年の市町村制の施行にあたって、県は小さい村の合併を強力に推進したが、南箕輪村は十分独立にたえるとしてそのままであった。その後、昭和三一年の新市町村建設促進法の実施でも伊那市に合併をすすめられたが、南箕輪村は独立の道を歩んで今日に至っている。

南箕輪の地域一帯の由来といってもわからないことばかりである。今から約五万年前に天竜川の段丘ができたとされ、その段丘の上の神子柴遺跡には、約一万年前の先土器時代の人々の遺したものがたくさん出てきている。それから縄文時代の約五千年間の原始時代を経て紀元前三世紀ころから弥生時代が始まる。この縄文時代と弥生時代の遺物も南箕輪の各地の遺跡からでている。このころの人々は段丘のほとり、上下の水を求めて早くから、また長い間この辺に住みついていたと思われる。

和銅六（七一三）年から信濃の国と称したが、その時はむろんそれ以前の科野（しなの）の国と称したころも、この辺はしなの国に属していた。それから養老五（七二一）年六月に諏訪国に属し、また天平三（七三一）年三月また信濃国に属するようになった。（明治まで）

それから「信濃国伊那郡蕗原庄箕輪郷」と自分達の村を呼んできた。しかしそのころの事は何にもわからない。

古代、中世、近世とすすんでくる中で、中世末になってようやく城とむすびついて、ここの諸城が文献に現れるが、南箕輪の城は全部武田氏に亡ぼされている。徳川の世になって初めは飯田城主小笠原秀政の領地として一六年間、続いて脇坂淡路守安元・安政に五六年間属していた。寛文一二壬子（一六七二）年から幕府領（天下領）となり代官が一、二年おきに変って支配するようになった。それから天和二（一六八二）年板倉領（私領）となって一五年間がすぎた。

ここで南箕輪にとって大きな変化がおきた。元禄一二（一六九九）年から、今の村内が二つに分かれて統治されるようになったのである。久保（塩ノ井、沢尻含む）、南殿（半分位）、

北殿（一部）は太田隠岐守の私領となり、大泉、北殿、田畑、神子柴は幕府領（天下領）となったのである。この二つに分かれた村々は、それぞれ天下領となったり私領になったりして、めまぐるしく替わる領主に支配されて幕末を迎えた。明治になってようやく分割されないでいっしょになり、明治二年から四か年間伊那県に、明治五年から筑摩県に、明治九年八月から長野県に所属して、今日に至ったのである。

明治八年六か村が合併した後、今までの小さい六か村は「耕地」とよばれた。塩ノ井と沢尻もそれぞれ耕地となった。耕地が区とよばれるようになったのは、明治二二年[注4]に町村制が施行されてからである。戦後になって昭和二一年に北原区、大芝区、南原区が、昭和五〇年には中込区が加わって、現在一二区となっている。

いまは一村のうちに大学、高校、中学校、小学校、保育園（幼稚園だけない）の教育機関がそろった独立の貴重な村となっている。ここで明治以降の南箕輪の移り変わりを図表化すると次のようになる。

旧南箕輪村役場

南箕輪村の移り変わり（明治以降）

6カ村合併　南箕輪村

明治8.2.18（419戸 2,333人）

久保村（含塩ノ井）（含沢尻）　大泉村　北殿村　南殿村　田畑村　神子柴村

⇓

（仝上）8耕地となる

久保耕地　塩ノ井耕地　沢尻耕地　大泉耕地　北殿耕地　南殿耕地　田畑耕地　神子柴耕地

⇖

8区となる

明治22年（535戸 2,836人）

久保区　塩ノ井区　沢尻区　大泉区　北殿区　南殿区　田畑区　神子柴区

⇓

12区となる

昭和50年（2,048戸 7,676人）

久保区　塩ノ井区　沢尻区　大泉区　北殿区　南殿区　田畑区　神子柴区　北原区　大芝区　南原区　中込区

昭和21年　昭和50年

注1

南箕輪村

1　沿　革

南箕輪村は、明治四年の廃藩置県が布告された当時は、久保村（塩ノ井村を含む）、大泉村、北殿村、南殿村、田畑村及び神子柴村に分かれていたが、明治八年二月一八日この六か村は合併して南箕輪村となった。

この合併は従来の小村を小区単位に合併させ一村とするとの筑摩県権令の強い指導によってなされたもので、明治七年八月二〇日、当時第一七大区九小区に属していたこの六か村の各副戸長及び戸長の連署をもって「右者今般御趣意ニ基キ私共村々合併村名南箕輪村ト改称示談相整候間御許可被成下置度依之地図相添一同連印ヲ以テ奉願上候」との合村願が筑摩県権令に提出され、同年九月二〇日権令から他の合併願とともにその旨内務卿に伺い出たところ、翌明治八年一月一七日「書面合併ノ儀廉々伺之通聞届候事」として伺のとおり許可され、同年二月一八日付第二一号により「信濃国伊那郡久保村（塩ノ井共）、大泉村、北殿村、南殿村、田畑村、神子柴村、右合併南箕輪村ト改称（中略）右之通合村改称相成条此旨布達候事」との県の布達があって同日から南箕輪村が発足した。

過ぎて明治二二年の市町村制の施行を迎えた。当時県は有力町村を造成するとの趣旨から町村の合併を強力に推進したが、南箕輪村は規模も大きく一村のまま十分独立に堪え得るものと認められたことから、合併もなく明治二二年三月一九日付県令第一八号により、同年四月一日からそのまま新村として発足し、以来今日に至っている。

2　今次町村合併における動向

県の町村合併計画案においては、南箕輪村は伊那町を中心とする一町七か村のうちに含まれており、住民の代表一八五名によって研究もなされたが、伊那市との合併については時期尚早との意向となって、合併の気運には至らなかった。なお、四六年六月二八日に住民の世論調査もなされたが、合併の機運が現われず、同日の議会において、合併の可否は、いま少し時期をみて定める、村議会は独自で研究を進めるとの方針が決定された。

3　現在の大字

なし。

4　明治以降の町村の合併系図

（長野県市町村合併誌）

注2

箕輪

古為露原ノ荘、神詞佛閣上梁文ニ、或ハ作伯耆原ト、或ハ作箒原ト、按ズルニ和名鈔ノ露原字ハ和訓ニ婦々幾与伯耆及箒相近シ、因訛レル之ヲ耳、慶長中為リ飯田小笠原侯ノ領地、又為リ脇坂侯ノ領地、後又板倉侯領ニスレ之ヲ、今為リ公領、松本侯管スレ之ヲ、内五千石、属シ太田氏ノ領ニ飯島陣屋管スレ之ヲ。

（伊那志略）

注3ノ1

箕輪庄

昔往ハ箕輪六郷ト云　木下久保殿村大泉留田羽広ト云俗説ニ右六ケ村ニ岸三ケ村相添ト云。

（三ケ村…上戸、中条、与地）説と（三日町、福島、福与）説とあり

一説ニ箕輪ニ庄号ナシ古来露原之庄之内ナル也

（伊那旧事記）

注3ノ2

箕輪濫觴

…天正十七年関白勅命を得て北条に参内の事を催さる。北条沼田の城を給はば、上洛に及ぶべしと望み申されけり、去らば沼田の代地を徳川殿より宛行るべきよし仰らる。神君聞召、保科に命じて共有地を割て真田には賜はりける。（此事諸書に載る所、常山紀談を始として皆実を得ざるなり。）

今箕輪の地保科が領地にて割り与へし所なり、上田より隔遠なれば、箕輪町に陣屋を設て守しむ。（箕輪町は今の木下なるべし。今に箕輪坂、箕輪たんぼ林の地名も存するなり）これより箕輪領の名起れり。……（箕輪記）

注4　区制施行

区長

区域広濶又ハ人口稠密ノ地ハ、施設ノ便ヲ計ランカ為メ之ヲ数区ニ分ツノ必要アル可シ。故ニ本制ハ、市町村ニ区ヲ劃設スルコトヲ許シ、之ニ区長及代理者ナル行政ノ機関ヲ設置セリ。此機関ハ其市町村ノ行政庁ニ隷属スルモノニシテ、其指揮命令ヲ奉シテ事務ヲ区内ニ執行スルモノトス。其委任事務ノ範囲ハ、土地ノ情況ト市町村行政庁ノ酌量ニ在ルモノニシテ之ヲ定メスト雖モ、区長ハ名誉職ニシテ別ニ区ノ附属員ナル者ニアルニアラサレハ、（三府ヲ除クノ外）実際此事情ヲ酌量セサル可カラス。要スルニ区ハ、市町村内別ニ特立シタル一ノ自治体タルニ非ス。区長モ亦固有ノ特権アルニ非スシテ、単ニ町村長市参事会ノ事務ヲ補助執行スルノ便ニ供フルニ過キス。故ニ区長ハ、市町村ノ機関ニシテ区ノ機関ニ非ス。区ハ法人ノ権利ヲ有セス、財産ヲ所有セス、歳計予算ヲ設ケス、又議会若クハ其他ノ機関ヲ存スルコトナシ。蓋区ヲ設クルトキハ、施政ノ周到ナルヲ得可ク、一市町村内ノ各部ニ於テ利害ノ軋轢スルヲ調和シ、市町村費賦課ノ不平衡ヲ矯入又能ク行政ノ労費ヲ節略スルヲ得可シ。要スルニ区長ヲ設クルハ、更ニ自治ノ良元素ヲ市町村制中ニ加フルモノニシテ、旧制ノ伍長組長等ノ例ヲ襲用セルナリ。但従前ノ区内ニ存スル戸長ノ類ト混ス可カラス。又区ニシテ従来固有ノ財産アル時ノ例ハ、第五章ノ説明に詳述ス可シ。

明治二十二年　町村制施行（長野県政史）

二　街道

一　権兵衛街道

権兵衛街道と峠の遠望

元禄九（一六九六）年に、木曽日義村の神谷権兵衛が木曽一一宿の問屋と力を合わせて、鍋掛峠の難路を馬の通れるように改修した。それからこの峠は権兵衛峠[注5]と呼ばれるようになった。伊那の坂下から沢尻、南原を通って一直線に与地の原まで道が新しくできた。これが権兵衛街道で、現在伊那日義線国道三六一号線となっている。

木曽から峠を下ってくると、北沢の三軒家へでる。そこから斜に高い段丘を与地に上る。この坂を逢坂という。昔は木曽へ荷物を運んでいった父や夫が、暗くなって帰ってくるのを家人が提灯をつけてこの坂の上（逢坂頭）まで迎えに出て待っていたという、その逢坂とは帰る人と迎える人の逢う坂であり、昔はここに茶店があった。

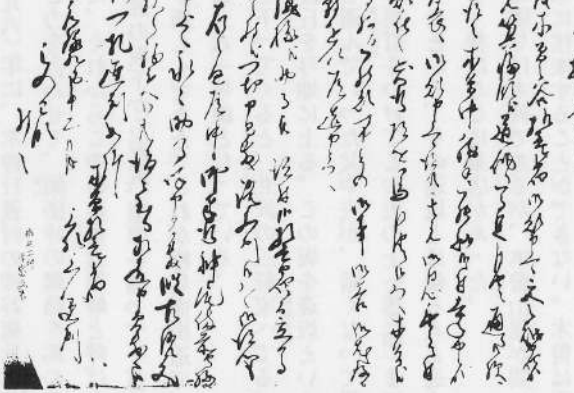
伊那のすぐお隣りは木曽であるが、木曽山脈が間に立ちはだかって簡単に往来することができない。木曽は天険の地であるが食糧に乏しい、伊那は穀倉地である。このためいつも木曽側から伊那へ侵入してくる。侵入軍は木曽馬をもち山谷をかけめぐるに長じていたせいか、いつも伊那軍は負けている。天文年中（一五三二～一五五四）に木曽義康が峠をこえて侵入してきたとき、倉田氏も「与地ケ原」で戦い敗れて北殿へ移ったという。天正一〇（一五八二）年には珍しく高遠[注5]

城主の仁科信盛（盛信）が二八〇〇人もで、木曽義昌を攻めようとしたが、峠の上で雪が深く進むことができなかった。翌一一年には木曽義昌が政めこんできて、箕輪高遠勢は与地ケ原で負けている。

伊那志略のできた文化九（一八一二）年のころも冬春は雪が深く、たまたまこの峠で風雪のための死者があったので、峠の上にその死者を弔うために、自然石の碑が立てられた。伊那温知集には鍋掛峠が「信濃第一の難所」と記されているほどである。

この峠を人馬の通れる道にすることは、今なら大歓迎というところであるが、当時伊那側は大反対であった。それは中山道の荷物運びにかりだされる、あの百姓泣かせの助郷が目に見えていたからである。権兵衛が木曽一一宿の問屋を語らい、江戸表まで熱心にお願いして、ようやく伊那側の承諾がえられた。その時の一札[注6]によると、「箕輪郷からは馬一匹も助郷にださないでよろしい、もし御公儀から申付があってもその馬は一一宿で責任をもってだす」とある。この一札は箕輪郷にとって大分助かり、特別の大通行を除いて馬をださないですんだ。これに比べてお隣りの高遠領はこの一札がないばかりに人馬ともに助郷にかりだされた。

伊那の余り米か涙米か、伊那節に歌われている両方とも真実を語っているように思える。それはともあれ、当時かなりひんぱんに往来したこの峠の馬ひきたちが、唄った歌が元歌となって伊那節ができた。与地にはその一つの「おんたけ山節」が正調伊那節として今も保存されている。



権兵衛街道改修の一札
（中宿文書）注6

注5　権兵衛造

在与地ニ至ル木曽之路ニ、按ズルニ天正十年正月、高遠城主仁科信盛自ラ率イ弐千八百人ノ将ヲ以テ攻ム木曽義昌ヲ、嶺上雪深ク不レ能ハ進ム即チ此ノ路也。高遠記ニ為ス清内路ト者恐ラク誤リ也。至リテ今ニ冬春之間雪太ダ深シ、偶マ為ノ風雪ノ死スル者間亦有リ之レ、故ニ近年嶺上ニ建テ碣ヲ弔フ其死人ヲ、又按ズルニ天正十一年木曽義昌之来ルモ即チ亦此路ナリ、往古其路険阻ニ而細シク不レ能ハ通ズル牛馬ヲ、元禄丙子萱平土人権兵ヱトイフ者乞イ之ヲ官ニ嗣キ其榛棘ヲ、平ゲ険阻ヲ人馬始通ル、因リテ名ツケテ為ス権兵ヱ造リト、言フ権兵ヱ者始メテ造ルト此路ヲ也、木曽志略ニ作スハ鍋懸嶺ト者、即チ是ノ路ナリ。

（伊那志略）

注6　権兵衛峠

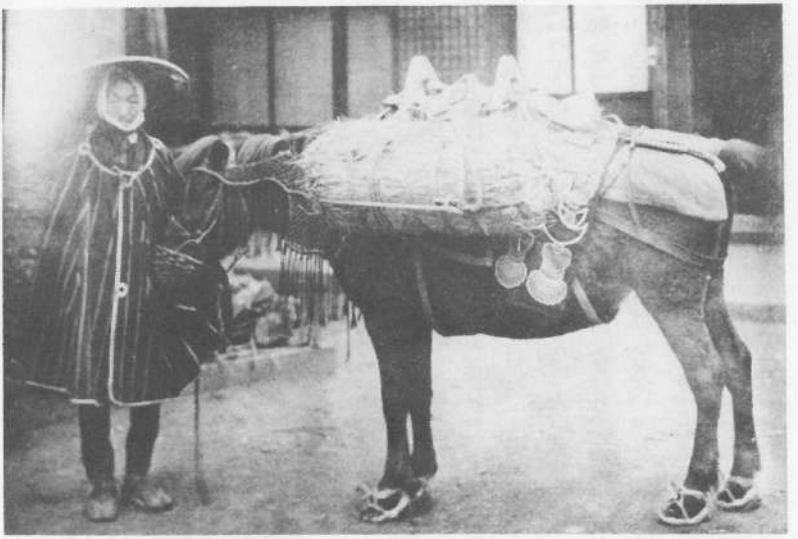
一札之事

此度木曽之谷拾壱ケ宿御願申上候宮之越宿より其元箕輪領江道作り馬足自由に通り候様ニ致候エバ木曽中勝手ニ罷越候ニ付去年中より江戸表へ御願申上候エ共其元御同心無レ之候ニ付キ再ビ願イ仕候歩行道を馬自由ニ候ハバ木曽へ助馬杯と罷リ願イ可キ申との御事御答御尤に存候相対を以テ道造申候はば御公儀様へ助馬被ニ仰付一候拾壱宿ニテ立馬出シ各々村へ一切申間敷証文出し候はば御得心も有レ之右之通道中御奉行神尾備前守様へ御願申上候永々助馬呼申間敷段右証文如何様の論をへ候共後ニ至り相違申間敷候為レ後ノ一札連判如レ件ノ

木曽拾壱ケ宿　三拾三連判

元禄九丙子二月みのわ領村々へ

（中宿文書）



馬追いの姿

(二) 春日街道（付大泉宿）

春日街道のバイパスが大泉の東を通って、交通量は日ましにふえている。この道は、関ヶ原天下分け目の戦の直後、今から約四百年も前の慶長六（一六〇一）年に着工して慶長一三（一六〇八）年ころできあがった。春日淡路守が工事にあたったので春日街道[注8]といわれるようになった。今の中央道や大型農道のように、直線道路であったので松本飯田間の軍用道路であったといわれ、また経済道路であったともいわれている。

春日街道ができる少し前文禄二（一五九三）年には、それまで天竜川段丘沿いにあった曲りくねった道（伊那街道）を、西の方へひきあげて新しい道にした。その道を更に四キロメートルから一キロメートルも西へひきあげたのだから、春日街道は大きな工事であった。その時新しく大泉が宿場になった。大泉宿の記録は乏しいが、宿あとを見ると、北端に一里塚跡や勝光寺があり、南端に諏訪神社がある。その間約七〇〇メートルの間に道をはさんで八間単位（一〇、四メートル）の地割りをした家がならんでいる。また春日街道の道幅は一間であったが、大泉に入ると二間幅となり、中心の約一八〇メートルは市場といい三間幅になっていて、計画された宿場のあとがうかがえる。

大泉宿市場風景

しかしこの道は当時大森林の真中を通り昼でも暗い程で、時々盗賊がでるので盗人街道（ぬすっと）といわれ、道順が悪いため慶安二（一六四九）年北殿へ移された。そこで北殿村も宿場を仰せつけられ、大泉北殿合宿となり、西側に大泉の問屋一人伝馬役六人の百姓が引越していった。誰が北殿へ下るか大問題だったとみえ、くじびきで七人をきめたようである。大泉から下った七人は道の西側に構え、北殿の問屋と伝馬役七人は東側に構えて、月の一五日ずつ交互に役を勤めた。その後いろいろとトラブルがあって大泉が一〇

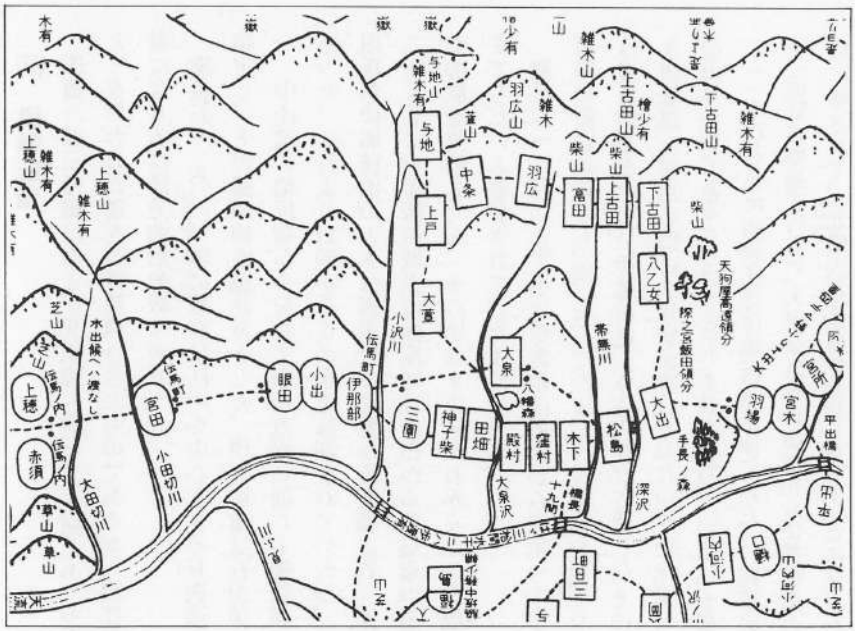
日、北殿が二〇日の役をつとめるようになり、明治初年まで続いて合宿をしていた。大泉から下った何人かは、昭和の現在でもお墓を大泉にもっている。

見渡すかぎりの美田の中をまっすぐに走る今の春日道は、自動車の快適な道路となっているが、その昔を語る街道のおもかげは日一日とうすれつつある。何より残念なことは春日街道という名と道形は確かに残っていたが、当時を偲ぶ古記録は、その昔大泉の何度かの大火によって焼失してしまったのか、今の所どこからも見出だすことができない。まさに幻の街道である。

注8 (1) 春日街道

此春日街道と云ふは文禄二年の頃京極修理太夫飯田在城の節街道改あり惣て西の山方へ村を上げ大道を附替る也此邊は古来より山手の方大道と見へて羽場の古城大出の古城松島の古城木下の古城殿村の古城共に不残西手にて築地等今以少は残れり慶長年中小笠原兵部太夫秀政代貳丁斗りも西へ曳上大出より伊那部迄の道作り替此時奉行春日淡路也依之春日海道と云と見へたり既に木下も此節右の海道へ町を可曳上積り用水井戸堀候場所今以有之水一切出不申候依之今の海道へ又候返り候に付松島より大泉へ上道傳馬役勤候故殿村へ曳下けたりと云

（伊那温知集）



脇坂絵図（上伊那誌）

注8(2) 春日道

文禄二年始開」此、有司春日淡路監」之、因為」名也。慶安二年移「駅路千東」、春日道廃。

（伊那志略）

伊那部の西に、春日街道といふあり、伊那部も古は今の処より西にありといふ、これ大泉村にいたる、古は大泉村を駅とす、慶安二年に街道を東へ移して、大泉村より農民六七軒殿村へ移り、それよりして殿村を駅次とすと、さらば伊那部の今の処へ移りたるも慶安二年の頃にや、（伊那古道記）

一里塚址

(三) 伊那街道

国道一五三号線はもと伊那街道（後に三州街道ともいわれた）といわれた道を改修整備されたものであるが、現在の姿になる前は随分曲折急坂が多かった。

慶長五（一六〇〇）年に幕府は江戸を中心とする五街道を指定し、その補助線を脇往還とした。伊那街道は五街道の一、中山道の塩尻宿から分れて飯田方面に通じる脇往還であった。これより以前からこの街道は開かれていたが、武田氏が伊那統治のときは軍事上の必要から整備され、文禄二（一五九三）年飯田城主京極高知は飯田から飯島迄の道路や宿駅を整備したが、その頃はすでにそれから北の方塩尻までもだいぶ整備されていたようである。

慶長六（一六〇一）年小笠原秀政は飯田から松本への軍用道路の新設に着手し、同一三（一六〇八）年に竣工したが、これは春日街道といわれ、伊那街道よりは西の方を通った。そのとき伊那部と松島の間に大泉宿が設けられたのである。然しこの道は不便であるということで、それから約四〇年たった慶安二（一六四九）年に脇坂氏は伊那街道全体にわたり、路線の変更、宿駅の整備を行ない、大泉宿は春日街道から伊那街道の北殿に移されて、[注9]北殿大泉合宿が設けられることになった。

明和坂

以来中山道は公家衆や大名の往来が頻繁なのに、伊那街道筋には飯田藩があるだけで、この領主も参勤交代には伊那部から高遠へ行くので、このあたりは大名や公用の大がかりの通行はめったになかった。そのかわり、一般旅行者の通行やいわゆる中馬の往来が頻繁であった。

中馬は農民が自家生産の農産物や薪を付けて売りに行き帰りに日常の必需品を買い求めて来たり、農閑期に駄賃稼ぎを副業としたことに始まり次第に職業化した。この伊那街道筋はわが国でも最も中馬の発達したところで、南は飯田から名古屋三河方面まで、北は松本や甲州方面まで行き来した。

中馬の馬方を「馬追い」といった。菅笠をかぶり、丈の短い着物に股引ばき、手甲をつけ、脚絆をして胸当をかけ、寒くなるとまわし合羽を着て一人が三匹から四、五匹の馬を追いかけた。馬にはあぶをよけるためのくびかけ、さんどかけ、家の紋を大きく染めぬいた腹掛をつけ、胸繋ぎの大ぞね鈴をチャランチャランと鳴らしこの街道を往き来した。

荷物の付送りや継替、運賃、口銭などで宿駅の問屋と中馬仲間の間にしばしば争いがあったが、明和元(一七六四)年に中馬稼ぎの村や馬の数その他細かいとり決めができたがそのときの記録によって、定められた馬数の当村分をみると、久保塩ノ井合わせて五〇匹・北殿三一匹・南殿二六匹・田畑五一匹・神子柴四五匹・大泉一〇匹　計二一三匹とある。但し大泉は後に、一〇匹[注10]は誤りで五〇匹と訂正願いが出されている。(明和裁許書)。本村分だけでこれほど多数の馬が出たのであるから、街道ぞいの村々も合わせるとたいへんな数の馬が荷物をつけてこの街道を往き来していたのである。

明治五年宿駅制度が廃され、同六年に政府は河港道路修築規則を定め道路の等級を三等に分けて整備に当り、同九年には三等級の道路区分を、一等道路は国道、二等道路は県道、三等道路は里道と改め、伊那街道は二等道路となっ

た。明治一九年（明治一一年か）には長野県土木条例によって、此[注11]の街道は、東筑摩郡広丘村原新田より上下伊那を経て愛知県境に至る伊那街道と根羽街道を一本にして、このときからは仮定県道と呼ばれた。

大正八年にこの道路は長野から飯田まで長野飯田線と称する県道になったが普通[注12]は三州街道と呼ばれていた。

昭和二九年に二級国道一五三号線となり、昭和四〇年四月一日より一級二級の区別がなくなり、国道一五三号線となった。

鈴をヂャランヂャラン鳴らした中馬往来の道路から荷車や運送馬車、人力車の通る道路となり、自動車の往来激しい時代へと移り行くにつれて、曲折の多い所はできるだけ真っ直ぐにされて最短距離をもって町村を結び、急坂は削り取られたり埋め立てられたりして、可能な限り平坦にされ、風吹けば馬糞ほこりの立った道路はさらに舗装されて旧い道の面影は殆ど消えてしまった。

旧い道筋を辿ってみると次のようになる。

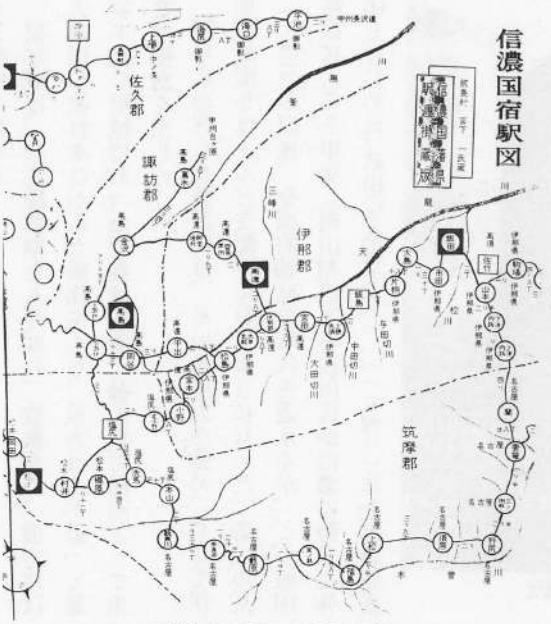
道標
（箕輪坂）

箕輪町木下南端国道一五三号線から五〇メートル程西へはいった所に冷い清水が豊かにこんこんと湧き出ている。清水の里といって傍らに句碑（これは田畑の句碑と同じときに建立された四句碑の一である）庚申塚がある。三州街道を通った人馬はこの清水の里でゆっくりのどを潤して休んだであろう。ここから箕輪坂を少し登った中途に仏像の刻まれた「右木曽路、左飯田道」とある道標がある。往古を偲んでこんな歌を詠んだ人がある「右は木曽左は飯田のみちしるべ往古の人等の足跡きこゆ」木曽への助郷人足、また米を運ぶ人馬、はるばると社寺を巡礼する人に、中馬稼ぎの人たちがこの道標を見、仏に手を合わせて旅の無事を祈り心の安らぎを覚えたのではなかろうか。

ここから段丘中腹を通って久保の地へはいる。はいったところに乗鞍坂があったといわれるが今は跡が判然としない。そこからやや南進し「大東」の東、段丘の中腹を進み昔の久保寺（現在坂上）の下から下り旧道へ出る。旧一五三号線に沿って塩ノ井部落にはいる。ほぼ旧道どおり南へ進むが、現在の状況になる前は狭く曲折があって現一五三号線に出、天湊屋の前を通って現国道と分れて筆塚の前に出る。この塚はもと、もう少し北にあり姿の美しい松と芭蕉の句

碑があって翁塚と呼ばれ、旅人はここで一休みして明和橋を渡り、北殿へはいり明和坂を上って「くすりや」の東側から「辰巳屋」のところで直角に曲り北殿の宿場に出た。ここに高札があった。このように直角に曲る道は、宿場や城下町には、侵入者を防ぐ防衛上の考慮から必ず作られた。ここが北殿宿への入口であった。そこから南して伊藤屋のところから赤心堂などの前を通って藤野屋の所で西南に向い村文化財エドヒガンザクラのある庚申塚のところへ出た。そこの「右八幡道」「左いせ道」の道標を見て、小学校グランド下の道を通って四十九を経て南殿へ出た。役場の前からポンプ小屋の前を通り、御坂のところで東に下り、シンズラ清水でのどをうるおし、今の旧道橋（すすき橋）を渡って田畑へ出た。庚申塚の前を通りさらに坂道を上って北割部落を通り、芭蕉の句碑のあるところから西に折れて庚申塚の前を進み、馬頭観音碑の所へ出た。そこから西に進み道祖神のある所の道標「右ぜんこうじ道」「左やま道」を見て南へ曲った。少し南に進んで半沢の分流につき当り、その半沢に沿って東南に向い、現在の一五三号線よりずっと東を通って神子柴部落へ出た。神子柴のポンプ小屋のあるところから南に向い、今の旧道に曲らずそのまま南へ通って御園部落へ出た。

注9　「家帳出入裁許取替証文」「大泉区有文書」
注10　明和三年十一月「一札之事」「大泉中宿文書」
注11　長野県政史第一巻
注12　昭和三五年国土地理院発行五万分の一地図



信濃国宿駅図（飯島村誌）

三　田中城址

田中城址は、久保・塩ノ井の東方、天流川西岸の水田地帯にあり、行政区域の上では箕輪町三日町地籍に位置している。

太平洋戦争後の土地改良事業により区画整理がなされ、城址は僅かに土塁をとどめているにすぎない。

また、この辺一帯は、区画整理のおり、弥生遺跡が発見・発掘され「箕輪遺跡」と命名され、私たちの村の歴史とも関係の深いところである。

さて、田中城の成立・存亡については、中世以降の箕輪郷の動きを概略述べねばならない。

今からおよそ八〇〇年前の鎌倉時代に、清和源氏の末流井[注13]上氏が箕輪の福与に居館を構えてこの地を支配していた。やがて鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇の親政（建武の中興）が成立したがまもなく足利尊氏によって京都室町に幕府が開かれた。この室町時代の初期には、朝廷が二つに分裂して抗争を続ける南北朝時代が展開するが、このころ、足利尊氏に従って功績のあった相模国（現神奈川県）藤沢の住人、藤沢行親がその功績により箕輪六郷を与えられ、延元元（一三三六）年に井上氏の旧館跡に城を築いて居住した。これが箕輪福与城のはじまりである。

福与城は、一名鎌倉城とも呼ばれ、位置高く、前方には天竜川の流れをひかえた断崖（がい）をもち、後方は山が迫って難攻不落の堅城であった。築城以来、藤沢氏の拠点として重要な役割を果した。

福与に居住した藤沢氏は、その後勢力を強め、やがて伊那の北部をほとんど支配下におくようになった。応仁の乱（一四六七）以後、全国的戦乱の時代を迎えるが、この戦国時代に入ると甲斐（現山梨県）の武田氏が信濃に勢力を伸張しはじめた。武田信玄は天文一一（一五四二）年七月諏訪氏

田中城址

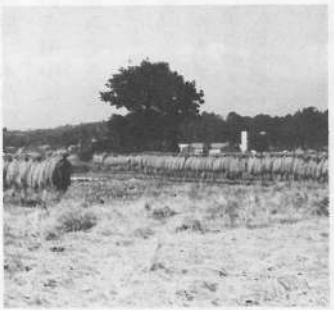
を滅ぼすと、諏訪から南下をはじめた。天文一三（一五四四）年秋には有賀峠を越えて箕輪に侵入し、羽場や松島あたりの民家を焼き払っている。翌、天文一四（一五四五）年四月、武田軍は杖突峠から高遠に入り、高遠から箕輪に侵入した。当時、福与城には藤沢次郎頼親が城主で箕輪を支配していた。頼親は伊那の諸士、およそ一五〇〇人を結集して福与城に籠（こも）りよく防戦したため、武田軍は苦戦をしいられ駿河（現静岡県）の今川義元の助力を得るに至った。そのため頼親も同年六月信玄と和睦し、福与城を明け渡して弟権次郎を武田に人質として出した。この戦いでは、強弓をもって知られた大泉上総[注14]が頼親に従ってめざましい活躍をしている。

藤原頼親はこの戦いの後、武田氏に属したが、武田氏が深志（松本）の小笠原長時を攻めた時、長時の妹を妻としていたため、武田氏から離れ小笠原氏とともに行動するようになった。やがて、武田氏に追われた小笠原長時とともに越後（現新潟県）から京に上り、遠江（現静岡県西部）・伊勢（現三重県）などを放浪した後、時の権力者三好長慶のもとに身を寄せた。（南殿にある三好長慶塚はこの恩に報いたいものである）三好氏はのち家臣である松永久秀に滅ぼされた。

そのため、頼親は郷里箕輪に戻り、再び武田氏に属して福与城の西南の天竜川の氾濫原に新しい築城法からなる平城（ひらじろ）を築いた。これが田中城である。

田中城は、古記録によると東西三町、南北三町、東は天竜川をのぞみ、三方沼田に囲まれた堅固な平城であったという。（伊那谷には平城は少ない）

天正一〇（一五八二）年武田氏は織田信長によって滅ぼされ、箕輪を含め上下伊那は織田氏の家臣、毛利秀頼が領有したが、同年六月、本能寺の変が起こり信長が死ぬと、毛利氏は伊那を放置して京に戻ってしまった。空白となった伊那の各地には旧支配者たちがそれぞれの旧領を復しはじめた。藤沢頼親も、この虚に乗じて箕輪の旧領を復し、相



田中城址遠望

模の北条氏と結んで田中城を拠点として活動を再開した。こうした情勢下で同様に高遠を手に入れた保科正直は、三河（現愛知県東部）から信濃に侵入した徳川家康と通じた下伊那の諸士とともに箕輪の藤沢氏を急襲した。天正一〇（一五八二）年七月のことである。藤沢頼親は甥（おい）である箕輪左衛門[注15]重時らと田中城に籠り、七月一六日から三日三夜、激しく防戦したが、伊那の諸士が松本の深志城に多く出掛けた留守の出来事で抗しきれず、城兵多数が戦死したため、最後は城に火をかけ自決したという。箕輪の雄藤沢氏も田中城落城とともに二百年の歴史を閉じたのである。

田中城については、其の後、保科氏が領し、天正一一（一五八三）年八月木曽義昌が木曽から侵入してしばらく滞在したこともあったが、慶長五（一六〇〇）年、関ケ原の戦いの後、飯田城主小笠原秀政の治下に入り、同六（一六〇一）年には田中城を修理して陣屋とした。やがて慶長一七（一六一二）年の天竜川の大洪水にあい、この陣屋は廃されて木下に移された。また藤沢氏の碑寺城安寺（今の嶺頭院）も木下に移り、それまで田中城の附近にあったという三日町も、この大洪水後、天竜川の東岸の現在地に移ったという。

かつては、外堀、木戸口、城安寺、古町、等々の地名が残っていたという田中の古城址は、今は野中に土塁の一部を淋しく残すのみである。

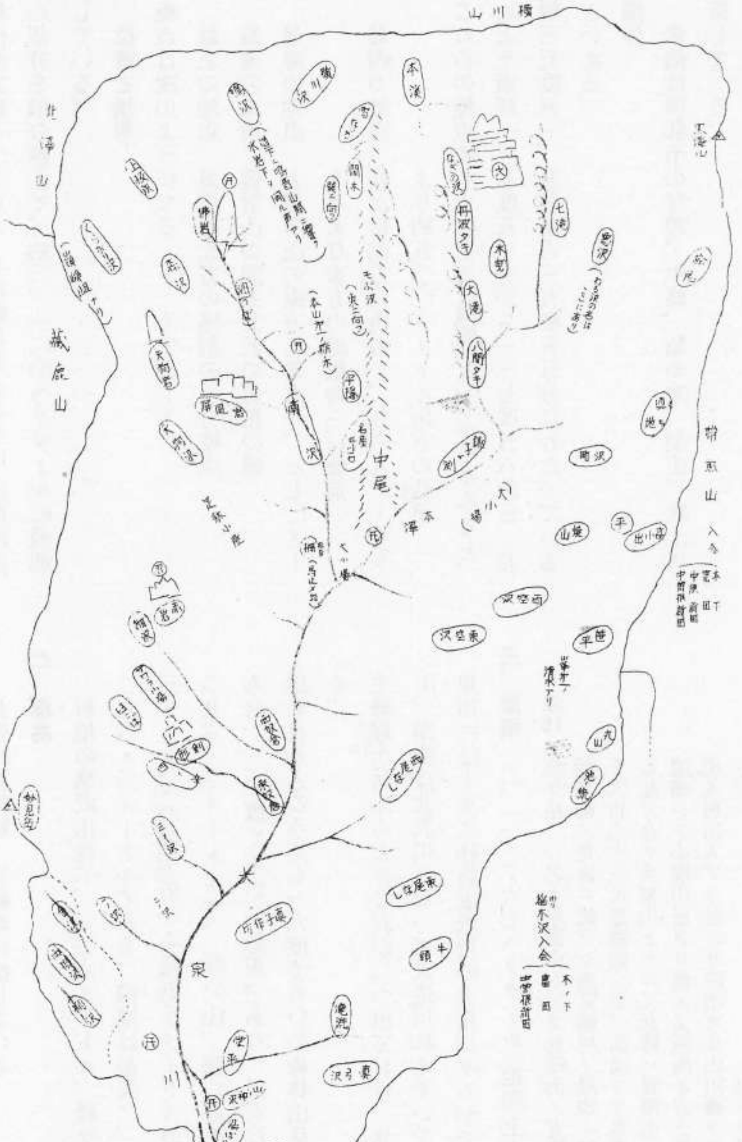
注13 井上氏の祖は源頼信の三男井上掃部助頼季という。

注14 「在大泉、伝日原氏、子孫今為邑長、温知集以大泉上総・倉田将監・木下総蔵・藤沢織部呼日四天王・木下総蔵木下邑人而・並不詳也。」（伊那志略）

注15 箕輪左衛門は頼親の娘が三河足助の城主鱸（すずき）氏に嫁いで生んだ子供で、頼親の甥にあたる。鱸氏はその後、武田氏に滅ぼされ一族は辰野の川島の奥に住みついたという。

〈参考文献〉
。信濃史科叢書第三巻「伊那志略」
。〃　第四巻「信州伊奈郡郷村鑑」
。〃　第八巻「小平物語」
「高遠記集成」
「箕輪記」
「保科御事歴」
「二木家記」
。伊那の古城　篠田徳登著
。上伊那郡町村誌
。伊那温知集

四　南箕輪村飛地



大泉所絵図（入会山分割史）

本村は西方約一〇キロメートル離れたところに、伊那市西箕輪の部分を飛び越えて、約二、一〇〇ヘクタールの飛地を有している。

一、位置と境界

。極点は次のようになる

最北の地点　黒沢山北方の尾根の三分岐点

最南の地点　御射山の南方北沢の尾根の麓

最東の地点　大泉所山の東方三角点一、三七〇メートルより東方の尾根の三分岐点

最西の地点　経ケ岳南方三角点一、九六九メートルより約五〇〇メートル南方の凸部

これらの極点をもとにして、飛地のひろがりをみると、およそ東経一三七度五一分から一三七度五六分と、北緯三五度五一、五分から三五度五五分にわたっているといえる。

。境界

東側は伊那市の与地、中條、梨の木、羽広、吹上に接している。

西側は楢川村に接している。

南側は伊那市の南沢山に接している。

北側は辰野町、箕輪町に接している。

二、標高

村境の黒沢山は二、一二六メートル、経ケ岳は二、二九六・三メートルである。飛地は最高二、二九六・三メートルの経ケ岳から最低千メートルの比高一、二九六・三メートルで、高い山、深い谷のあるところは、二二度ぐらいの急坂であり、最もなだらかと思われるところでも一六度ぐらいの森林山岳地帯である。

主峰経ケ岳[注16]から大きな沢が二つ出ており、北側は大泉川、南側は北沢川となって天竜川にそそいでおり、大泉川には上流に砂防潅漑用の大泉川ダムができている。

三、面積

二、一二二・六七ヘクタール（地図上より算定）

注16　経ケ岳　一名大泉處山ト云フ北澤山ノ支峰ニシテ西箕輪ノ背後ニ屹立シ南箕輪村ノ飛地ニ属ス高六千六百六十三尺登路約二里、前面ヨリ本澤北澤並ヒ起リ合テ大泉川トナル又北峰ハ霧澤山ノ官林ニ連續シテ小横川是ヨリ發ス又西南ニ方テ藏鹿及矢南入射山入アリ是ヨリ流出スル山川纒フテ北澤川ニ合ス　（南信伊那史料）

五　大泉川

上流

中流

下流

此の川は源を大泉所山に発して東に流れて天竜川に入る。源を少し下った吹上の下あたりで、急に伏流[注17]して、石ころだけの川原で、ただ両岸に樹木が見えるだけである。更に下って南殿、田畑の村にはいるころ再び水がでてくる。このために南箕輪の民話には神様までもちだした面白い伏流の話が残っている。

大雨が降ったり梅雨の候になると濁水がごうごうと流れ

て、昔は災害も多くたびたび御普請[注18]にしてもらって、ようやく安全を保ってきた。昭和の初ごろまでは、この大洪水のあとには珍重な蠟[注19]石が流れてきた。今は大泉所にダムができて、洪水の害もなくなり岩石の流れる音も少くなった。ローム層が表にでてきて伏流も少なくなった。

注17 大泉川原平生ハ水一切無御座候満水之節ハ出水仕夥敷御田地流損仕候右悪水之切込〆切長五拾間余御普清ニ仕候

享保五年子十月

（大泉村明細帳―大泉中西文書）

注18 (1)一川除之儀天竜川大泉川筋通御座候普請人足道具之儀杭そだ志やかご御公儀様ゟ被遊被下候尤人足扶持米先御料所之筋ハ一日一人ニ付米五合ツツ被下候板倉頼母様御代ニは米弐合五勺ツツ被下候

(2)大泉川原平生ハ水一切無御座候　満水之節ハ出水仕夥敷御田地流損仕候右悪水之切込〆切長五拾間余　御普請ニ仕候

（宝暦十年大泉村差出帳―中西文書）

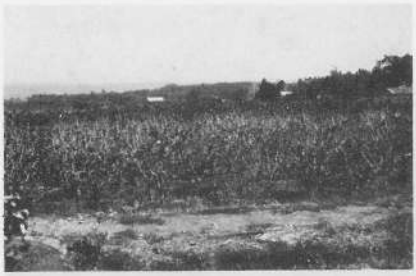
注19 大泉川

蠟石、生干大泉渓、為名品然甚少、土人唯待洪水後、僅拾之耳

（伊那志略）

六　西天竜水路

西天竜幹線水路は、諏訪湖から流れ出す天竜川の水を、岡谷市川岸から揚水して、伊那市小沢川に至るまでの、約二六キロメートルにおよぶ灌漑用水路である。この用水路の完成によって、天竜川西側の台地上の地域一、一八〇ヘクタールが美田化された。南箕輪村は関係四市町村の中で最もその恩恵を被っている。それを数的に示すと、南箕輪村の西天竜の田の面積は四六一ヘクタールで、全西天面積の三九、〇七%を占めている。



開田前の桑畑（昭和初年）

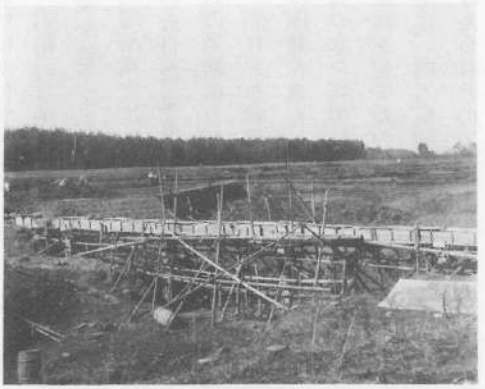
開田前の大芝原（昭和初年）

西天竜開発の経過をたどってみると概ね次のとおりである。

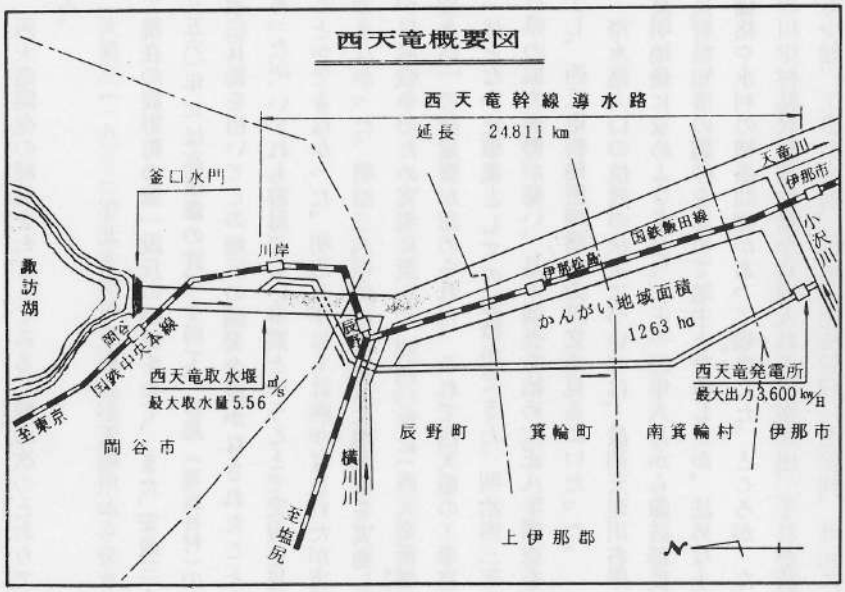
天保三(一八三二)年北大出村の有志が天竜川から分水して現在の辰野町の第一段丘の開田を企て、また、安政三(一八五六)年には高遠藩の許可を得て、杉島(現長谷村)の伊東伝兵衛を招いてこの地区の開発企画がなされたこともあったが、いずれも容易でない事業ということで実現を見ることができなかった。明治九年にも計画がなされたが実現できなかった。明治三六年には郡費で土地調査を実施したが日露戦争のため実現に至らず、同四〇年に「西天竜新堰新設水路」の測量費が認められた。これで西天竜の工事官民一体となった事業としての態勢ができた。明治四三年には県の協力態勢が整い、基本調査を始め大正八年調査を完了し、西天竜耕地整理組合の設立を見るにいたった。

用水路入口の位置の決定については、最初天竜川右岸の夏明地籍に求めようとした。大正一〇年六月から諏訪郡長や長野県知事の調停を求めて地主と交渉したが、法外な土地価格や水利の補償問題があって頓挫した。ところが、左岸の川岸村鮎沢駒沢地籍から取入れる代案が出、それが費用も少額、工事が容易、将来の維持管理にも便利、地元にも有利ということで、用地買収が成立した。

大正一一年一一月第一期工事(取入口から宮所サイフォン出口まで)起工し、大正一四年六月竣工している。一、二期工事は西天竜耕地整理組会事業であったが、三、四期工事は、県営工事として施行されている。南箕輪地籍の工事は、第四期工事であって、昭和三年二月起工、同年一〇月竣工した。区間一里一五町五〇間(約五六五〇メートル)を飛島土木が、工事費二四九、四六三円五一銭で請負っている。



工事中の水路橋(昭和初年)



その後何度か補強工事を行ない、第一期工事の大改修を施工し、昭和三五年西天竜の非灌漑期の水を活用した県営発電事業が着工され、翌三六年一二月に発電が開始された。西天竜沿革史に「幾多の経緯を経て開田してより昭和三四年の今日に至る三〇有余年、漸く熟田となり実に年間四万石の米産あり。従前の荒野を穀倉と変革せしめたのである。然れども幹線水路の老朽著しく、維持管理の面より非常に困難を来たし、早期改修の必要に迫られた。そこで非灌漑期の水を利用して発電し、売電と同時に幹線改修を行なう計画を樹てたのである。」と目的を書いている。なお、発電事業は、西天竜開削当時からの宿願であって、それが漸くかなえられたのである。そのため、全線にわたっての大改修と幹線の嵩上げ工事が施行された。なお、昭和五四年現在上流から大改修が行なわれている。

西天竜用水路が完成することによって、南箕輪村の農業は畑作養蚕から稲作中心に大きく変革された。灌漑、発電のため、幹線は毎秒六・八六トンの水が流れている。

七　碑

(一)　鐘水豊物の碑

箕輪町木下地籍にあるが南箕輪村境に隣接している。

鐘水豊物の碑

碑面　鐘水豊物

枢密顧問官正三位勲一等　伊沢多喜男題額

西天竜耕地整理組合地区一帯ノ地ハ長野県上伊那郡伊那富村中箕輪村南箕輪村西箕輪村並ニ伊那町ニ跨リ南北四里ニ亙ル海抜二千四五百尺ノ台地ニシテ地形概ネ平坦ナルモ地勢上殆ド水利ノ便ヲ欠キ為ニ広漠タル林野荒廃セル桑園其ノ大半ヲ占メ食糧自給ノ策立タザルコト既ニ久シ是ヲ以テ藩政時代以来先覚ノ士ガ諏訪湖ヨリ疏水シテ水田ヲ開拓セント欲シタルコト一再ニ止マラザリシモ経始容易ナラザルヲ以テ実現ヲ見ズシテ空シク数十年ヲ経タリ然ルニ時代ノ要求ハ其ノ実施ヲ促スコト年ト共ニ切ナルモノアリ明治三十九年十一月関係町村有志相謀リテ西天竜用水路開鑿期成同盟会ヲ結成スルヤ実現ノ機運漸ク熟シ遂ニ同四十三年本県ハ天竜疏水工事測量ノ実施ヲ計画シ偶大正八年四月開墾助成法ノ発布ヲ機トシ県ノ測量設計亦完了シ同年十一月二十七日西天竜耕地整理組合ノ設立認可トナル次テ同年十二月県会ハ用水工事費ニ対スル県費補助ノ議ヲ決ス是ニ於テ多年ノ懸案タル幹線導水路ハ大正十一年十一月工ヲ起シ昭和三年十月ヲ以テ竣工ス延長六里二十四町九分諏訪郡川岸村鮎沢ノ天竜川取入口ヨリ起リ滔々二百個ノ水ヲ通シテ伊那小沢川放水路ニ至ル而シテ本水路工事ノ進捗ニ伴ヒ開田ニ着手シタルハ昭和三年二月ニシテ本県臨時出張所ノ設計監督ノ下ニ同十四年四月其ノ施行ヲ完成ス開田一千百九十一町歩開畑一百二町歩灌漑水路実ニ七十三里余内混凝土専用水路二十一里九町用水ノ配給円滑ヲ計リテ特設セル分水槽一百五個築造セル農耕用道路ハ地区ノ内外ヲ合セテ延長六十七里二十町ニ達ス斯クテ事業費総額六百八十万円ニ上リ開墾助成金トシテ交附セラレタルハ三百八十余万円本県補助金ハ一百二十五万余円ヲ算ス回顧スレバ大正八年組合設立以来年ヲ閲スルコト二十有六其ノ間資金ノ借入地区外土地ノ買収諏訪湖水位ニ関スル紛争等幾多ノ難関ニ逢着セルノミナラズ或ハ米価暴落ノ為メ組合財政ノ危機ヲ招キ或ハ繭価昂騰ニ因リテ開田熱意ノ弛緩ヲ来セルガ如キ数次ノ難局ニ際会セシモ関係官庁ノ指導援助ト組合員ノ協和励精組合当事者ノ刻苦経営トハ克ク万難ヲ

排シテ竟ニ此ノ大事業ヲ完成ス洵ニ聖代ノ余沢ト謂フベシ而シテ今ヤ収穫穣々年産三万余石以テ大東亜戦下重要ナル食糧問題ノ解決ニ寄与シ得ルハ真ニ慶賀ニ堪エザル所ナリ昭和十六年六月畏クモ侍従ノ御差遣ヲ仰ギ具ニ組合事業ノ巡覧ヲ忝ウス本組合ノ光栄何モノカ之ニ過ギン然レドモ創業トトモニ守成ノ難アリ水利暢達ノ業其ノ責亦後人ニアリ而シテ其ノ恵沢ヲ被ムル者亦後人ニアリ後人其レ勤メテ而シテ勉メザルベケンヤ因リテ其ノ概要ヲ記スト云フ

昭和十九年十月

仏領印度支那派遣全権大使顧問　正三位勲三等　木下　信撰

東京高等師範学校講師　田代其次書

碑　陰　役員名を連記してあるが略す

嵩職　岡谷　林　一衛

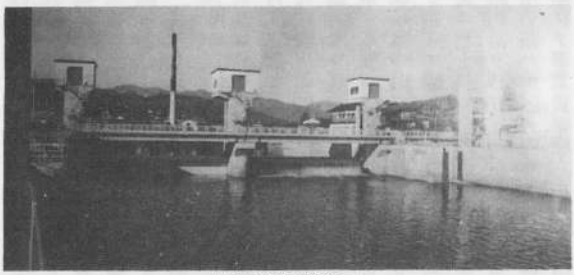
土工　木下　窪田和三郎

石工　宮木　春日　森治

碑の上部、題額に、高遠出身の伊沢多喜男（一八六九―一九四九）の筆になる鐘水豊物（水をあつめ物をゆたかにす）とある。碑文は箕輪町木下出身の木下信の撰文で、東京高等師範学校の書道講師田代其次の書になるものである。

碑文を見ると、水のない台地上に苦心して水を引いて美田とした経緯が細かに書かれている。また、西天耕地整理の概要が適切に記され、開田開畑面積、灌漑水路、分水槽、農道等の数量や総事業費などが明記されている。そして、諏訪湖水位に関する紛争や米価の暴落（昭和五～六年）繭価高騰など開田意欲を失なわせるような難関も述べられている。撰文は昭和一九年一〇月になされたが、第二次大戦末のことでもあり、碑の建立されたのは、昭和二五年一二月のことである。

西天竜旧頭首口



西天竜新頭首口

碑の石材は仙台市外の稲井村から求めたものである。長さ約八、五メートル、幅約二、四メートル、厚さ約〇、六メートル、価格七千円という巨大なものである。昭和一六年に購入したので、戦時方式の輸送にかわったため、伊沢多喜男の蔭の力によって運ぶことができたということである。台石は、大泉所にあった自然石で、長さ約四メートル、幅一、八メートルのものである。

(二) 造林記念碑

南箕輪村北沢にある。

造林記念碑

碑面

蔵鹿山
御射山　造林記念碑

南箕輪村長　清水国人書

碑陰

分割　植林記念碑

蔵鹿山と御射山は古来南箕輪村伊那市両村市の関係部落の入会山であつて営農の採草地として利用されてきた。蔵鹿山は大正五年上伊那郡長の斡旋で分割の協定をしたが実行されず爾来四十余年に亘り紛争が続いた。その間歴代村長分割委員の努力と村民の熱意が傾けられ長野県知事代理木下林務部長の調停で昭和三十二年十二月円満に分割することができた。本村関係部落の取得地は一一八町三反、御射山はこれより先昭和三十二年四月分割して本村関係部落の取得は七八町六反五畝である。ここにおいて造林撫育のため運営委員会を設け南箕輪村に植林を委託したところ村は三十四年以降莫大の経費を投じ全村民一丸となってこれに協力し昭和三十九年みごとに植林を完了したので記念にこの碑を建る

植林年度別反別

年度	蔵鹿山	御射山
昭和三十五年度	四十二町五反二畝	二十一町七反三畝
昭和三十六年度	二十九町八反	十八町一反四畝
昭和三十七年度	十町歩	十町歩
昭和三十八年度	二十町歩	
昭和三十九年度	十三町九反三畝	二十五町四反歩

昭和四十年七月十五日建之

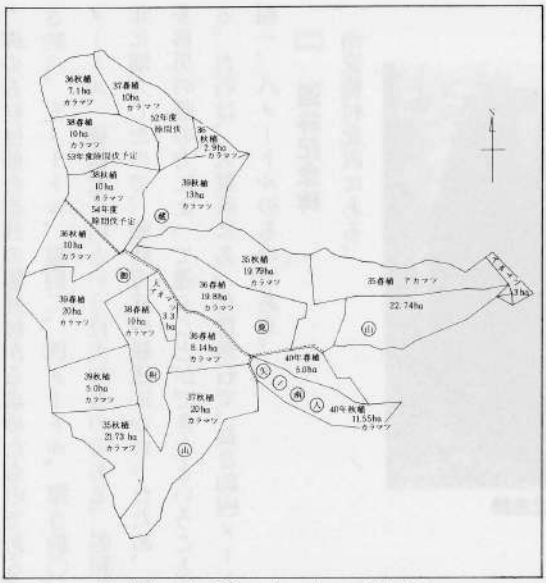
蔵鹿山、御射山運営委員会

山崎　正義　伊久間今次　加藤　善高　中村隆太郎
藤沢　久勝　唐沢　重治　清水　重成　秋山　治郎

清水　宗雄

前　委　員

入戸　源一　原　義徳　有賀　敬三　高木　藤吾
清水　清人　原　勝治郎　倉田　信章　原今朝五郎
征矢　嘉夫　原　孝也　唐沢　勇　木島　新一
宮坂　智　有賀　文武　宮下　泰之　清水　英一
役場林務課職員　唐沢　巻一　清水　良三　原　泰太郎
有賀　彰司　堀　安雄　有賀　栄　征矢　清人　穂高　千秋
撰文　小池修兵　石工　大萱　清水石材店



蔵鹿山・御射山・矢の南入造林略図

(三) 御射山分割記念碑

西箕輪字御射山にある。

御射山分割記念碑

碑面

昭和三十二年四月十八日

御射山分割記念

長野県知事　林　虎雄書

碑陰　一、所在地　伊那市大字西箕輪字御射山
一、台帳面積　四百八十三町九反一畝
一、実測面積　二百七十二町一反一畝
一、分割面積
西箕輪　百六十九町八反七畝
南箕輪　七十八町六反五畝
伊　那　二十三町五反九畝

西箕輪委員長　鈴木　三郎
分割委員　原　達夫　伊藤　嘉雄　伊藤　恒一

白鳥伊那蔵　原　広志　原　力三
重盛　国雄　原　貞雄　清水今朝義
南箕輪委員長　清水　国人
分割委員　堀　安雄　馬場　武男　原今朝五郎
原　孝也　有賀　一衛　征矢　嘉義
清水　清人　有賀　文武　加藤　善高
小林　時春　有賀　敬三　太田　庄衛
伊那　委員長　田畑五郎司
分割委員　福沢　武雄　柴　三郎　唐沢　好一
御子柴茂利
上伊那地方地務所　林務課長　井口　民治幹旋

(四) 清寧の碑

大泉所のダムの上にある。

清寧の碑

碑面
清寧　長野県知事　西沢　権一郎
碑陰
大泉川砂防ダム施行記念
昭和四十八年十月吉日
南箕輪村
箕輪町
伊那市

(五) 村上明彦先生胸像

中の原上農寮内光栄の丘にある

碑面

村上明彦先生像　レリーフ

碑陰

うるわしいこの高原を拓いて学舎を創り
われらに土の心を培い　農に生きる喜びを育てた
広大な遺徳を偲び　子弟つどいてこれを建てる
昭和四十年八月

この碑は上伊那農業学校の同窓生で村上明彦（一八八九―一九六五）先生の教えを受けた有志がその遺徳をしのんで建立したものである。

レリーフは瀬戸団治の作になり、「村上明彦先生像」は伊沢多喜男の筆跡である。碑陰の文章は当時の農場主任小林茂雄の案文を、胸像建設委員らが推考を加え、定時制主事の平沢弥一の筆によったものである。

村上先生は辰野町北大出の出身で、東京帝大卒業後教員となり、昭和七年上伊那農業学校の校長となった。昭和二年に二十世紀梨の栽培を卒業生にすゝめ、伊那谷園芸発展の基礎を作った。一〇年からは塾風教育を始め、一一年には中の原に上農寮を新設して、五年生を一年間宿泊させて農業の総合教育を行ない、近代農業経営のための人材育成に努めた。また、農林専門学校（現信州大学農学部）の創設に奔走し、二〇年三月設立されると、同校の校長を兼務した。二一年八月退職、その後は辰野町長などもしたが、四〇年七七才で病歿した。その年上伊那農業学校同窓生有志によってこの頌徳碑が建立された。

村上明彦先生胸像

仝右（碑陰）

参考神仏信仰

一　山の神

山を領する神として、大山祇神が山の神と信仰される。また、この神とは別に民間に信ぜられているのは、それぞれの部落に近い山に住して、春は里に下って田の神となり、秋の収穫が終るとともに山に帰るものといわれている。また、木地屋、炭焼など山かせぎする人々の信ずるのは、田の神とは関係なく、山の口に社を勧請してまつったり、山中の老木を選んで山の神をまつることが行なわれたりして、神名も、まつり方も一定していない。

久保の山の神は神明宮に合祀されているが、氏神の南側の道を大泉所山に通ずる道路が、西天竜水田地帯の中途で大泉方面へ分岐するあたりの地籍を山の神と言い伝えられているところから考えると、社があったためか、その地点を山の神そのものと考えられたのかとも考えられる。

山の神の祭日（旧暦十月十日）には各家で餅を搗き、わらのツトにこの餅を包んで神に供え、誰とはなしに前に供えられた餅と交換し合って持ち帰り、御符としてありがたがって食べたという。

二　水神

水は生命維持に不可欠なものとして泉や流れ川は大切にされてきた。特に農作物特に稲の豊穣をもたらすものであるが、同時に水害を引き起こす恐ろしいものであるから、これを支配する水神は多く泉や川端にまつられ、また、井戸、横井の端にもまつられてきた。

また安産求児の祈願を水神にする信仰も各地にあり、疫病をしずめるにも水神の祭が必要とされた。

祇園、津島社に代表される天王祭は著明なるものである。

三　庚申信仰

庚申信仰は、民間信仰の一種であって、六〇日に一度ずつ来る庚申の夜は三尸虫が体内から抜け出して、天帝に人間の罪状を告げにゆき、その寿命を縮めるという。だから、その夜は寝てはならない。一晩中起きていて体から三尸虫が抜け出すのを防ぐ（庚申待）という、中国の道教の思想を取り入れた信仰で、日本では平安時代貴族の間に始まり、室町時代から次第に一般庶民の間にも広まった。江戸時代になり供養塔を建てる風習が盛んになった。

しかし、庚申信仰には本尊が決まっておらず、初期には阿弥陀如来、大日如来、地蔵菩薩等がそれぞれ供養する人の立場によって主仏とされて庚申塔に彫られることが多かった。江戸時代に入り、元禄（一六八八～一七〇四）ころから次第に青面金剛を庚申の本尊と考えるようになり、それが一般化したようである。

青面金剛は、顔の色が青く、六本の腕を持っていて普通は怒りの相を持った姿に表現されている。この仏は、病魔、病鬼を払い除く大きな力を持っていると信じられ、更に、福の神、農耕の神、厄除の神としてより一般的な現世利益の祈りを込めて信仰されるようになっている。

庚申塔には、日月、猿、鶏等が彫り込まれている場合が多いが、日月は日待、月待の信仰と庚申信仰が結びついたものであり、猿については、猿を使いとする山王権現が庚申の主神とされた時期があることと、庚申の申を猿と結びつけたものといわれる。鶏については、鶏が昔から時報、占等で神聖視されたほか、庚申待が鶏の鳴くまでということで結びつきが生まれたといわれている。

はじめは一猿（久保のはこれ）二猿（北殿のはこれ）を伴っていたが、やがて三猿を伴うようになった。「善きことは見ても聞

きても悪しきこと見ざる聞かざる言わざるぞよき」という人生訓と関係があり、人の悪は見ざるで目をふさぎ、人の非は聞かざるで耳をふさぎ、一人の過ちは言わざるで口をふさぐ姿が彫られるようになった。田畑、大泉のはこの三猿が揃っている。

青面金剛は田畑ののように、アマノジャクという悪鬼を足の下に踏みつけたものや、大蛇や赤蛇、竜頭、さらにはされこうべを身につけたり、ショケラという女の赤はだかの子の髪をひっつかんだりして見るからに恐ろしく偉大な力を持った神に表現されているものもある。

庚申信仰は、近くの数人または十数人で講を作り、庚申の夜に頭屋の家に集まって、飲食を共にしながら、人の悪口はしないで、百姓の話や、世間話をして、夜明けを待つことが行なわれた。さらにこの仲間は、隣保互助の結びつきが強く、吉凶につけて互いに助け合っている。

四　道祖神

道祖神は塞の神、幸の神、歳の神また、道陸神などと呼ばれ、悪い病気などが村にはいるのを防いだり、旅人を守る神というところから、村の境や辻にまつられるのが普通である。また、猿田彦命を道祖神として祀るところもある。（久保「中村屋」の南西隅道角にあるのは道祖神と考えられる）

また縁結びの神、子授けの神、いぼ、ほうそう、おこりなどの難病をなおしたり、厄年の厄落しの神でもあり庶民の願いをかなえてくれる神でもあった。それで村中で建てるのが一般だが、中には個人で建てたものもある。

道祖神の祭りはドンドヤキ、三九郎、さぎちようなど土地によっていろいろにいうが、子どもたちが中心になって一月の一四日か一六日に正月の門松やしめ飾りを集めてうず高く積み上げ、これに火をつけ、この火で餅を焼いて食えば虫歯にならぬとかカゼを引かぬとか、書き初めを燃して高く上がると習字が上達するとかいわれた。

厄年には年の数だけ銭や大根を切り、日常使っていた茶碗に入れていってこれを打ちつけ、後をかえり見ることなく家に帰る風習があった。

五　観音信仰（付馬頭観音）

観音というのは観世音菩薩の略称である。経典によると苦難に会って救いを求める者や、願いごとのある者が一心に念ずると、その者を救うに最もよい姿に身を変えて現われ、救いを垂れたり、福徳を授けてくれるという仏である

経典には、「さまざまの苦難や、人間の願いのうち三十三の場合を挙げ、その代表とし、これらを救済したり福徳を授ける」と説かれている。そこで三十三観音の信仰が普及したのである。

日本では七世紀ごろ仏教がはいると同時に観音信仰は民衆の間にも普及した。

馬頭観音

馬頭観音は、馬大士とも、馬頭明王とも称する。頭に馬を戴くのは、転輪聖王の宝馬が世界を縦横無尽に駆けめぐって一切の魔障をうち破って、大悲の本願を果す偉大な力を表わすことを象徴するためである。また、馬が草を食むように人間におそいくる重い障害を食い尽す力の象徴でもある。特に畜生道の苦を救う観音とされている。

そういう強い仏がいつのまにか馬の守護仏と考えられるように

なり、馬の死を弔う為に、この像を建てて、愛馬の供養とするようになった。道端や堂寺院に夥しい数の馬頭観音像のあるのは、この村も以前、農耕や運搬にたくさんの馬が飼われていたことを物語るものであり、馬を家族同様にいたわりいつくしんだ証拠ともなるものである。初めは石像であったものが、後には文字碑となって簡略化されたのである。

六　地蔵信仰

地蔵信仰はわが国では平安後期から貴族の間に盛んになり、中世になると一般民衆の間に深くなった。地蔵菩薩は釈迦入滅後弥勒菩薩が出世する迄の間、無仏の世界に住して大慈悲をもって六道の衆生の苦しみを抜いてくれる菩薩として信仰されている。特に現実界と、冥界との境に立って、冥界にいって地獄の苦しみに会うことから救ってくれるとされている。劣弱者を救済すると信じられた地蔵尊は子供を特に護り救うとされ、子安地蔵の信仰が普及した。殊に夭折した子供が賽の河原で青鬼赤鬼に苛められる時、地蔵菩薩の袖にすがって助けを求める話などから、小児が変死すると地蔵尊の石像を建て、その子の冥福を祈ることが行なわれた。

七　薬師信仰

お薬師さまといって信仰される仏は薬師瑠璃光如来のことで、大医王仏とも、医王善逝とも呼ばれる。

十二の誓願を発して、衆生の病源を救い精神的の無明の疾を治すという。（薬師瑠璃光如来本願功徳教）

わが国では仏教渡来とともに厚く信仰されるものが多く、新四国霊場にもこの仏をまつるのが多く、御子柴の薬師堂には、薬師如来の神力をもって行者を守護するという十二神将がまつられている。

八　十二神将

薬師如来の十二の大願に応じて現われた分身であるといわれる。（十二大将発願護持経）昼夜十二時を守護する神とされ、また一切衆生の八万四千の煩悩を転じて、八万四千の菩提を成ずる薬師如来の方便力を表わすものともいわれる。十二時の時を守護するというところから子の刻丑の刻というように十二支をそれぞれ頭に拝する神将となって、それぞれの年まわりに応じての守護神ともいわれるようになった。

後　記

村誌編纂事業を始め、その基礎となる資料の収集調査を進めているうち、編纂委員はまず、村内の実情把握が第一に必要であることを痛感した。そこで各部落の有識者に案内を願って実地を踏査し、現状を見て廻った。

この調査によって明らかになったことは、村内のことを案外知っていないことと、身近な村内のことを知りたいという要望の強いことであった。地方の時代といわれ、地方を大切にする風潮が盛んであるとき、郷土を改めて見直すには、身近な村の史跡についてその由来や価値を知ることが何よりも重要であると考えた。そこで編纂委員会は、実地踏査をもとに、古記録や伝承によって調査研究したもののうち、歴史的遺産に限ってこれをまとめ、とりあえず村人の要望にこたえるとともに、村誌編纂の土台にするためこの小冊子を発刊することにした。

さて、いよいよこれをまとめようとすると、古記録や伝承にあるものが、時代の変遷によって形は変わり、或は土に埋れ、雑草に覆われなどして、なかなか確かなものとして把握し、記述し難いものが多かった。この調査によって明らかになったことは、村誌の体系のうちへそれぞれの位置に述べられることになる。こゝに掲載されたものが、或いは、正鵠を失い、誤認があり、軽重に適正を欠くものがあるかという恐れがないわけではない。「注」は原拠をそのまま載せたので旧字体・旧かなづかいの文章で、しかも文字が細かく読みにくいから「注」は飛ばして本文だけで一応の理解ができるようになっている。何分身近なものであるので、この記述をたよりに認識を深めて頂き、誤りは指摘して頂き、より正確なものにしたいので、大方の御叱正を期待して発刊するものである。

昭和五十四年十月

唐沢正国
原　平夫

主なる執筆者

久保	堀 知哉	馬場利光	堀 巌 倉田友雄
中込	上田喜計	中沢和夫	
塩ノ井	征矢 鑑	征矢 憲	加藤千代人
北殿	藤森 佶	杉沢 崇	倉田高明 春日 正 原 平夫
南殿	清水一清	有賀士郎	
田畑	日戸武彦	耳塚正秋	松沢英太郎
神子柴	武田三郎	高木清幸	
沢尻	唐沢 勇		
南原	立石 威		
大芝	宇治由一		
大泉	清水守人	原 正寿	清水博之助 唐沢正国
北原	北原哲郎		
全村	征矢 憲	原 正寿	清水守人 唐沢正国 原 平夫
写真	伊東 宏	唐沢正国	原 平夫 有賀殿夫
附図	日戸武彦		

南箕輪の史跡

昭和五十四年十二月一日印刷
昭和五十四年十二月十日発行

編纂 南箕輪村誌編纂委員会
発行人 南箕輪村誌刊行委員会
印刷 藤原印刷株式会社
松本市新橋七―二一
電話 〇二六三―三三―五九二